コウデリアが立つと間もなく、姉達の善からぬ性質は其の本性を現はし始めた。リア王は長女ゴネリルと相談の上一緒に住んだ最初の一ケ月がまだ終らないうちに、約束と實行の間に非常な相違のあることを知つた。不心得なゴネリルは今は讓り受けられるものは悉く讓り受け、王冠さへも王の頭より奪ひ取つてゐたが、父が猶ほ自分は王であると考へて喜ぶために保留して置いた僅か許りの王權の殘りに就いて不平をこぼし始めた。彼女は父王と百人の騎士を見ることが厭でならなかつた。父親に逢ふ度びに澁面を作つてみせた。老王が逢ひたいと云ふ時にはいつも作病をし、又は何とか工夫してそれを免かれた。彼女は今は老齢の父を無用の重荷と思ひ、其の從者を不必要な入費のかゝる者だと考へてゐるのは明かであつた。只に彼女が王に對して義務を盡すことを忽かせにするやうになつた許りでなく彼女の下僕達までも、見樣見眞似で、或は內密に言ひ付けられて（と思はれる）故意に王を粗畧に取り扱ひ、其の命令に從はなかつたり、尙ほ進んで其の命令を聞かぬ振りしたりした。リアは娘のこの變る態度に氣が付かぬではなかつたが、出來る限りは見ぬ振りをしてゐた。誰しも自分の過失や頑固の爲めにわが身に振りかかつて來た不快な結果を見る事は好まないのだから。

「虛僞なものや不實の者は、厚遇を受けても好意を持つやうにはならないものであるが、これに反し眞の愛や眞情のある者は、虐待を受けても其の志を曲げないものである。」この事は善良なケント伯の場合によく當てはまる。伯はリア王より追放を受け、英國內に留つてゐたならば其の命は亡きものと

されてゐたにも係らず、主君の爲めとならば忠義をつくす機會のある限り國內に留つて、如何なる憂目にも逢はうと決心した。「時として此の氣の毒なる伯爵は如何なる卑しい手段も假裝も餘儀なくとらなければならなかつた。しかし其も義理ある王に奉仕をなす爲めとあれば、決して卑しい事でも價値のない事でもなかつた。」伯はこれまでの威嚴も榮華も投げ捨て、一下僕の變裝をして王に奉公を求めた。王はこの變裝の下僕をケントと知る由もなく、只伯がなした答の卒直さ、無遠慮さが氣に入つて、（其の答は、王が氣持の惡くなるほど厭に思ふ油のやうに滑らかな阿諛とは非常に相違してゐた。娘達は其の言葉通りに實行しなかつたのである）直ぐ樣契約がなり、ケントをば其の云ふ儘にケイアスといふ名前で、かつては自分の最大の寵臣、威風堂々たるケント伯爵とは夢にも知らず、一下僕として雇ひ入れた。

「ケイアスは間もなく王に對して愛と忠義とを現はす機會を得た。其の日ゴネリルの執事が、リアに對して無禮な振舞に及び、失禮な樣子や言葉を吐いたので、これは內々女主人の指圖を受けて遣つた事に疑ひもなかつたので、ケイアスは、これほど明ら樣に主君に對して恥辱を浴せるのを聞くに忍びず、矢庭に小股を掬うて有無を云はさず其の無禮な男を溝の中に蹴り込んだ。此の忠實な奉仕の爲めに、リアは益々彼を愛するやうになつた。

「もとよりリアの味方は此のケント許りではなかつた。各自其の分に應じて可哀さうな道化者のやう

な取るに足らぬ者まで、其の愛を現はすことが出來た。此の道化者はリアが未だ朝廷を持つてゐた頃抱へてゐた道化者で、當時の王候貴族の習慣で、面倒な事件が起つた後で鬱を晴らす爲めに道化者を抱へて置くのであつた。で此の可哀さうな道化者は、リアが冠を讓つた後迄王に從ひ、其の頓智によつて王の機嫌をとつて居た。それでも時としては、位を讓り、すべてのものを娘達に分ち與へてしまつた王の無分別を嘲笑せずには居られなかつた。そんな時には節面白く、姫君たちは、

俄かの喜びにうれし泣き
かばかりの公が隱れん坊遊びをし給うて
道化者の中に伍し給ふをば
彼悲しんで歌ひけり

と云ふのであつた。此の愉快な正直な道化者は、澤山知つてゐる歌や亂暴な言葉でもつて、ゴネリル等が居る前でさへ、胸を刺すやうな痛い嘲弄や皮肉を言つて自分の心持を述べるのであつた。王を籬雀に譬へて、折角骨を折つて育てた杜鵑の子が、終には其のお禮に頭を嚙み切るとか、驢馬のやうな馬鹿者でも、荷車が馬を牽くことの愚かさは知つてゐるだらうとか（後から行くべきリアの姫達が、今は父の上に位してゐるのを意味したのである）リア王は最早リア王ではなく、リア王の影に過ぎぬとかと諷刺した。無遠慮な此の言葉の爲めに、笞で打つぞと脅かれた事も一度や二度でなかつた。

リア王が漸く氣付き始めた冷淡と敬遠だけが、此のお人好の父が不孝の娘から受けとるすべてのものではなかつた。彼女は明ら樣に、若し王が猶ほ百人の騎士を從へて置くといふ事を主張すれば、此の宮殿に住むことは不都合である事、これ丈けの人數を置くことは無用で、費用のみかかり、放埒や宴會を行ふ以外には役にも立たぬ故、人數を減して、王の年齡に相應する位の老人のみ殘し置くようにと願つた。

リアは初めは、自分の耳や目を信ずる事が出來ず、またかやうな不深切な事を申出るものが自分の娘であるとも思はれなかつた。自分から王冠を讓り受けた娘が、父の從者の數を減して、老人に對する相當の尊敬を拂ふ事さへ吝しまうとは信じられなかつた。しかし彼女はあくまでこの不孝な要求を主張したので、老王も非常に腹を立て、娘のことを貪慾な鳶と呼び、彼女の云ふ事は皆虛言であると言つた。實際、百人の騎士は揃つて品行正しく禮儀に嚴格であつて、義務を盡すことは極めて忠實で彼女が云つたやうに放埒、宴會に耽けるやうな事は決してなかつたのであつた。王は早速馬の仕度を言ひ付けて、百人の騎士と共に、二番目の姫のところへ行かうと思ひ立つた。そして娘の亡恩を責め石のやうな心を持つてゐる惡魔で、海に住む怪物より恐ろしい心の娘だと罵り、聞くも怖ろしい言葉で長女のゴネリルを呪つた。それは彼女が決して子供を授からぬやう、若し與へられても、娘が王になした嘲弄と悔辱とを彼女に仕返へすよう、また恩知らずの子を持つのは、蛇の齒よりも怖ろしいも

のであることを悟るようにと祈つたのであつた。ゴネリルの夫アルバニイの公爵は、自分も此の不深切な取扱ひに加擔してゐると思はれてはと、王に辯解を始めたが、リアはそれに耳も籍さず、怒つて馬に鞍を置けと命じ、從者を引きつれて二番目の姫の宮殿へと出發した。リアは今コウデリアの過失（若し過失であるとすれば）を思ひ出して、それが姉のそれと比較してみてどんなに些少なものであつたかを思ひ一人涙に暮れた。王はゴネリルのやうな女に男子を泣かせる程の權力を與へた事を恥かしく思つた。

リイガンと夫は榮華と權勢を極めて、其の宮殿に暮らしてゐた。リアは前以て、召使のケイアスに後から行く王と其の從者達を迎ふる用意をするようにと手紙を持たせてやつた。一方ゴネリルの方でも前以てリイガンの許へ手紙を持たせてやり、父の我儘と不機嫌を非難して、今父が伴れて行かうとする大勢の從者を受け入れないやうにと忠告した。此の使者は恰度ケイアスと同時に到着し、二人はばつたり出逢つた。此の使者こそ誰あらう、ケイアスの舊敵、ゴネリルの執事で、リア王に對して無禮な擧動をした爲め足を掬つてやつた事のある男であつた。ケイアスは、此の男を見るのが厭で堪らず、又何の用があつて來たのかと疑ひ、彼を罵つて決鬪を申し込んだが拒絶されたので、ケイアスは正直のあまりかつとなつて、惡事の傳言を運んだり、小策を弄したりする者に相應しいほど彼を毆り付けてやつた。この事をリイガンと其の夫が聞いて、本來ならば父王からの使者であるから相應の敬

意を拂ふべき筈のものを、ケイアスに足枷を飲めるやうに命令した。で王が宮殿に這入つてきて最初に見たものは、實に此の恥づべき狀態にゐる忠僕ケイアスの姿であつた。

これは歡迎される事とばかり思つて來た王にとつての凶兆であつた。惡い事は續いて起つた。王は娘夫妻は何うしてゐるかと尋ねると、二人は終夜旅行をしたので疲れて會へぬとの事であつた。王はとう〳〵怒つて何うしても逢ふと主張したので、二人は澁々出て來て父を迎へたが、其の中には憎むべきゴネリルも一緒に交つて居た。彼女は前以てやつて來て、父の話をし、妹にも父王を憎ませようと巧らんだのであつた。

此の有樣を見て老王は非常に立腹した。殊にリイガンが姉の手を執つてゐたので猶更腹を立てた。王はゴネリルに向つて、此の老王の白い髭を見て恥かしくはないかと言つた。するとリイガンは父に向つて、も一度姉と共に宮殿に歸り、從者を半分に減し、姉の赦を乞ふて平和に暮らした方が宜からうと勸めた。王も早や老齢で分別も無くなつてゐるので、彼より思慮深い者の指導と支配を受ける必要があるからと云つた。リアはわが膝を折つて自分の娘の前に衣食を乞ふことが、どんなに馬鹿氣た事であるかと言つて、自分はゴネリルと一緒には歸らぬ、此處に百人の從者と共に滯在するつもりだと言つて、そのやうな不當の厄介にはならぬと論じた。又リイガンはよもや自分が王國の半分を分ち與へた事を忘れては居まい。リイガンの眼は姉の眼ほど鋭いところがなく、深切で優しさうだからと

も言つた。從者を半分に減じてゴネリルの所へ歸る位なら、寧ろ、フランスに渡つて、何も與へなかつた末娘の夫のフランス王に憐れな年金を貰つた方がいゝとさへ言つた。

王が、姉娘のゴネリルの許で受けた待遇より、もつと深切な待遇をリイガンの許で受けようと期待したのは、何かの間違ひであつた。リイガンは不孝競べに姉に負けてなるもかと云ふように、五十人の騎士を從者にして置くのは多過ぎる、二十五人で恰度いゝと公言した。これを聞いたリアは殆んど胸も裂けるやうな思ひで、ゴネリルの方を向き、五十人は二十五人の倍だから、ゴネリルの愛もリイガンの倍に相違ないから一緒に歸らうと言ひ出した。しかしゴネリルは又口實を作つて、自分の召使か、妹の召使かに仕へさせる事も出來るのであるから、二十五人は愚か、十人でも五人でも多過ぎると言つた。そして此の不孝な娘達は、愛し育てて呉れた老年の父に殘酷にするのを競爭する樣に、父が一度は王であつた事を示す名殘の從者や尊嚴を（それも嘗て一國を支配したものに取つては十分でない程の）段々と減してしまはふとするのであつた。華やかな從者が幸福にはなくてはならぬものではないが、王より乞食へ、數百萬人を統師したものが唯一人の從者も無い身となるのは、あまりに辛い變り方である。王の場合では從者がなくて苦しむ事よりも、從者を奪はうとする娘達の恩知らずに、深く胸を刺されたのである。此の二重の虐待と、王國を讓り渡した自分の愚かさとの嘆きで、彼は次第に正氣を失ひ、自分でも分らぬ事を口走り、この不人情な惡女どもに何時かは仇を返して、世の人が

怖れるやうな見せしめにしてやると誓つた。

王が自分の弱い腕では出來さうにもない事を言つてゐる間に、夜は迫つて、雷雨を伴つて激しい嵐がやつて來た。姉妹は倦くまで從者を廢止することを主張して止まぬので、王はこのやうな恩知らずの娘共と同じ屋根のもとに居るよりも、戸外の激しい嵐の中に居る方がましだと、馬の用意をさせた。姉妹は、頑固な者が好んで求める害は正當な罰だと云つて、王を爲るが儘に嵐の中に出してやり、戸を閉め切つた。

風は愈々吹きつのり、雨は益々激しくなつた。此の時老王は風雨と戰ふ爲めに戸外へ出て行つたが其の雨風も娘達の不深切ほど鋭くはなかつた。數哩の間、茂み一つなく、暗い夜の激しい嵐に曝されて、王は廣野の中を當もなくさまよひ、風や嵐と戰つた。王は風に、此の地上を海の中へ吹き飛ばせよ、海の波よ、この地上を呑むまで高まれよ、さすれば人間といふ恩知らずの動物のかたみも殘るまいからと願つた。王には今は唯、かの可哀さうな道化者の他一人の家臣も從いて居なかつた。此の道化者はまだ王の傍に居て、いろ〳〵愉快な思想で、此の不運を拂ひのけようと努め、泳ぎまはるには不都合な晩だから、王樣は矢張り宮殿へ行らつしやつて、姫君の許しを得られた方が宜からう。

さり乍ら僅か許りの智慧しかない身は

ハレヤレ、雨はふるし風は吹く、
己の運に安んぜねばならぬ
たとへ毎日雨は降るとも

と歌ひ、こんな晩は婦人の誇を冷ますに持つて來いの晩だ等と言つた。

かつては一國の大王であつた身が、このやうに情けない供をつれてさまよふうちに、今はケイアスとなつてゐる忠義なケント伯と巡り逢うた、王は彼を伯爵とは知らなかつたけれど、伯はいつも王の身邊を去らなかつたのである。伯は言つた。

『あゝ、殿下は此處に御出で御座いましたか、夜が好きな動物でもこのやうな晩は好みませぬ。この怖ろしい嵐の爲めに獸共もみな穴の中に這入つて居りまする。人間の天性は苦痛や恐怖に耐えることが出來ませぬ。』

王はこれに反對して、大きな心配事がある時は、小さい心配事はさほど感じないものであると言つた。心が安樂な時には、身體に暇が出來て弱くなる、王の心の中の嵐は、心臓を打つ感覺の外の凡ての感覺を奪ひ去つてしまつた。王はまた親不孝のことを話して、それは食物を運んでくれる手にかみつく口のやうなものだ。兩親は子供にとつて手足あり、食物であり、其他あらゆるものであるからと

言つた。

併し忠實なケイアスは、王にいつ迄も戸外に居られぬやうにと熱心に說いて、とう〳〵王を荒野の中に立つてゐる小さな見すぼらしい小屋の中に入れることにした。道化者が先づ其の小屋に這入つたが、急に、幽靈が居ると聲を立て、恐れおののいて歸つて來た。それはよく調べて見ると、雨風を避けて小屋にもぐり込んだ憐れなベドラムの乞食が、幽靈の眞似をして道化者を驚かしたのに過ぎなかつた。此の乞食は元來、本當の狂人であるか、または同情深い地方人から物を强請するのに都合の宜いやうに狂人の眞似をしてゐる者かで、自分の事を憐れなトムとか憐れなタアリグッドと稱して、『どうか憐れなトムに御惠みを。』と言つて、諸國を經巡り、自分の腕にピンや釘や迷送香の刺などを刺して血を出し、或は祈禱や狂人の呪文をかりて恐ろしい動作をして、無智な田舍人の心を動かし、或は脅かして施を受ける連中の一人であつた。王は此の乞食が、其の裸體を隱すために腰に一枚の毛布を纏うた憐れな姿を見て、此の男もまた娘に何もかも讓つて、好んでこんな悲慘な狀態になつたのだらうと思はずには居られなかつた。王は、不孝な娘を持つた爲めでなければ、このやうな憐れな狀態に陷るものでは決してないと信じてゐた。

この事や、また王の亂暴ないろ〳〵の言葉から察して、忠義なケイアスは、王が姫達の虐待の爲めに明らかに本心を失つて狂氣になつた事を知つた。此の立派なケント伯の忠節は、玆に初めてこれ迄

にない奉仕を表はす好機會を得た。彼は、未だ殘つてゐる忠義の臣の手助を籍り、夜明け頃には、王の身體をドウヴアの城に移した。この城にはケント伯としての彼の友人や恩顧の者が住んでゐた。つゞいて伯は自らフランスに渡り、コウデリアの宮廷へ急いで、非常に人を感動させる言葉でつぶさに父王の憐れな狀態を述べ、また姉君達の無情を手にとるやうに述べた。そこで善良な孝心深いコウデリアは涙を流して、此の殘酷な姉達と其の夫を懲らしめ、今一度父王を元の王位に復さしめるに足る丈けの兵力を率ゐて英國に渡る許しを夫に懇願した。コウデリアは其の許しを得たので、早速出發し王軍を率ゐてドウヴアに上陸した。

リアは狂氣の間、深切なケント伯が世話するやうにと附けて置いた看護人の眼を盜んで逃げ出し、今は全く狂人となつて、頭には畑で拾つた藁や亂麻や雜草などで編んだ冠を被り、怪し氣な歌を唱ひ乍らみじめな有樣で、ドウヴア附近の野原を彷徨つてゐるのを、コウデリアの侍臣が見附けた。コオデリアは早速父王に逢ひたいと熱望したけれども、醫者の忠告で、王に與へられた藥草の効果と睡眠とで王が安靜に復すまで會見を延ばすことにした。コウデリアは、父の回復の爲めには、持つてゐる黃金や寶石の凡てを醫者に與へることを約束した。醫者の優れた治療のお蔭で、リアは間もなく姫と會へるまでになつた。

此の親子對面の場はいかにいぢらしい光景であつたらう。老王は嘗ては非常に愛したわが子を玆に

再び見る喜びと、僅かばかりの過失の爲めに機嫌を損じて追ひ出した娘から、このやうな孝行を受ける恥の思ひとで胸が一杯になつた。此の二つの感情と未だ十分癒つてゐない病氣との葛藤で、半分狂つた頭腦では、自分が何處に居るのやら、このやうに深切に接吻して話しかけて呉れるものは誰やら時としては分らない事さへあつた。それから王は側にゐる者に、此の婦人は娘のコウデリアと思ふが間違つても笑つて呉れるなと頼んで、王はわが子に赦しを乞ふ爲め跪いた。この間コウデリアも父に祝福を乞ふ爲めに跪いてゐたのだが、父が娘の前に跪くのは相應しくない事である、自分がさうするのは王の娘であり、眞の子供のコウデリアである故當然の事であると言つた。そして（彼女の言葉で云へば）姉の不深切を吸ひ取る爲めに父に接吻をして、そのやうな嵐の晩には、假令自分に嚙みついた敵の犬であつても家の中に入れて暖めてやるのに、髭も白くなつた老いたる深切なわが父を、寒い戸外に投り出すとは、顧みて恥かしくはないだらうかと言葉巧みに述べ、また彼女が態々父を助ける目的でフランスから來た事を話した。王は、自分は竈祿して爲たことも分らぬ程であるから、以前の事は忘れて赦して貰ひたい。コウデリアこそ自分を愛して呉れる理由は一つもないが、姉達はさうでないのにと言へば、コウデリアは、いえ〳〵左樣ではありませぬ。自分には姉達以上に愛しなければならぬ理由がありますと答へた。

さて此の老王の事は、孝行な、愛すべき姫の保護に任せて置いて、此の姫と醫者とは、姉娘達の殘

酔の爲め、激しく心を掻き亂され傷き狂つてゐた王の感覺をば、藥と安眠の力を借り首尾よく回復させることが出來たのであるが、元に戻つていささか此の殘酷な姉娘たちの事を話さう。

「生みの親に對してさへもこのやうに不眞實であつた恩知らずの人でなしが、どうして其の夫達に對して貞節であり得よう。彼等は間もなく夫に對して愛と義務の樣子を裝ふことにさへ倦き、公然と其の愛を他の男に注ぐやうになつた。しかも此の不義の愛の目標が偶然にも同じ男であつた。

その男はエドマンドと呼ぶ故グロスタ伯爵の私生兒で、奸計を以て正當の嗣子である兄のエドガアから家督相續權を奪ひ、不正手段に依つて今は自身が伯爵となつてゐた。ゴネリルやリイガンのやうな惡人の戀の目標としては、實に適當な惡黨であつた。恰度此の時、リイガンの夫であるコウンウォールの公爵が死去したので、リイガンは直にグロスタ伯爵と結婚する意志を發表した。これを聞いた姉のゴネリルは嫉妬の情に燃え、ある手段で以てリガインを毒殺してしまつた。奸惡な伯爵は妹リイガンと同樣に、姉のゴネリルに對しても幾度か愛を誓つてゐたからであつた。然し彼女の惡計は露見し、また伯爵との不義が夫公爵の耳に入つて、これらの爲めに彼女は牢屋に投ぜられた。ゴネリルは失戀と憤怒の爲め、其の後間もなく自殺を遂げた。このやうにして天の審きは遂にこの邪惡な二人の娘の上に落ちたのであつた。

人々は此の事件を見て、天の審きが姉妹の身にふさはしい當然の死となつて現はれたのを感心したが、忽ち其の眼を轉じて、若くて淑德の譽高かつたコウデリアの悲しい運命を見、同じ天の力の不思議な現はれを訝かつた。姫は其の身の善行によつて、非常に幸福な最後を遂げるだらうと思はれてゐたのであつた。純潔と敬虔とは必ずしも此の世に於て成功しないと云ふ事は、痛ましい事實である。これより先き、ゴネリルとリイガンが奸惡なグロスタ伯を將として送つた軍隊は終に勝利を占めた。そして此の惡伯爵は王冠を獲る妨げになる者を好まなかつたので、不正手段を弄してコウデリアを獄中にて殺した。かくして天帝は、彼女を孝行の立派な手本として世に示した後、うら若い身を御許に引き取り給ふたのである。リアも間もなく孝女の後を追うた。

王が死ぬ前に、姉娘達の虐待のそも〳〵初めからこの悲しい最後に至るまで、絶えず王につき添うて來たケント伯は、どうかして王に、ケイアスの名前で仕へて來た者は自分であつた事を分らせやうと努めた。併し心配に狂つたリアの頭では、一體それは何の事であるか、またケントとケイアスが何うして同一人であるか了解する事が出來なかつた。そこでケントは、このやうな時にくど〳〵と說明して王を煩はす必要もないと考へた。王は間もなく息を引きとつた、そして此の忠臣も寄る年波と、老王の薄幸とを嘆くあまり、軈て墓場へと王の後を追うた。

此の後、天罰が如何にしてグロスタ伯の上に下されたか、また其の奸計が露見して、兄である正當の伯爵との一騎打ちで殺された事や、ゴネリルの夫であるアルバニイの公爵が、コウデリアの死に關

係もなく、別にリア王を虐待せよと妻を唆かした譯でもなかつた所から、王の死後遂に英國の王位に就いた事などは玆に語る必要もあるまい。此の物語の主眼とする事件の主なる人々、リアと其の三人の姫達は既に亡き人となつたからである。

マクベス

ダンカン柔和王がスコットランドを治めて居た時、マクベスと云ふ偉大な領主、卽ち貴族があつた。このマクベスは王の近親であり、又戰爭に於けるその勇氣と功績とのために、宮廷に於ても大變重ぜられて居た。近頃も大勢のノールウェイ軍に援助されて居る謀叛軍を打滅してその一例を示した。

二人のスコットランドの將軍、マクベスとバンクォウとが大戰爭に勝利を得て歸る時、彼等の路は荒野にあたつて居たが、そこで二人は、三人の女のやうな姿をした見なれぬ者が現れたので立ち止まつた。その者共は女のやうではあるが鬚が生へて居り、またそのしなびた肌と、奇妙な服裝とが彼等を此の世の者とは思はせなかつた。マクベスがまづその者共に言葉をかけたが、その時彼等は明かに氣にさはつたらしく、默れと云ふしるしに、各自その皮計りの唇にひゞの切れた指を當てた。そして彼等の第一の者が、グラームズの領主と云ふ敬稱をつけてマクベスに挨拶した。將軍は自分がかやうなものに知られて居ると云ふ事を知つて少なからず驚いたが、然しその第二の者が續いて、彼にはさう呼ばれる資格のないコーダの領主と云ふ敬稱をつけて挨拶した時は一層驚いた。そして更に第三の者は「未來の王樣萬歲」と彼に向つて言つた。かうした豫言的の挨拶が、王子達が生きて居る限りは王位につく事は望めない事がよく分つて居る彼を、仰天させたのも無理はなかつた。それからその者共はバ

ンクォウに向つて、一種謎の樣な言葉で、バンクォウはマクベスより劣るがマクベスより偉大であり、マクベス程幸福ではないが、マクベスよりはるかに幸福である！　と云ひ、また、彼自身は王位につく事は出來ないが、その子孫はスコットランドの王になると豫言した。それからその者共は空氣と化し消え失せた。それによつて將軍はその者共が、魔女か巫女であつた事を知つた。

二人が此の不可思議な出來事を考へ乍ら立つて居た時王より使者が到着したが、その使者は王からコーダの領主と云ふ位をマクベスに授ける權力を委ねられて居た。魔女達の豫言と如何にも不思議に一致した出來事がマクベスを驚かせたので、彼は使者に返事をする言葉も出て來ず呆然として立つて居た。そして此の瞬間に、彼の心に、第三の魔女の豫言もこんなふうに成就し、いつかは王となつてスコットランドを治めるやうになるかも知れぬと云ふ野心がむら〳〵と起つた。

バンクォウの方に向いて彼は云つた。

『魔女共が私に對して豫言した事がこんなに當つたのだから、あなたの子孫も王になるだらうとは思ひませんか。』

『豫言があたると云ふ希望が、あなたをかつて王位を得やうとさせるかも知れません。けれども、かうした惡魔の召使は、しばしば、人を欺いて重大なる事件を起させるために、小さな事件で眞實を告げるものです。』とバンクォウが答へた。

だが魔女どもの邪悪な暗示は、マクベスの心によほど深く染み込んで居たので、彼は全くバンクウの深切な警告に耳を傾ける事が出來なかつた。その時以來彼はどうしてスコットランドの王位を獲得するかと云ふ事に心を集中した。

マクベスには妻があつたが、その妻に彼は魔女共の不思議な豫言の事及びその豫言の一部分が成就した事を話した。彼女は善くない野心深い女で、彼女の夫と彼女自らが偉大になる事が出來るならばその手段なぞは大して問題にしなかつた。彼女は、血を流さねばならぬ事を思つて良心の呵責を感じ、其の目的もたゆみがちになるマクベスを鼓舞し續け、あの豫言を實現させるのに絶對に必要な順序であるとして王を弑する事をすゝめてやまなかつた。

さてダンカン王は、畏くも主だつた貴族を訪ねて優渥な言葉を賜はる習慣であつたが、たま〳〵此時、二人の王子、即ちマルコウム、ドナルベイン及び數多の貴族や從者を從へて、マクベスの軍功を賞するために彼の邸に行幸になつた。

マクベスの城は景色のよいところにあり、あたりの空氣は爽かで新鮮であつた。それはマアトリットと云ふ一種の燕（註、初夏に南方歐洲から英國にやつて來る鳥）が長押の中層と云はず、控壁と云はず、都合のよい處へは何處へでもその巣を造つて居るのを見ても判るのである。と云ふのは此の種の鳥が繁殖し集る處は、空氣がよいと云はれて居るのである。王は此場所が非常にお氣に召して入城され、

又女主人役なるマクベス夫人の、注意の届いた應接や歡待にも同樣に滿足されたが、夫人は陰險な企圖を微笑を以て覆ふ術を知り、實際はその蔭に居る蛇であるのに、無邪氣な花にやうに見せかけることが出來たのである。

旅の疲勞のために、王は早く床に就かれ、その寢室には（當時の習慣として）寢室づきの侍者が二人王の傍に眠つた。王はその歡待を事の外喜ばれたので、寢室に退く前に重だつた役人達に贈物を與へられ、就中マクベス夫人へは、最も深切な女主人役だと挨拶して高價なダイヤモンドを贈られた。

さて時は眞夜中であつた。世界の半分の上では自然は死んで居るやうに見え、惡い夢は眠つて居る人の心を苦しめ、狼と人殺し以外には出て居る者のない時である。これがマクベス夫人が王の弑逆を企てるために眼を醒した時であつた。夫の性質にはあまりに人情があり過ぎて、企圖した弑殺が出來ないと云ふ懸念がなかつたなら、夫人は女性にとつてかくも怖しい行爲には携はらなかつたであらう。夫人は、夫が野心家ではあるが、また小心で、法外の野心には結局は伴ひがちである大罪を犯すだけの覺悟が出事て居ない事を知つて居た。彼女は夫が暗殺を承諾するやうに說得しては居たのであるが、しかしその決心の程を疑ひ、夫の生れもつた溫和な性質（彼女自らの性質よりももつと人情があつた）が邪魔をして、目的を達する事が出來なくなりはしないかと懸念した。そこで、短劍を手に握つて、夫人は王の寢室に近づいて行つた。かねて用意して、寢室附の侍者に酒を勸めて置いたので、彼等は

泥醉し勤務の事も忘れて眠つて居た。ダンカンは旅の疲れで熟睡して居られた。夫人が王をぢつと見ると、その寢顏に、何處か夫人自らの父親に似たところがあつて、それで夫人は進んで事をする勇氣が出なかつた。

夫人は夫と相談するために引返した。マクベスの決心はもうぐらつき始めて居た。彼はかゝる行爲をしてはならない十分な理由があると考へた。第一に、彼は王の臣下である計りでなく近親であり、またその日の招待役なので、禮儀として、王を弑せんとする者のない樣に表を護り、自らは小刀も身につけてはならないのがその務なのである。次にこのダンカン王が如何に慈悲深く、如何に臣下に寬大で、如何にその貴族に對して、殊にマクベスに對して、愛情のある王であつたか、またかゝる王には特種の天の加護があり、そして臣下たるものはその弑逆に對しては復讐すべき義務さへあると考へたその上に、マクベスは、王の恩寵によつて、あらゆる種類の人々を通じて尊敬されて居るのに、どうしてこれらの名聲をかくも忌まはしい暗殺と云ふ名によつて汚されようぞ！

夫人が相談するために引返して來た時、夫はかやうに良心になやまされて、善心に立ちかへらうとして居り、もうこれ以上事は運ぶまいと決心して居るところであつた。けれども夫人は容易に邪惡な目的を翻すような婦人ではなかつたので、なぜ彼がその企圖した事からしりごみしてはならないか、また如何にその行爲の容易であるか、如何に速かにそれが終つて了ふか、又如何に短い一夜の行爲が

二人の未來の日夜に王權と王位とを與へて異れるかと云ふ事を、理由に理由を重ねて說き、彼の心に彼女自らの精神の一部分を染み込ませるような言葉を彼の耳に注ぎ始めた。それから彼女は夫が決心を變へた事を蔑み、その無節操と卑怯とを責め、そして、彼女は乳を飲ませた事があり、また自分の乳を呑んだ子を愛すると云ふ事は、如何に情深い事であるかを知つて居るが、然し、夫が暗殺をする事を誓つたやうに、彼女がさうしようと誓つたら、その乳呑兒が彼女の顏を見てほゝ笑んで居る時にでも、それを胸からもぎ離し投げつけて、その腦味噌を出して見せると云つた。それから彼女は、暗殺の罪を、醉ぱらつた眠がりの侍臣に塗りつける事の如何に容易であるかといふ事をも附け加へて云つた。そして、舌の勇氣をふるつて、夫の鈍りがちな決心を徵したので、マクベスは、再び血醒い仕事をするために、勇氣を振ひ起した。

そこで、手に短劍をとり、暗闇の中を、ダンカン王の寢室へと忍び寄つたが、歩いて行く時に、柄は彼の方に向き、その刃と切先とには血の滴がついて居る短劍が見えると思つたが、彼がそれを捕へやうとした時、それは空氣、卽ち彼の熱し惱まされて居る腦髓と、彼の今とりかゝつて居る血醒い仕事とが產んだ幻影に過ぎなかつた。

この恐怖にうちかつて、彼は王の寢室に入り、一擊の下に王を弑した。丁度彼が暗殺を終へた時、この寢室に寢て居た侍臣の一人が、夢で笑ふと、他の一人が「人殺し」と叫び、その聲で二人共眠を

醒した。が、彼等は短かい祈りをし、一人が「神よ吾等を祝福し給へ」といふと、他の一人が「アーメン」と應じて、お互に挨拶して再び眠つた。マクベスは、それを聞き乍ら立つて居たので、一人が「神よ我等を祝福し給へ」と云つた時「アーメン」と云はうとしたが、最も祝福が必要であるにも係らず、言葉は喉にかゝり、それを發音する事が出來なかつた。

再び彼は、「もう安眠はない、マクベスは生命を養ふ眠を、罪のない眠を殺してしまつた。」と叫ぶ聲がきこえると思つた。その聲は尙ほ家全體に向つて、「最早安眠はない。」と叫ぶ。「グラームズは眠を殺して了つた。それ故コーダにはもう安眠はない。マクベスに安眠はない。」

かうした怖ろしい夢想に捕はれたまゝ、マクベスは耳をかたむけて聞いて居る妻の處へ歸つて行つた。夫人は夫がその目的を仕損じ、また何か手違をしたのだと思ひ始めた。彼は大變取亂した有樣をして入つて來たので、夫人はしつかりしたところがないと云つて彼を叱り、血に塗れて居る手を洗ひにやつた。その間に彼女は彼の短劍をとりあげて立つた。血を侍臣等の頰に塗つて彼等が犯した罪の如く見せやうと云ふのである。

朝が來た。朝と共に弑殺のあつた事も知れわたつた。これは包み隱しの出來ない事である。そしてマクベスとその夫人は大いに愁傷する樣なふりをし、また侍臣等に不利な證據は（短劍は彼等の傍で發見され、血は彼等の顏に附着して居るのであるから）十分有力であつたけれども、それでも、かや

うな行爲をしさうな動機は、こんなつまらぬ愚かな侍臣がもつて居ると想像されるよりも、マクベスがより以上有力にもつて居ると想像されたので、懸疑はすべてマクベスの身の上に集まつた。そこでダンカン王の二王子はその場を逃れ去つた。兄のマルコウムはイングランドの宮廷に身を寄せ、弟のドナルベインはアイルランドへ落ち延びた。

王位をつぐべき王子達がかやうにして王座をあけたので、次に來る後繼者として、マクベスが王位につき、かくして、魔女等の預言は文字通りに成就されたのである。

かゝる高位に昇り乍らも、マクベスとその后は、魔女等のいま一つの預言、即ちマクベスは王とはなるけれど、次に王統をつぐものは彼の子供ではなくて、バンクォウの子孫であると云ふ預言を忘れる事が出來なかつた。この事を考へ、また、血をもつてその手を汚し、かゝる大罪を犯したのも、たゞバンクォウの子孫を王座に登らしむるにすぎないのだと思ふと、無念で口惜く、遂に、自分達の場合にはあんなに不可思議に實現したのであるが、魔女等の預言を無効にするために、バンクォウとその子を暗殺しようと決心した。

二人は、此の目的のために盛宴を催し、重だつた領主をみなそれに招待した。就中バンクォウとその子フリーンスは特別鄭重に招待された。その夜宮殿に行くためにバンクォウが通る事になつて居た路筋には、マクベスの下知をうけた刺客が待ち伏せて居て、バンクォウはその手に斃れたが、フリー

ンスはそのたちまはりの最中に遁れ去つた。このフリーンスから、後にスコットランドの王座を充し、遂にスコットランド王ヂェイムズ第六世とイングランドの第一世を兼ねて、イングランド、スコットランド兩王統を統一した君主に至る王系が出たのである。

夜宴の席で、后は、その立居振舞は此の上もなく愛敬がありまた上品であつたが、出席したものすべてをなづけるやうに、禮儀正しく、萬事に心を配つて女主人役を務め、マクベスも領主や貴族達と寛いで話し、もし自分の親しい友人であるバンクォウが來て呉れたら、國中の歴々の人達はみな自分の家に集まつた事になるが、それでも、バンクォウに何か不幸が起つて、それを悲しむよりはむしろ、その怠慢を咎める方がよいと思ふといふ事を云つた。丁度さう云つた時、彼が暗殺させたバンクォウの幽靈がその室に入つて來て、丁度マクベスが掛けようとして居た椅子に腰を下した。マクベスは勇敢で、少しも恐怖する事なく惡魔にでも面接し得る人間ではあつたけれど、このぎよつとする樣な光景を見ては、彼の頰は恐怖に青ざめ、幽靈に眼を据えた儘をの〻いて立つて居た。后と貴族達は、何物も見えないのに、彼が空席を（さう彼等には思へたのであるが）熟視して居るのを見て、精神錯亂を起したのだと思つた。で后は夫を叱り、それは彼がまさにダンカン王を弑しようした時、空中に短劍を見させたのと同じ幻想に過ぎないのだと嗞いた。然しマクベスは尙ほ幽靈から眼を離さず、人々のとやかくと云ふ事には心を留めないで、狂氣じみてはゐるが、然し重大な意味をもつた言葉で、幽靈

に話しかけるので、后はあの恐ろしい祕密の露顯を怖れて、マクベスには病氣があり、時々精神錯亂になやむ事があると云うて、大急ぎで客を辭去せしめた。

マクベスはかやうな怖ろしい幻想に惱み通しであつた　后とマクベスは、夜な夜な惡夢に襲はれた。バンクォウを殺した事よりも、フリーンスの遁走した事がよけいに二人を苦しめた。そのフリーンスを、二人の子孫が王位につく事をさまげる王統の始祖であると考へて居た。かうした哀れな思にさいなまれて、二人の心には平和はなかつたので、マクベスは今一度魔女等を探し出して、如何なる災難が起るかをたづねようと決心した。

マクベスは魔女等を荒野の洞窟に探し出した。そこに彼女等は、彼の來る事を預知して居たので、それによつて惡靈を招び出し未來を占はせる見るも怖ろしい呪物の用意をして居るところであつた。彼等が用ゐる怖ろしい呪物の成分をなして居るものは、蛙、蝙蝠、蛇、ゐもりの眼、犬の舌、蜥蜴の足、梟の翼、龍の鱗、狼の齒、大食をする鹽海の鱶の胃、妖巫の木乃伊、毒人參の根、（これは暗夜に掘り取らなければ効能がない）、山羊の膽汁、墓に根ざした水松の小枝を添へた猶太人の肝臟、及び死んだ子供の指等である。すべてこれらは、大きな湯沸し、卽ち大釜に入れられて、煮るやうに用意されて居たが、それは、煮え立つや否や猟々の生血を以て冷され、それに彼女等は子を食つた豚の血を濺ぎ入れ、又焰の中には殺人者を罰した絞首臺から絞り取つた油を投した。かうした呪物によつて

魔女等は下界の悪靈が、彼女等の質問に答へざるを得ないやうにするのであつた。

マクベスは、彼の疑問を魔女達によつて解決して貰ひたいか、それとも彼女等の師である靈によつて解決して貰ひたいかと尋ねられた。彼は、怖ろしい設備を見ても少しも怯ぢず大膽に答へた。

『どこにその靈は居るのだ。私にそれを見せて呉れ。』すると彼女等は靈を呼び出したが、それは三人であつた。第一の靈は冑をつけた頭のやうな姿となつて現はれ、マクベスの名を呼び、ファイフの領主に注意せよと云つた。マクベスはその忠告を彼に謝した。と云ふ譯はマクベスはファイフの領主マクダフに恨をもつて居たのである。

第二の靈は血に塗れた子供の姿となつて現れて、マクベスの名を呼び、女の産んだ人間は何人も彼を害する力はないから、少しの恐怖をも抱く事なく、人間の力を冷笑せよと云つた。そして又殘忍に大膽に果斷に振舞ふ事を勸めた。

『それなら生き居れ、マクダフ！』とマクベス王は叫んだ。『汝を恐れる必要が何處にあるか。ではあるけれど、私は憂はないと云ふ保證を二重に確かにしやう。臆病な「恐怖」に向つて、その云ふ事の僞である事を告げ、雷鳴のたゞ中でも枕を高うして安眠するために、汝を生かしては置かぬ。』

その靈が消えて行くと、第三の靈が王冠を戴いた子供の姿をし、手に一本の木を持つて現れた。彼はマクベスの名を呼び、謀反に關してマクベスを慰め、バアナムの森がダンシネインの丘の方へと

向つて來ぬ限りは、彼は決して征服される事はないと云つた。

『心地よい預言だ！吉だ！』とマクベスは叫んだ。『誰が森を動かし、その大地深く根ざした樹を移す事が出來ようぞ。私は天壽を全うする事が出來、殺害される事のないのは明かになつた。然し私の心は一つの事を知らうとして鼓動する。汝の術がかくも多くの事を告げ得るならば、バンクォウの子孫が此の王國を統べるようになるかどうかを私に知らせて呉れ。』かう云うと大釜は地中に沈み、音樂の聲がきこえ、王のやうな姿の八つの幻影がマクベスの傍を通つて行つた。その最後には、更に多くの姿を映した鏡を持つてバンクォウが居た。血に塗れたバンクォウはマクベスを見て微笑し、鏡の姿を指した。それによつてマクベスは、それがバンクォウの子孫であり、彼の後にスコットランドを治めるのだと云ふ事を知つた。そして魔女等は靜かな音樂の響につれて踊り、マクベスに對して禮儀と歡迎との意を示して消え去つた。そして此時以來マクベスの考はすつかり殺伐凶惡となつた。

マクベスが魔女等の洞窟から出て來て始めてきいた事は、ファイフの領主マクダフが、マクベスを位より落し、正嫡であるマルコウムを王位につかしめやうとの企圖で、前王の長子マルコウムのもとに、彼を擊つために編成されつゝある軍隊に加はらんとて、イングランドに走つたと云ふ事であつた。マクベスは烈火の如く怒つて、マクダフの城を陷れ、その殘して行つた妻子を及にかけ、更にマクダフと少しでも關係のあるものはみな斬罪に處した。

これ等の行爲及びこれに類する行爲は、彼の重だつた貴族の心を彼から離れしむる樣にした。なしうる力のある者は、イングランドで起した大軍を率ゐて進軍しつゝあるマルコウムとマクダフの軍に加はるために走り、殘れる者はマクベスを怖れて積極的行動に出でる事は出來なかつたけれど、祕かに彼等の軍の勝利を望んだ。マクベスの新らたに募つた軍隊はのろ〳〵と進んだ。何人も此の暴君を憎まぬものはなく、誰も彼を愛し又尊敬するものはなくて、皆彼を疑つてゐたので、さすが彼も自ら弑殺したダンカン王の身の上を羨むやうになつた。その人は今その墓の下に安らかに眠り、反逆もその頂點をすぎて、又も毒藥も、國内の恨も國外の擧兵も、も早彼を害する事は出來ないのである。

かうした事の起つて居る最中に、彼が惡事の唯一の共謀者であり、またその胸に、夜な夜な二人を惱ます怖ろしい夢よりのがれて、時々暫時の安眠を求める事の出來た夫人は死んで了つたのであるが、それも罪の悔恨と世の憎しみとに耐え得ないで、われとわが身を殺したのだと想像されて居る。この出來事のためにマクベスは、誰一人愛し又心配して呉れる者もなく、又自分の邪惡なる企圖を明すべき味方は一人もなき孤獨の身となつたのである。

彼は生き長へやうとの念はなくて、死をさへ望んで居た。しかしマルコウムの軍が近く進んで來た事をきくと、昔の勇氣の名殘は彼を立たせ、彼は（彼自らの言葉をかりて云へば）「鎧を著けたまゝ」果てようと決心した。その上に、彼は魔女等の空な約束を誤信して居た。そして彼は靈の言つた、女の

產める人間で彼を害し得るものはなく、またバアナムの森が、ダンシネインの丘へと來る迄は、彼は決して征服される事はないといふ言葉を思ひ出し、そんな事は決してあり得ないと考へて居た。そこで彼は、攻めるなら攻めよと云つて居るかのように見える程堅固なその居城に立て籠つて、不機嫌にマルコウム軍の近づくのを待つて居た。すると或る日一人の使者がやつて來たが、彼は蒼白な顏をして、恐怖に戰慄き、その見た事を殆んど報告し得ない位であつた。彼が丘の上でバアナムの方を眺め乍ら見張つて居ると、森が動き出したやうに思へたと斷言した。

『嘘つきの下司！』マクベスは叫んだ。『もし汝の言ふ事が嘘なら、汝が餓死する迄手近の木に吊して置くぞ。もし汝の言葉が眞實なら、同樣な事を己にしむけてもかまはぬ。』かうなるとマクベスの信念もゆるぎ出し、靈等の云つた曖昧な言葉を疑ひ始めた。彼はバアナムの森がダンシネインの丘に來る迄怖れる必要がなかつたのである。そして今、森は動き始めた！

『だが』と彼は言つた。『若し彼奴の言ふ事が本當なら、武器をとつて出よう。逃走する手段もなければ、安全に城にとゞまる事も不可能である。日を見るのにもあきて來た。命が終つて了へばよいと思ふ。』此の絶望な言葉を殘して、すでに城のあたりまで押よせて來た攻圍軍に向つて突進した。

使者に、森が動くと思はせた不可思議な現象は、容易に解決される。攻圍軍がバアナムの森を進軍して居た際、マルコウムは、熟練した將軍らしく、彼の軍勢の眞の數を敵にかすくために、兵士に命

じて各一枝を切り取らせ、それをかざして進ましめたゝめであつた。この枝を持つた兵士の進軍が、遠方から見ると、使者を驚怖せしめた現象を呈したのである。かくして下界の靈の言葉は、マクベスが考へて居たのとは異つた意味で實現した。そしてマクベスの望の大き網の一つはきれてしまつたのである。

今や兩軍の間には猛烈な衝突が起つて、マクベスは、表面は味方の樣をして居るが、內心は暴君を憎み、マルコウムやマクダフに心をよせて居る微弱な軍兵を率ゐるのみであつたが、怒と勇氣とに奮ひ立つて、彼は立ち向ふ者を寸斷に切り斃し乍ら進んで、遂にマクダフが戰つて居る場所へとやつて來た。マクダフを見、何人よりもマクダフを避けるやうにと忠告した下界の靈の言葉を思ひ出して、マクベスは引返したいと思つたが、戰の間中彼を探して居たマクダフは、彼を遮りとめて、こゝに猛烈な鬪爭が起る事になり、マクベスは、彼の妻子を虐殺した事がすでにその心を惱まして居た事とて、尙ほ戰をは避けたいと思つたが、マクダフは彼を、暴君よ、人殺よ、惡魔よ、惡黨よと罵つて、遂に彼が戰ふやうにしむけた。

それからマクベスは、女の產んだ人間がどうして彼を害し得やうと云つた下界の靈の言葉を想ひ出し心を安んじたように微笑してマクダフに向つて云つた。

『汝がいくら刃向つて來ても徒勞だ。私を害しようとするのは、大刀で空氣に痕をつけようとするの

と同樣不可能な事である。私は魔性の命をもつて居るので、女の產んだ人間の手にかゝる事はない。』

『そんな魔性の命なぞ信じたとて駄目だ。』とマクダフは云つた。『汝の信じて居るあの嘘つきの靈をして汝に語らせたがよい。マクダフは決して女の腹から產れたのではない。決して普通の人間が產れるやうに產れたのではなく、不時に母體から引離れたのだといふことを。』

『呪はしきはさういふ舌の根だ。』最後の望の綱も切れるのを感じて、マクベスは震へ乍ら云つた。今後は如何なる者も魔女や惡靈の人を欺く曖昧な言葉を信ずる勿れ。奴等は二重の意味をもつた言葉で吾等を欺き、文字通りに約束は守るが、意味は異にして吾等の望を失はしめる。私は汝とは戰はない。』

『それでは生きて居よ。』とマクダフを嘲つて云つた。『人々が怪物を觀せ物にするよりに汝を觀せ物にし、看板を造つて、それに「見給へ此處に暴君あり！」と書いてやらう。』

『否』とマクベスが言つた。彼の勇氣は自暴自棄と共に盛り返して來た。私は生きて、若いマルコウムの前に膝まづき地にキスし。群集の呪に苛責されるような事はしない。たとへバアナムの森はダンシネインの丘へ向つて來、女から產れない汝が私に向はうとも、なほ私は最後の運命を試みる。』かうした狂はし言葉を殘して、彼はマクダフに立ち向つたが、マクダフは烈しい爭鬪の後遂にマクベスに打かち、その首をあげて、若い適法の王マルコウムに棒げた。そのマルコウムは永い間奪位者の陰謀に

よつて奪はれて居た政權をとる事となり、貴族や人民の歡呼のうちに、ダンカン柔和王の後をうけて王座に登つたのであつた。

終よきは皆よし

ラウシロンの伯爵バアトラムは、父親の死に依つて、最近、爵位と所有地とをうけついだ。フランスの王は、バアトラムの父を愛してゐたので、その死をきくと、早速その王子に、巴里の宮殿に來る様にと使者を立てたのも、故伯爵と親しい交りを結んでゐたので、特別な恩寵と、保護とを與へんものとの心盡しからであつた。

フランス朝廷の老貴族、ラフュウがバアトラムをフランス王の許に案内する爲めにやつて來たときには、バアトラムは未亡人なる母と共に住んでゐた。フランスの王と云ふのは專制君主で、宮中への招待は勅令、即ち絶對的な命令の形で行はれたので、如何なる高位の臣下といへどもこれを拒む譯には行かなかつた。で伯爵夫人は、愛する子供と別れるのは再び夫を葬る様な心持であつたが、(夫人は夫を失つたことを、極く最近まで忘れかね、嘆き悲しんでゐたのであつた) 只の一日も息子を手許に引き止めてをくことが出來ず、早速出掛けるやうに云つた。息子を連れに來たラフュウは、伯爵夫人が夫を失つたことや、今はまた子供が急に出掛けねばならなくなつたのを慰めんものと、例の朝臣らしい追從たら〳〵の風で、王様は非常に深切なお方であるから、夫人が陸下を見れば、きつと夫のやうに思ふであらうし、陸下は夫人の子供に必ずや父親のやうに優しくして下さるだらうと言つた、がそ

れはこの善い王は、バアトラムの幸福を助けて下さると云ふ程の意であつた。ラフュウはまた、王は悲しい病氣にかかられ、御典醫の拜診する所では、到底全快は覺束ないとのことであると、夫人に話すと、夫人は王の不快の話をきゝ、御痛はしいことと見舞を言ひ、そして、ヘリイナ（今夫人に侍してゐる若い淑女）の父親が生きれ居れば、きつと陸下の御病氣を御平癒申し上げることが出來たことだらう、とさも殘念さうに云ふのであつた。そして、ヘリイナの身の上の話を少し語り、彼女は名醫、ジェラアド・ダ・ナアボンの獨り娘で、彼が臨終のときに、くれ〴〵も娘の世話を夫人に賴んでこの世を去つたので、彼の死後ヘリイナの保護をしてゐるのだと云つた。それから、夫人はヘリイナのしとやかな氣質や長所やを賞めたゝえ、これ等の德はみな立派であつた父親からうけついだものだと云つた。夫人がこの様に話してゐる間、ヘリイナは聲を立てずに嘆き悲しんでゐた。そのいじらしい有様に、伯爵夫人は彼女が餘りにも父親の死を悼むのをやさしく叱るのであつた。

バアトラムは今其の母に別れを告げた。伯爵夫人はつきぬ涙の袖をしぼり、數々の祝福の言葉をもつて子供に別れ、ラフュウにその世話を賴んだ『伯爵様、子供によく敎へてやつて下さいませ。未だ宮仕へにも慣れないのでございますから。』と云つた。

バアトラムは最後にヘリイナに言葉をかけたが、それは幸福に暮すやうとの、ただ通り一遍の挨拶であつた。そして、『私の母上、お前の主人に優しくして、大切にして上げてくれ。』と云つて、ヘリイ

ナに對する簡單な別れの言葉を濟ませた。

ヘリイナは長い間、バアトラムを戀してゐた。そして、聲も立てずに、嘆き悲しんでゐたとき、彼女が流した涙は、亡き父親ジェラアド・ダ・ナアボンの爲めではなかつた。父親に對するよりも、より深い愛を抱いてゐる今の心持では、その對照物を今彼女は失はうとしてゐるのであるが、亡き父親の姿や、その面影さへも忘れ果て、心に描く想像の姿は、唯バアトラムだけであつた。

ヘリイナは長い間バアトラムを戀してゐたけれども、彼がフランスの最も古い家族にその血をうけついでゐるラウシロンの伯爵である事を唯の片時も忘れたことはなかつた。彼女は下賤な家に生れた。その祖先は少しも名のない者であつた。彼の祖先は代々貴族であつた。それ故彼女は、名門に生れたバアトラムを、主人と思ひ、いとしき伯爵としたひ、彼の召使として生きることより外には何等の望みも起さず、只終生彼の奴隷として過さんことを願つた。彼の高い位と彼女の低い身分との間には、非常にひろい距離がある樣に思はれたので、『それは光り輝く特別の星を愛し、それと結婚しようと思ふのと同じことだ。バアトラム樣はそれ程私よりは御身分が高い。』と云ひ云ひした。

バアトラムがゐなくなると、彼女はたえず眼に涙をうかべてゐた。彼女の心は悲しみで一杯であつた。たとへ彼女が、希望もなく愛してゐるとは云へ、たへず彼を見ることは、なか〳〵の慰めであつた。ヘリイナはいつも座つて、彼の黑い眼や、秀でた額や、その綺麗な捲毛を眺め、つひには心の繪

の板上に彼の肖像を描き得るやうに思はれた。その心は、いとしい人の顏の一線一畫をも、いつまでも記憶に止めてゐることが出來た。

ジェラアド・ダ・ナアボンが死ぬる折彼女に遺した財產と云へば、いくつかの處方で、それは貴重な、また十分に確證された効能のあるもので、醫藥の深い研究と、長い間の經驗とに依つて、最も効果あり、ゆめ誤りのない藥として彼が集めたものであつた。その中に、ラフュウが云つた所の、王が今苦しんでゐる病氣に特効ある藥があつた。ヘリイナは王の不快の話をきくと、ほんの今しがたまで身を卑下し、希望もなかつた身が、自分で巴里に出掛けて行つて、王の病氣を癒して見ようと云ふ大望を心に抱いた。しかし、たとへヘリイナにこの立派な處方があるにしても、醫者は勿論王まで、不治の病と思ひこんでゐるので、彼女が治療しようと申し出た所で、貧しい、無學な處女に信ををく筈はなかつた。しかしヘリイナが、若しも試ろみにやつて見ることを許されさへすれば、きつと立派に治癒することが出來ると思つてゐる確かな希望は、當時最も有名な醫者であつた父親の手腕以上に確かであるやうに思はれた。と云ふのは、この良藥こそは、ラウシロン伯爵夫人と云ふ高い位にまでも、彼女の幸福を導く遺產になるやうに、あらゆる天の幸ある星に依つて淨められてゐると彼女は堅く信じてゐたからであつた。

バアトラムが去つてから間もなく、執事がやつて來て、ヘリイナが獨言を云つてゐるのを聞いたが、

其の言葉に依ると、バアトラムを戀してゐて、その後を追つて巴里へ行かうと考へてゐるらしい節があると伯爵夫人に告げた。夫人は禮を云つて執事を去らせ、ヘリイナに話したいことがあると云つて呉れと云つた。夫人はヘリイナの話をきいて、心の中に、遠く過ぎ去つた日、大方バアトラムの父親に對する夫人の戀がはじまつた頃の事であらうが、それを思ひ浮べて、獨り言を云つた。

『私が若かつた時もさうであつた。戀は青春の薔薇についてゐる刺である。と云ふのは若い時には、よし吾々が自然の兒であるにせよ、この過失を冒すものである。若いときには、それが過失であるとは知らないけれども。』

伯爵夫人がこの樣に、自分の若い時分の戀の過失を考へてゐるとき、ヘリイナが這入つて來た。夫人はヘリイナに向つて、

『ヘリイナ、私は貴女のお母樣ですよ。』と云つた。するとヘリイナは、

『いえ、貴女は私の御主人樣でございます』と答へた。

『貴女は私の娘です。ね私は貴女のお母さんですよ。』と夫人は再び云つた。『どうして貴女は私の云ふことをきいて、そんなに吃驚し、顏の色を變へて私を見るのです?』

ヘリイナは驚と、當惑の面持で、夫人が自分の戀をそれとなく感付いたのではないかと危み乍らも、なほ、『でも、奥樣、貴女は私のお母樣ではありません。ラウシロン伯爵が私の兄弟である筈はございません。また私は貴女の娘ではございません。』

『ですけれどもヘリイナ、貴女は私の義理の娘とも云へませう。』と伯爵夫人は云つた。『貴女はそれになりたいのでせう。お母樣とか、娘とか云ふ言葉をきいて、ひどくお困りの樣子だもの。ヘリイナ、貴女は私の子供を愛してゐるのですか?』

『まあ、奥樣。』とヘリイナはおど〳〵して云つた。

伯爵夫人は再びその問を繰返して、『私の子供を愛してゐますか?』と云ふと、

『奥樣、貴女はお子樣を愛してゐらつしやらないのでございますか?』とヘリイナが云つた。

『ヘリイナ、そんな云ひ逃れを云はないで、さあ、どんなに愛してゐるか云つてごらん。貴女の戀は十分に外に表はれてゐるんだから。』

ヘリイナは今は跪いて、愛してゐることを告白し、いたく赤面し、恐れおの〳〵いて、主人の赦しをひたすらに乞つた。そして、彼等の間の身分の距離が提灯に釣鐘であると思つてゐることを述べ、彼女がバアトラムを愛してゐる事を、彼は少しも知らないこと、また太陽を崇拜し敬ひ乍らも太陽については何も知らない哀れな印度人に、自分の卑しい望みのない戀をたとへたのであつた。伯爵夫人は、近頃巴里に行きたいとは思はないかとたづねたので、彼女はラフュウが王の病氣の話をしたとき心の中で思ひついた計畫を打ち明けた。すると伯爵夫人は、

『それが巴里に行きたいと思ふ動機ですね、さうですか？　本當をお云ひなさい。』と云つた。

ヘリイナは正直に、

『若様の爲めに、私はこれを思ひついたのでございます。若様がなければ、私の心は、巴里も、藥も、王様も思ひも出さなかつたでございませう。』と答へた。

夫人はこの告白の一伍一什を、よしあしの言葉を一言も口にせずにきいた後、果してその藥が王の役に立つだらうかと、ヘリイナに嚴しくたづねた。そしてそれはジェラアド・ダ・ナアボンが所有してゐたあらゆる藥の中で、最も珍重されて居り、臨終の病床で、娘に與へたものであることを夫人は知つた。夫人はまたこの若い娘について、悲しい臨終の折に約束した嚴肅な誓を思ひ出した。娘の運命と、王の生命は、單にこの計畫の實行如何に係つてゐる樣に思はれた。(この計畫はやさしい乙女によつて思ひつかれたものであつたけれども、伯爵夫人には、王の病氣が恢復し、また、ジェラアド・ダ・ナアボンの娘の未來の幸福の基礎を置くやうにならうなどとは、眼に見えぬ神樣の働きとより外には思えなかつた。)で夫人は、思ふ通りにやつて見るがよいと、ヘリイナに許可を與へ、氣前よく十分な旅費を與へ相當な從者をつけてやつた。ヘリイナは伯爵夫人の祝福と、成功を祈る深切な言葉に送られて巴里へ旅立つた。

ヘリイナは巴里に着いた。そして彼女の友、ラフュウ老伯の靈力に依つて、王樣の拜謁を得た。併し

彼女には未だ〳〵多くの困難があつた。と云ふのは、この美しい若い醫者がすゝめる藥を試して見る樣にと、王樣を說きつけることは容易なことではなかつた。しかし彼女は、ジェラアド・ダ・ナアボンの娘であることを王に話した。(王は彼の名聲をよく知つてゐた。)そして、父親の長い間の經驗と手腕の粹を含むでゐる祕藏の寶物として、この貴重な藥を差出した。また、若しそれで王の病氣が二日の中に全快しなければ、命を差上げますと云ふ大膽な約束までした。で到頭王はそれを服んで見ることを承諾した。で、若しも王が二日の中に全快しなければ、ヘレナは生命を失はねばならなくなつた。が、うまく恢復すれば、フランス中の誰にても（皇族は別として）夫にしたいと思ふ者を選んでよろしいと彼女に約した。——即ちヘリイナが王の病氣を治すことが出來たら、夫の撰擇權が彼女が要求する謝禮となる譯であつた。

ヘリイナが、父親の藥の効能について抱いてゐた希望は間違はなかつた。二日の日數が切れないうちに、王はすつかり全快した。それでこの美しい醫者に約束した禮を與へる爲めに、王は宮中にすべての若い貴公子を集め、これらの若い獨身の貴族達の群の中から夫を選ぶ樣にと云つた。ヘリイナはその撰擇に少しも躊躇しなかつた。と云ふのはこれ等の若い貴族の間に、ラウシロン伯爵を見たのであつた。でバアトラムに向つて云つた。

『これこそ私が望む人でございます。伯爵樣、たつて貴方を夫にとは申しません。けれども貴方のお

力にみちびかれて生きてゐるかぎり、身も心も捧げておつかへ致します。』

『うむ、それでは。』と王様は云つた。『バアトラム。その女をめとるがよい。彼女は君の妻である。』

バアトラムは躊躇せず、王様の贈物である、この自ら望んで來たこのヘリイナを嫌だと云ひ切つて、彼女は貧しい醫者の娘で、彼の父親の金で育てられ、今は母の情にすがつて生きてゐるのだと云つた。

ヘリイナはこの拒絶と嘲けりの言葉をきいて、王に向ひ、

『御全快なさいまして結構でございます。皆様をあちらへやつて下さいませ。』と云つた。

けれども王は、自分の絶對的な命令がこの様に輕視されるのを默視してはゐなかつた。と云ふのは貴族を結婚させる權力は、フランス代々の王がもつ多くの特權の一つであつた。ですぐその日、バアトラムはヘリイナと結婚した。バアトラムにとつては强請的で、不快な結婚であり、可哀さうな婦人にとつては、前途のない結婚であつた。彼女は生命までかけて貴い夫を得たけれども、それは見事で中身のない物を得たに過ぎないやうに思はれた。彼女の夫の愛は、フランス王が與へ得ない贈物であつたのである。

ヘリイナは結婚するや否や、王の前に出て、夫から命ぜられた夫の宮中退去を願つた。そして彼女が、夫の退廷の許可を得て來たときに、バアトラムは、餘りにも思ひかけぬ結婚であつたので、ひどく心が動搖してゐる。だから、自分がとる方針を見ても怪しんではならぬと彼女に云ひきつた。よし

ヘリイナはそれを怪しまなかつたにしても、彼女の許を去らうと云ふのが彼の意志であつたのを知つて悲しんだ。彼は彼女に、母の許に歸るやうに命じた。彼女はこの不深切な命令をきいて、

『私は、貴方の最も忠實な召使で御座います。私の卑しい身分が、私の非常な幸運に釣合はなかつた所を、どこまでも從順に補ふやうにつとめます、これより以外には何も申し上げることは出來ませぬ。』と答へた。

けれどもヘリイナのこの謙讓な言葉も、高慢なバアトラムをしてやさしい妻に同情をさせる迄動かすことは出來なかつた。そして彼は普通の深切な別れの言葉さへもなく、彼女と別れたのであつた。

それからヘリイナは伯爵夫人の許に歸つた。彼女は旅行の目的を果たした。王の生命を取りとめ、愛する伯爵と結婚する事も出來た。けれども今は義理の母なる伯爵夫人の許に、落膽して歸つて來たのであつた。そして彼女が家に入るか入らないうちに、バアトラムから胸もはり裂ける許りの手紙を受けとつた。

善良なる伯爵夫人は、彼女を息子が自分で選んだ嫁であり、高位の婦人ででもあるかの様に、懇ろに迎へ、結婚の日に、只一人妻を家へ歸すやうなバアトラムの不深切な仕打をなぐさめる爲めに、やさしい言葉をかけてくれた。けれどもこの情のこもつた歡待も、ヘリイナの悲しい心を慰めることは出來なかつた。

『私の伯爵は去つてしまはれました、永久に去つてしまはれました。』それから彼女は、バアトラムの手紙の中の、「お前が私の指から指輪、それは決して拔けるやうなことはしない——を手に入れたとき、そのとき私を夫と呼んでくれ。けれども、さうしたときは、永久に來ることはないと云はう。』と云ふ言葉を讀んで、『おそろしい言葉でございます！』と云つた。伯爵夫人は我慢してくれと彼女に賴み、バアトラムが去つてしまつた今は、彼女を吾が子にすると云つた。そして、彼女は、バアトラムの樣な子供が二十人も侍いて、たゞ御主人樣と呼んでもよい程な伯爵の妻となる價値があると云つた。けれども夫人がかうして恭々しく身を卑下し、言葉を極めて深切に慰めて、娘の悲しみを鎭めやうとしたがその甲斐がなかつた。ヘリイナはなほ手紙から眼を離さず、悲しみの餘りに「自分に妻はないので、フランスに妻もなく、何もない」と大きな聲で叫んだ。伯爵夫人はその言葉が手紙にあるのかとたづねた。

『えゝ。』と可哀さうにヘリイナはやうやく答へた。

その翌朝、ヘリイナの姿が見えなかつた。彼女はかうして突然姿をかくす理由を知らせる爲めに、去つた後で夫人に渡して貰ふやうにと手紙を書きのこした。この手紙には、自分の爲めにバアトラムが故郷から、生家から追はれるやうになつたことを悲しみ、その罪科を償ふ爲めに、聖ジャック・ル・グランの社へ巡禮に出る由を認め、最後に、バアトラムがあれ程憎んでゐた妻は永遠に家を去つたと彼に告げて貰ひたいと伯爵夫人に賴んであつた。

バアトラムは巴里を去つて、フロウレンスに行き、其處でフロウレンス公の軍隊に入つて將校になつた。そして數々の勇敢なる働きに依つて名をなした。ある勝利の戰の後で、バアトラムは母親の手紙を受けとつた。それにはヘリイナは最早後を惱ます樣なことはないとのうれしい便が認めてあつた。彼が故郷へ歸る準備をしてゐる頃、ヘリイナが巡禮の着物を着て、フロウレンスの町に到着したのであつた。

フロウレンスは、聖、ジャック・ル・グランへ參詣する途中、巡禮の通る町になつてゐた。ヘリイナがその町に到着したときに、其處には深切な未亡人が住んでゐて、聖人の社に詣でる婦人の巡禮を自分の家に招じ、宿を與へて厚遇してくれる事をきいた。でヘリイナは、この善良な婦人の許に行くと、未亡人は丁寧に彼女を迎へ、有名な市中の珍らしい物は何でも見るよう、また若し公爵の軍隊が見たければ、よく見える所に連れて行つてやると云つた。

『そして、貴女と同じ國の方をごらんになることが出來ませう。そのお方は、ラウシロン伯爵樣と申しまして、公爵の戰爭で、立派な手柄をなさいました。』と未亡人が云つた。

ヘリイナはバアトラムが今日の見物の中の一つとなると云ふことを知ると、重ねてのすゝめを要しなかつた。彼女は宿の主人と連立つて出掛けた。そして再び愛する夫の顏を見ることは、彼女にとつては、悲しい、嘆かはしい樂しみであつた。

『立派な方ではありませんか？』と未亡人が云つたのに對し、

『私はあの方は好きでございます。』とヘリイナが答へたのは、偽りのない言葉であつた。

このお饒舌な未亡人は歩く道々の話は、バアトラムのことで持ち切つた。彼女はバアトラムの結婚の話をし、また彼が可哀さうな妻を見棄て、妻と共に暮すことを嫌つて公爵の軍隊に入つたことをヘリイナに話した。ヘリイナはじつと我慢して、この自分の不幸の物語に耳を傾けてゐた。そして、その不幸な話が終つた時にも、バアトラムの話は未だ〳〵盡きなかつた。と云ふのは、未亡人はまた他の話へうつてゐた。そしてその話の一言々々が、ヘリイナの胸にひし〳〵とこたへたのは無理からぬことで、今話してゐるその話は、バアトラムが未亡人の娘を戀してゐると云ふことであつた。

バアトラムは、王におしつけられた結婚は好まなかつたものの、戀を感じない木石の身ではなかつた。と云ふのはフロウレンスの軍隊に入つてから、彼はダイアナと云ふ美しい娘を戀した。それは今ヘリイナをもてなしてゐる未亡人の娘であつた。彼は毎夜、ダイアナの美をたゝえる唄を歌ひ、さま〳〵の音樂を奏で、戀人の窓下に來て、娘の戀を求めるのであつた。彼は家人が寢靜まつてから、こつそり彼女を訪れるのを許して呉れと、切りと訴へるのであつたが、ダイアナは、決してこの道ならぬ願をきゝ入れようとせず、また彼が結婚してゐるのを知つてゐたので、彼の訴へに希望を與へるやうなことはしなかつた。ダイアナは、賢い母親の教育の下に育てられて來たからであつた。彼女の母は、今こそ貧しい暮はしてゐるけれども、生れはよく、キャプュレッツの貴族の家からその血統をひい

てゐるのであつた。

善良なこの婦人は、自分の愼み深い娘の正しい節操を賞めちぎつて、この事をヘリイナに話した。これは全く、母親が娘に與へた立派な教育と、よい忠告の爲めだと云つた。それからまた、バアトラムは翌る朝早くフロウレンスを去る筈であるから、今夜はせび熱望してゐる訪問を許してくれと、ダイアナに、切りと願つてゐると話した。

バアトラムが未亡人の娘を戀してゐると云ふ話をきいて、ヘリイナは悲しんだけれども、この話から、彼女の燃ゆる心は（前の計畫の不成功にも屈せず）家を外に出歩いてゐる伯爵を取返す一の計畫を思ひついた。彼女は、自分が見捨てられたバアトラムの妻、ヘリイナであることを告げ、深切な未亡人と娘に、バアトラムを訪問させ、ダイアナの身代りになつてバアトラムを瞞すことを許して呉れるやうにと賴み、かうしてひそかに夫に會はうと思ふ動機は、彼の指輪をとる積りで、それを手に入れるならば、彼が彼女を妻として認めてくれると云ふことを話した。

未亡人と娘はこのことに就いて彼女を助けようと約束した。一つは、この不幸な、見棄てられた妻を氣の毒に思つて彼等が心を動かした爲めと、又一つには、ヘリイナが未來の幸運を得る爲めに、彼等に金を與へ、立派に成功すれば御禮をするからと云つて、母娘をうまく味方にとり入れた爲めであつた。その日の中に、ヘリイナは最早自分はこの世を去つてしまつたと云ふ事を、バアトラムに告げさ

せた。それは、彼女が死んだと云ふことをきいて、バアトラムは自由に二度目の妻を選擇することが出來ると思つて、ダイアナと僞つてゐるヘリイナに結婚の申込をするだらうと思つたからであつた。そして若し、かの指輪と、またかうした約束とを得ることが出來れば、それから必ず未來の幸福をつくり出せると云ふことを彼女は疑はなかつた。

夕方暗くなつてから、バアトラムはダイアナの部屋に入ることを許された。其處にはヘリイナが彼を迎へる仕度をしてゐた。ヘリイナに話しかける彼の媚を賣る稱讃と愛の言葉は、それはダイアナの積りで云つてゐると云ふことを知つてゐてさへ、彼女にはなつかしく響くのであつた。バアトラムは彼女がすつかり氣に入つたので、自分は彼女の夫となり、末永く彼女を愛するといふ嚴そかな誓を立てた。その誓をした女は彼が輕蔑してゐた妻のヘリイナで、それがあれ程氣に入る話をしたのだと分る時に、彼に眞の愛情が湧く前兆となるやうにと彼女は願つた。

バアトラムは、ヘリイナがこんなに賢い女であることを知らなかつた。若しも彼が知つてゐたら、あれ程までに彼女を顧みないで棄てるやうなことはしなかつたであらう。毎日顏を會はせてゐたので、彼は彼女の美しさについぞ注意を拂はなかつた。吾々がたえず毎日見なれてゐる顏と云ふものは第一印象から起る美しいとか醜いとかいふ効力をなくしてしまふものである。彼にはまた彼女の理解力に就いても、判斷することが出來なかつた。それと云ふのも、彼女は彼に對して、戀と入り混つた敬虔

の念を抱いてゐたので、彼の前にゐる時には常に無言であつたからである。けれども今は、彼女の未來の運命と、愛を得ようとするこの企ての好結末は、今夜の會合でバアトラムの心に好印象を殘すか否かにあるやうに思へたので、彼女は彼の心を捕へる爲めにありだけの智慧を振ふのであつた。その生き〳〵した談話の天眞の美しさと、その態度の愛らしさは、バアトラムの心を全く奪つてしまつたので、彼は彼女を妻にすると誓つた。ヘリイナはその好意のしるしに、彼が指にはめて居る指輪を拔いて呉れる樣にと賴み——、それこそ彼女には非常に大切なものであつた——その代りに、彼女の指輪を與へた。それは王樣に貰つたものであつた。そして夜が明けないうちに彼を送り出した。彼は早速母親の家に向けて旅立つた。

ヘリイナは自分が立てた計畫を十分遂行する爲めには、この上なほ未亡人とダイアナの助力を必要としたので、一緒に巴里まで行つて呉れるやうにと彼等を說いた。巴里に到着すると、王はラウシロン伯爵夫人を訪問して、不在である由を知つたので、ヘリイナは大急ぎで王の後を追つた。

王は今でも非常に健康であつた。彼の病氣を癒して呉れたヘリイナに對する感謝の念が心に鮮やかに殘つてゐたので、ラウシロン伯爵夫人を見るとすぐヘリイナの噂をはじめ、ヘリイナは、夫人の子供が馬鹿な眞似をして失くした貴い寶石だと云つた。が、この話題が、ヘリイナの死を心からいたんでゐる伯爵夫人を惱ますのを見て、『わしはすべてを赦し、忘れてしまつた。』と云つた。しかし善良な

るラフュウもその場にゐて、御氣に入りのヘリイナの追想が、かくも輕々しく看過されるのに堪えられず、『申し上げますが、若い伯爵は、陛下並びに伯爵の母上及び御夫人に問違つたことをなされました。けれども御自身に對して、何よりも惡いことをなされました、と云ふのは伯爵が失はれた夫人の美しさには、すべての人が眼を見張り、その聲にはすべての人がうつとりと耳を傾け、その申し分ない德の爲めには、すべての人が夫人に仕へようと望んでゐました。』と云つた。すると王樣は、

『亡くなつたものを褒めるその思出は貴く思はれるものだ。うむ、彼を此處に呼べ。』と言つたのは、バアトラムを呼べとのことであつた。バアトラムは王の前に現はれた。そして、ヘリイナに對する間違つた行を後悔してゐる旨申し述べると、王は、彼の亡き父親と、立派な母親に免じて彼を許し、再び彼に目をかけてやることにした。そして王はその仁慈にあふれた顏を、彼の方へ向けた。と云ふのは、バアトラムがその指に、王がヘリイナに與へた指環をはめてゐるのを氣づいたからであつた。王は、ヘリイナがわが身に何か災難が降りかゝつた場合、王自身に送るより外は、決してそれを手放さないと、天のすべての聖徒の御名を呼んで誓つた事をよく覺えてゐた。バアトラムは、どうしてその指環を手に入れたかとの質問に對し、ある婦人が窓からそれを投げ與へたと、信じ難い話をし、結婚の日以來、ヘリイナを見たことがないと云つた。王は彼が妻を嫌つてゐたことを知つてゐたので、『わしはヘリイナの命は惡い手段で奪はれたのぢやあるまいかと懸念してゐる。』と云つて、バアトラムを

捕縛する樣に警護兵に命じた。丁度この時、ダイアナと母親が這入つて來て、バアトラムはダイアナと結婚すると云ふ嚴かな誓をしたので、陛下の御力に依つてバアトラムをダイアナと結婚させて下さる樣にとの嘆願書を王に差出した。するとバアトラムは、王の怒りを恐れて、そんな約束をしたことはないと云つた。そこでダイアナは自分の言葉の正しいことを確證するために（ヘリイナが渡した）指環を出して、彼が彼女と結婚することを誓つたときに、彼が今はめてゐる指環の代りに與へたものだと云つた。これを聞いて、王は彼女をもまた捕縛するやうにと警護の兵に命じた。そして、彼女の指環の話は、バアトラムの話とは違つてゐるので、王の疑は一層强められたのであつた。そして、彼等がどうしてヘリイナの指環を手に入れたかを白狀しなければ、二人とも死刑にすると云つた。するとダイアナは、その指環を買つた寶石商人を、母親が連れて來るのを御許し下さるやうにと賴むと、その願は聞きとゞけられたので、未亡人は出て行くと間もなくヘリイナを連れて戻つて來た。

今まで自分の子供に迫る危險を見て、だまつて悲しい思をつゝみ乍ら、これは或は彼が妻を殺したといふ疑は事實ではないかと憂へてゐた善良なる伯爵夫人は、母親の樣な愛をもつて愛してゐた可愛いヘリイナが未だ生きてゐたのを見て、抑へる事の出來ない喜びを感じた。そして王も、喜びのあまりそれがヘリイナであるのを信じかね、

『わしが見るこれは、まことにバアトラムの妻であるか？』と云はれた。

自分は未だ本當の妻であるとは思ないヘリイナは、
『いえ、陛下、陛下が御覽になりますのは、たゞ妻の影のみで、名前だけで實體はないでのでございます。』と答へた。
するとバアトラムが、『兩方だ、兩方だ！赦してくれ！』と叫んだ。
『おゝ伯爵樣、私が美しい處女の身代りになつたとき、貴方は大層御深切でございました。さあこゝに貴方の御手紙がございます。』とヘリイナは云つて、かつては悲しい思でくり返して讀んだ、『私の指から、お前がこの指環をとつた時には』の文句を、今はよろこびに溢れる調子で彼に讀みきかせた。そして『私は指環をとりました。貴方が指環をお與へになつたのは私でございます。貴方は二度までお負けになつた今、私の夫になつて下さいますか？』
『お前が、わしがあの夜語らつた婦人であることを明らかにすることが出來れば、いつまでも、いつまでも優しく愛してやらう。』とバアトラムは答へた。
例の未亡人と娘が、この事實を證明するためにヘリイナと一緒にやつて來てゐたので、これはむづかしいことではなかつた。王は、自分につくして呉れた功勞の爲め心から大切に思つてゐる婦人に、ダイアナが好意ある助力をしてやつたので、非常に喜び、彼女にもまた貴族の夫を世話することを約束した、と云ふのは、美しい婦人達が氣高い仕事をしたときに、夫を見つけてやると云ふことは、王

が彼等に與へるに相應しい褒美であると、ヘリイナのこれまでのことを見て思つたからであつた。
かやうにして、遂にヘリイナは、父の遺産が、天の最も幸ある星に依つて淨められたのを見た。と云ふのは、彼女は今は、バアトラムの愛する妻であり、氣高き主人の義理の娘であり、自らはラウシロンの伯爵夫人であつたからである。

/
239
10

悍婦ならず

がみ〳〵女のキヤサリンは、パデユアの富裕な紳士バプテイスタの長女であつた。負けず嫌ひの激しい性質の女で、がみ〳〵と大聲で怒鳴つて許り居るので、パデユアの町では、がみ〳〵女のキヤサリンと云へば誰知らぬものも無かつた。かう云ふ令嬢と思ひ切つて結婚しようといふ男子は仲々ありさうでもなく、實際無いのであつた。それ故父のバプテイスタが、溫和しい妹のビアンカに降るやうにある良緣に少しも承諾を與へず、姉娘がさつぱりと片附いたら妹のビアンカに結婚を申し込むも勝手だと云ふ口實のもとに、ビアンカの求婚者を一時斷つたとき、非常に非難された。

偶々ビトルキオと呼ぶ一紳士がパデユアの町に嫁探しに來て、キヤサリンの性格の評判を聞き、少しも驚かず、彼女が金持で美しいといふ事を知つて、此の評判の悍婦と結婚して、溫和しい柔順な妻にしてみようと決心した。實際ビトルキオほど此の大事業を始めるに適當した男はなかつた。彼はキヤサリンと同じやうに元氣盛んで、頓智に富んだ氣樂な滑稽家で、同時に怜悧で、正しい判斷力も有してゐたので、心持が穩やかな時でも、激しい狂暴な振舞ひを眞似ることが出來、自分でも愉快さうにその狂暴な擧動を笑ふことが出來た。それは彼の生來の氣質が無頓着で呑氣な爲めであつた。彼がキヤサリンの夫となつた時態ととつた亂暴な態度も、ほんの冗談で、否もつと適切に言へば、彼の優

れた判斷力から割り出した、激しいキヤサリンの怒り易い習慣を直す唯一の方法なのであつた。

そこでビトルキオはがみ〳〵女のキヤサリンの許に求婚に出かけることにした。そして先づ第一に父親のバプテイスタに、自分は令嬢が非常に謙遜で內氣で、優しくゐられるといふ評判を聞いたので態々ヴエロナから愛を求めにやつて來たものであると狹猾なことを述べ立て、何卒優しいキヤサリン令嬢に(とビトルキオは言つた)求婚する許しを與へて貰ひたいと願つた。キヤサリンの父親は娘を結婚させたいとは願つてゐたけれど、娘はさう云ふ立派な性質ではないといふ事を告白せずには居られなかつた。と云ふのは彼女がどんな風に優しい氣立の者であるかと云ふ事が直ぐ明らかにされた。彼女の琵琶の先生が部屋の中に駈けこんで來て、キヤサリンの琵琶の彈き方の間違つたところを注意したら、頭を琵琶で叩かれたと不平をこぼした。それを聞いてビトルキオは言つた。

『實に勇敢なお嬢さんです。私は猶更好きになりました。お嬢さんと御話したくてたまりません。』そして老紳士を促しながら言つた。

『バプテイスタさん、私は急いでゐるのです。私は毎日求婚にまゐる譯には行きません。御存知のやうに私の父は死にましたが、嗣子の私に土地や財產をすつかり殘して呉れました。それで若し令嬢の御承諾を得ましたら、どんな持參金を頂けませうか。』

バプテイスタは、求婚者としてはあまり無遠慮な態度と思つたが、キヤサリンが結婚することは嬉

れしかつたので、娘の持參金として二萬クラウンを與へよう、また自分の死後には土地の半分を讓ることにしようと言つた。そこで此の妙な婚約は忽ちなつて、バプティスタはがみ〳〵女の娘に求婚者の言葉を傳へに出て行き、ピトルキオの求婚を聞かせる爲めに彼女を部屋に送つた。

此の間にピトルキオは自分の採るべき求婚の方法を考へてゐた。彼は言つた。

『あの女がやつて來たら元氣よく求婚してやらう。若し自分の惡口を言つたら、夜鶯のやうな美しい聲で歌つてゐると言つてやらう。若し顰め面したら、朝露に濡れたばかりの薔薇の花のやうに爽やかだと言はう。何とも言はなかつたら、女の雄辯を讃めてやらう。出て行けと言つたら、一週間も居て呉れと言つたやうにお禮を言はう。』

キヤサリンは威張つて這入つて來た。そこでピトルキオは先づ口を開いて、

『今日は、ケエト、あれがお前さんの名前ださうですね。』と言つた。キヤサリンはこのやうな親密な挨拶をされることを好まなかつたので、さも輕蔑したやうに、

『私にもの云ふ人は誰でもキヤサリンと言ひますよ。』と答へた。

『それは虚言です。あなたはさつぱりしたケエトだの、快活なケエトだの、また時にはがみ〳〵ケイトだのと言はれて居ます。しかし貴女はこの基督教國で一等の可愛らしいケエトですよ。貴女の溫順しいことはどこの町でも評判なので、私は貴女を妻にしようと求婚に來たのです。』

奇妙な求婚が行はれた。キヤサリンは腹を立て、がみ〳〵女と云はれるのも尤もだと思はれる大聲でがみ〳〵云ひ、ピトルキオの方では倦くまで女の優しい深切な言葉を賞めちぎつた。とう〳〵父親のやつて來る足音が聞えたので、ピトルキオは(出來る丈け早く求婚を濟ませたいと思つて)言つた。

『可愛いキヤサリン、こんな詰らない話は止しませう。貴女の御父様はあなたを私に下さる事を御承諾ですよ。持參金のことまで定まつてゐます。貴女は承知でも不承知でも私は貴女を貰ひます。』

バプティスタが這入つて來ると、ピトルキオは、お孃さんは深切に自分の申出を受け入れられ、次の日曜に結婚式を擧げること迄約束されたと父親に話した。キヤサリンはこれを非認して、次の日曜日に彼はいつそ絞首になつてゐたがいゝと言ひ、ピトルキオのやうな狂氣の惡黨と結婚させようとする父親を非難した。するとピトルキオは、お孃さんの立腹の言葉は氣にしないで呉れ、父上の前では態と厭な振りをすることに相談してあるが、二人切りの時には非常に優しく可愛いのであるからと言つた。そして彼は言つた。

『約束をして下さい、ケエト。私はこれからヴェニスに行つて、貴女の爲めに立派な婚禮用の着物を買つて來ます。御父さん、宴會の用意をして、婚禮の御客を案内して置いて下さい。私は可愛いキヤサリンを美しくする爲め、指環や、立派な裝飾品や、高價な着物をきつと買つて來ますから。さあケエト接吻をしてお呉れ。私達は日曜には結婚するのだから。』

日曜日に婚禮の客はみな集つた、がビトルキオは仲々遣つて來なかつた。キヤサリンはからかはれたのではないかと考へて當惑のあまり泣いた。辛つとの事で彼は來るには來たが、キヤサリンに約束して置いた婚禮の晴着を持つて來ず、自分も花婿のやうな樣子をしないで、妙に汚れ切つた着物をつけ、まるで大切な儀式を茶化しに來たやうであつた。その上お供の召使も、彼等が乘つて來た馬も同じやうに下等な奇妙な風をしてゐた。

ビトルキオは何と說いても其の着物を着變へなかつた。キヤサリンは自分と結婚するのであつて、着物とするのではないからと言つた。いくら勸めても駄目だと云ふことが分つたので、一同は敎會へ行つた。所が敎會でも彼は同じやうに狂氣染みた行動をし、牧師が彼にキヤサリンを妻にするやと尋ねた時にも、妻に爲ると途方もない大聲で誓つたので、一同は屹驚し、牧師は手に持つてゐる書を落した。牧師はそれを拾ひ上げようと屈んだが、狂氣の花婿にビシヤリと拳固で叩かれ、自身も倒され、又々本を落してしまつた。彼は儀式の最中にも絶えず足踏みしたり、罵つたりしてゐたので、流石大元氣のキヤサリンも恐怖の爲め震へた。式が終つて一同が未だ退出しないうちに、ビトルキオは葡萄酒を持つて來させ、大聲で一同の健康を祝した。そして底に殘つてゐた酒をさつと牧師の顏にひツかけた。此の奇妙な行爲にも別に理由があるといふ譯ではなく、唯牧師の髭が如何にも薄く、飢じさうで、彼が酒を飲んでゐるのを欲しがつてゐるやうに見えたからといふのであつた。今までこんな狂氣

の結婚が行はれた事はあるまい。しかしビトルキオは、がみ〳〵女の妻を馴らす爲め仕組んだ計畫を更によく成就させる爲めに、益々亂暴を續けた。

バプティスタは立派な婚禮の宴會を用意して置いた。しかし一同が敎會から歸ると、ビトルキオはキヤサリンを捕へて、これから直に家へ伴れて歸ると宣言した。舅はいろ〳〵と諫め、キヤサリンも躍起となつて怒つたが、彼の意志を翻す譯には行かなかつた。彼は夫には妻を勝手に處分する權利があると主張して、キヤサリンを急ぎ伴れ去つた。ビトルキオは非常に荒々しく且つ斷乎として見えたので、誰も敢て止めようとするものはなかつた。

ビトルキオはわざ〳〵選んで置いた、ひよろ〳〵の瘦せ馬にキヤサリンを乘せ、自身も從者も同じやうな馬に乘つて、凸凹の泥濘の道を旅行した。そしてキヤキリンの可哀さうなやくざ馬が躓く度毎に大聲で怒鳴り立てた。此の馬は人間のうちで最も癇癪持ででもあつたといふやうに、重荷を負うてはなか〳〵進まないのであつた。

とう〳〵苦しい旅行も終つて、キヤサリンは夫の家に着いた。彼女は此の旅行の間、ビトルキオが馬と召使を荒々しく罵る聲の外何もきかなかつた。ビトルキオは妻を深切に家に招じたけれども、其の晩は妻に休息も食事も與へまいと決心した。食卓は用意され、料理は運ばれた。しかしビトルキオはどの皿にも態と難癖をつけて、肉を床に投げつけ、召使にそれを片附けるやうに命じた。これとい

ふのも皆キヤサリンを愛するからの事で、彼女によく調理されてない食物を攝らせない爲めにといふ心からであると言つた。キヤサリンは食事もとらず、疲れ切つて寢床へ就かうとしたとき、彼は又々寢床に難癖をつけて、枕や蒲團を室中に投げつけたので、彼女は餘儀なく椅子に腰かけて居なければならなかつた、そして偶々少しでもうつら〳〵と眠りかけると、直に夫が大聲で、召使に對して花嫁の寐床のとり方が惡かつた事を叱りつけてゐる聲に眼を醒まされた。

翌日もピトルキオは同じ事を續けた。相變らずキヤサリンには優しい言葉をかけ乍ら、彼女が食事を攝らうとすると、妻の前に並べてあるものに悉くけちを付けて、夕食のときしたと同じやうに朝飯も床へ投げつけてしまつた。流石に高慢なキヤサリンもこれには弱つて密つと食物を少しとつて來て吳れるやうに召使に賴んだ。しかし召使はピトルキオに吩咐られてゐたので、主人に知らせずには何一つ上げられないと答へた。

『あゝ、あの人は私を飢させる爲めに結婚したのか知ら。父の家の前に來る乞食でさへも何か食物を貰ふのに、これまで人にものを吳れなどと願つた事のない私は、何も食べないので飢死しさうだ。眠りが足りないので眼が舞ひさうだ。夜は怒鳴り聲で眼を醒され通し、御馳走の代りに小言ばかりきき一番厭なことは、若し私が眠つたり、食物でも食べやうとすればそれで直ぐ死にでもするかのやうに言つて、私を完全に愛してゐるといふ名目のもとにされることだ。』ここでピトルキオが這入つて來た

ので、彼女の獨言は途切れた。ピトルキオは彼女を飢死させようとは思はなかつたので、肉を少し許り持つて來て言つた。

『可愛いケエト、どんなかい。ねえ御覽、私はお前に自分で肉を料理して持つて來たよ、隨分勉强でせう。此の位深切にすればお禮を言つて吳れても宜いでせう。何故默つてゐるの、それではお前は肉は嫌ひなんだね、私はすつかり無駄骨を折つてしまつた』

そして召使にそれを持ち去るやうに命じた。キヤサリンは非常な空腹の爲め、其の高慢の鼻も稍々折れて、心の中では怒り乍らもかう言はずに居られなかつた。

『どうか其の儘にして置いて下さい。』

しかしピトルキオはキヤサリンにかう云はせただけでは濟ませなかつた。

『どんな詰らない事をして貰つても禮は言ふべきものだ。お前が此の肉を食べる前に、私にもさう言つて貰ひたいものだね。』

そこでキヤサリンは厭々ながら

『ありがたう御座います。』と言つた。ピトルキオは僅かばかりの食物を與へて置きながら『澤山おあがりなさい、ケエト。なるべく急いでね。時にね、お前、私達はお前の御父さんの家へ、絹の着物や帽子や、金の指環や、襟飾、襟卷なんどと素敵に飾り立て見せびらかしに行かうではないか。』

そして彼女に本當にかう云ふ華美なものを買つてやると思はせる爲めに、仕立屋や小間物屋を呼び、前以て注文して置いた着物を持つて來させた。それから彼女が未だ半分も空腹を滿さぬうちに、召使に命じて皿を下げさせ、妻に向つて言つた。

『おや、もう食べたのかい。』

小間物屋は帽子を出して、

『これが旦那樣の御注文の帽子でございます。』と言つた。するとビトルキオは忽ち怒鳴り出して、其の帽子は飯茶椀を型にして造つたもので、鳥貝か胡桃位の大きさしかない、そんなものは持つて歸り造り直して來いと言つた。キヤサリンは、

『これで結構ですわ。上品な奥樣方はみんなそんなのを被つていらつしやいますもの。』と言つた。

『お前も上品になつたらそんなのを御被り。それ迄は不可ないよ。』とビトルキオは答へる。キヤサリンは肉を食べたので稍元氣を回復して言つた。

『あなた、私も一言いふ許しを戴ても宜いと思ひます。是非云はせて頂きます。私は子供でも赤坊でもありません。あなたより豪い方でも私に思ふ存分言はせて下さいました。御厭でございましたら耳を塞いでお出でなさい。』

ビトルキオはこの妻の怒つた言葉に耳傾けやうともしなかつた。彼は妻とがみ〳〵議論すること等

より、妻を禦するにいゝ方法を發見してゐたからであつた。で彼は答へた。

『全くさうだね。これは實に下品な帽子だよ。お前が氣に入らないと言つたので、私はお前が一層好きになつたよ』

『好いて下さらうと下さるまいと、私は其の帽子が氣に入りました。私は其の帽子を買ひます、でなれば帽子は要りません。』

『何、上着を見たいと御言ひかい。』とビトルキオは尙も意味を穿き違へたふりをして言つた。もとよりビトルキオは、帽子も上衣も買つてやる積りはなかつたので、出來る丈け其の着物のあらを探し出した。

『おや〳〵これは驚いた！　何といふ地質だらう。おいこれが袖の積りかい。林檎饅頭よろしく上下に切りつけた太砲のやうだね。』

『當節流行の型に造れとの仰せでございましたので』と仕立屋は答へた。するとキヤサリンは、こゝな立派な流行型の上衣を見たことがないと言つた。ビトルキオにとつてはもうこれで十分だつたので商人達へは密かに代價を支拂ふことにし、また如何にも奇妙に思はれた取扱ひに對しては詫を入れることにして、彼は倦くまで激しい言葉と狂暴な身振りとを以て、仕立屋や小間物屋を追ひ出してしまつた。それからキヤサリンの方を顧みて、

『さあ、それではケェト、御前の御父さんの家へ此の粗末な着物のままで行くことにせう。』と言ひ、馬を命じた。そして今は未だ七時であるからお晝頃にはバプティスタの家に必らず到着することが出來ようと言つた。ところが彼がさう云ひ出した時は早朝ではなく、恰度お晝頃だつた。キャサリンは、夫の態度の激烈なのに稍々壓倒されてゐたので、恐々おとなく言つた。

『今は二時でせうと思ひます。私達があちらへつきますのは夕御飯前になりませう。』

しかしピトルキォは、妻の父の家へ行く前に、自分の云ふ事には何でも同意するほど、妻を完全に服從させやうと考へてゐたので、恰も自分が太陽の主で時間さへも勝手に出來るものであるかのやうに、自分が出立する時間は、己の欲する時であらねばならぬと述べ、

『私の爲ること言ふことに、お前は未だ反對をしてゐる。それでもう今日は行く事を止した。今度行くときには私の言ふ通りの時間にさせる。』

其の翌日からキャサリンは、新らしく知つた服從の稽古をさせられた。そして彼女の高慢な心が、反對などと云ふ言葉を忘れてしまふ程絶對に服從するまでは、仲々父の家へ行くことを許されなかつた。辛つと父の家へ行く事となつた途中でも、彼女は危く引き返さねばならぬやうな破目に陷つた、といふのはピトルキォが月が日中にキラ〳〵と輝いてゐると斷言したので、彼女はそれを太陽であると仰めかしたからであつた。

『扨、母の息子であるわが身に誓て云ふが、お前のお父さんの家へ行くまでは、あれは月とでも星とでも、私の好きなものに爲て置くよ。』

彼はかう言つて戻りさうになつたので、今はもうがみ〳〵女のキャサリンではなく、柔順な妻になつてゐたキャサリンは、

『折角こゝ迄まゐつたのですから、さあ出かけませう。あれは太陽とでも、月とでも、何とでも御好きなものにして置きます。若し貴方が燈心草の心の蠟燭と仰有いますれば、私もこれからは屹度さう申しませう。』

彼は其のことをもつと確めたいと思つたので、更に言つた。

『いや、あれは月だよ。』

『月でございますとも。』とキャサリンは答へる。

『虚言を言つてゐる。あれは惠深い太陽だ。』

『それでは惠深い太陽でございます。あなたが太陽でないと仰有れば、太陽では御座いません。貴方が仰有る通りのものでございます。またキャサリンにとつても仰有る通りのもので御座います』

そこでピトルキォは彼女に旅を續けることを許した。しかし此の服從の心持が長續きするか何うかを試すために、途中で出逢つた老紳士に若い娘の積りで話しかけた。

『今日は、やさしい御嬢さん。』と言つて、キヤサリンを顧み、老人の頰の紅い美しさを讃め、其の眼を二つの星に譬へて、このやうな綺麗な令嬢を見たことがあるかと訊ねた。そして再び老人に向つて『美しい御嬢さん、も一度改めて御挨拶いたします。可愛いケエト、御嬢さんが餘り御美しいから抱いてお上げ。』と言つた。今はもう全く柔順になり切つたキヤサリンは、直に夫の意見通りになり、老紳士を若い令嬢のつもりにして話しかけた。

『若い花の蕾の御嬢さん、何てお美しく、生々と御可愛いんでせう。何處へ御出かけでいらつしやいますか。御宅はどちらでいらつしやいますか。こんな御美しい御子様を御持ちの親御は何て御幸福でせう。』

『おい〳〵何うしたのだ、ケエト。まさか氣が變になつたんぢやあるまいね。此の方は男で、しかも老人で皺だらけの、弱り果てた方なんだ。お前の言ふやうな娘さんぢやないよ。』

とピトルキオが言つた。そこでキヤサリンも直に、

『御免下さい、御老人。太陽の爲め眼が眩んで、何もかも綠色に見える位でございます。今やつと御立派な老人でいらつしやる事が分りました。飛んでもない間違ひを致しました事を何卒御宥し下さいまし。』

『何うか宥してやつて下さい、御老人。してどちらへ御出かけですか。若し同じ方角へまゐるのでしたら、私達は喜んで御供いたしませう』とピトルキオも言つた。

『いや足下ならびに面白い奥さん、あまり不思議な挨拶を承つたので吃驚してしまいました。手前はヴインセンシオと申すもので、パデユアに居る息子を訪ねに行くところで御座います』と老紳士は答へた。ピトルキオは此の老紳士が、バプティスタの季女のビアンカと結婚することになつてゐるルウセンシオの父だと云ふ事を知つたので、彼の息子が金持の令嬢と緣組しようとしてゐる事を話して喜ばせてやつた。一同は愉快な旅を續けて、遂にバプティスタの家に着いた。家には今ビアンカとルウセンシオの婚禮を祝ふ爲めに大勢の人が集つてゐた。バプティスタはキヤサリンを手離すと直に、ビアンカの結婚を許してやつたのである。

一同が家に入ると、バプティスタは喜んで婚禮の宴へ招じた。其處には他にも一組新婚の夫婦が來てゐた。

ビアンカの夫のルウセンシオと、他に新婚の花聟ホウテンシオとは、ピトルキオの妻のがみ〳〵した性質を諷刺して、密かに揶揄はずには居られなかつた、そしてこの得意になつてゐる花婿達はピトルキオが運の惡い嫁選みをした事を嘲笑して、自分達が選んだ妻の柔順な性質を非常に喜んでゐるやうに見えた。ピトルキオは、宴會が濟んで婦人連が退出するまでは、かう云ふ皮肉には耳も藉さなかつた。しかしバプティスタ迄一緒になつて嘲笑してゐるのを見たので、ピトルキオはたまり兼ね、自

分の妻は誰の妻よりも柔順であると斷言した、するとキヤサリンの父は、

『いや婿殿ピトルキオ、私は眞面目で云ふが、お前さんが一等我儘者を貰ひはしないかと思ふ。』と言つた。

『いえ、さうぢや無いのです。』とピトルキオは否認して、

『私の申すことが本當だと云ふことを證明する爲めに、めい〳〵が妻を呼び寄せてみませう。そして使を受けて早速やつて來る最も柔順な妻を持つた者が、われ〳〵の提出する賭を獲ることにしませう。』と言つた。

他の二人は喜んでこれに贊成した、と云ふのは自分達の優しい妻は、あの我儘者のキヤサリンより柔順であることを確信してゐたからであつた。二人は二十クラウンの賭を申し出たが、ピトルキオは樂しさうに、其の位の賭なら鷹や獵犬にだつて賭ける、妻には其の二十倍も賭けようと言つた。そこでルウセンシオとホウテンシオは賭を百クラウンまで騰げた。ルウセンシオが先づ最初に使ひをやつて妻のビアンカを呼ばせた。召使は歸つて來て言つた。

『旦那樣、奥樣はお忙しくていらつしやれないとの御言葉でございます。』

『何、忙しくて行かれないと云ふのか。それが妻としての返事かね。』とピトルキオが言つた。すると一同は彼を嘲笑つて、キヤサリンがもつと惡い返事を寄こさねば可がと言つた。次はホウテンシオが

妻を呼びにやる番であつた。彼は召使に吩咐けた。

『妻のところへ行つて此所へ來るやうに願つて吳れ。』

『おや〳〵、願ふんですか。それぢや奥さんも來なければならぬでせうよ。』とピトルキオが言つた。

『いや、あなたの奥さんなら願つても來ないでせうよ。』とホウテンシオが遣り返した。しかし此の叮寧な花聟も、召使が妻を伴れないで歸つて來たのを見ると、稍々蒼くなつて言つた。

『おや、何した！　家内は何處にゐる。』

『旦那樣、奥樣が仰有いますには、旦那樣は何か詰らぬ冗談をなさらうと云ふんでせう、それでこちらからは行きませんから旦那樣の方から御出下さいとの事でございました。』と召使は答へた。

『これは益々惡い。』とピトルキオは言つて、今度は自分に召使を呼んで吩咐けた。

『サラ、奥さんのところへ行つて、私が來るやうに命令したと言つてお吳れ。』

一同は、迚もキヤサリンはこの命令に從ふまいと思ふ間なく、バプティスタが吃驚して叫んだ。

『おや〳〵、間違ひなくキヤサリンが遣つて來ましたよ。』

キヤサリンは室に這入ると、

『御呼びになりましたのは、何の御用でございます。』と優しく訊ねた。

『お前の妹とホウテンシオの奥さんは何處にゐる？』

『客間の爐邊で話をして居ます。』

『行つて、ここに伴れて御出で。』とビルキオがかう言ふと、キヤサリンは一言も返さずに、夫の命令を果すために出て行つた。

『不思議なことと云へば、これは實に不思議な事だ。』とルウセンシオが言つた。

『全くだ。一體何の前兆だらう。』とホウテンシオも言ふ。

『何、平和の前兆さ。愛と、平和な生活と、正當な支配の前兆さ。一言にして言へば、樂しく幸福なあらゆるものの前兆さ。』とビトルキオが言つた。キヤサリンの父親は、娘の善くなつた事を見て非常に喜んで言つた。

『さあ幸運が向いて來ましたぞ聟殿、ビトルキオ！賭はあなたの勝だ。私は其の賭に、娘が生れ代つたやうに變つたから、別に娘を持つた積りで、猶二萬クラウンを持參金として附け加へて上ませう。』

『いや、もつと巧く賭に勝つて御目にかけませう、そして妻がどんなに貞淑に、柔順になつたかを御目にかけませう。』

そしてキヤサリンが二人の夫人を伴れて室に這入つて來るのを見ると、なほ言ひ續けた。

『御覽なさい、妻があなた方の强情な妻君を女らしく說き伏せて、とう〳〵捕虜にして伴れて來ましたよ。キヤサリン、お前の其の帽子は似合はないよ。そんな玩具みたいなものは脫いで踏み躙つてお

しまい』

キヤサリンは直に帽子を脫いで投げ捨てた。ホウテンシオの妻は、

『おやまあ！　私は、こんな馬鹿氣た服從を夫に對してするやうになりたくないものだわ。』と云へばビアンカも亦、

『まあ、貴女はなんて馬鹿な務めをなさるのでせう。』と言つた。

そこでビアンカの夫は妻に向つて、

『お前も馬鹿な務めをして呉れたら宜かつたのだ。美しいビアンカ、お前の務めに對する智慧のお蔭で、私は食事が濟んでから今までに百クラウンも損してしまつた。』と言つた。

『まあ本當に貴方は馬鹿ね、私が務めをすることを賭したりなんかして。』

『キヤサリン』とビトルキオは妻を呼んで、

『この强情な妻君方に、夫たり主人たる人に對して妻がどんな義務を負うてゐるかを敎へて御上げ。』と言つた。一同が驚いた事には、生れ變つたやうになつたがみ〳〵女のキヤサリンが、ビトルキオの意志に從ふときは默々として、義務を果したものであるが、今妻らしい柔順といふ務めを賞讃する場合には洛々として意見を述べ立てた事であつた。かくしてキヤサリンは、これ迄のやうにがみ〳〵女のキヤサリンとしてゞはなく、最も柔順な忠實な妻のキヤサリンとして、再びパデュアの町で有名に

なつた。

間違ひの喜劇

サイアアキューズ州とエフィサス州とは不和の間柄であつたので、エフィサス州では、若しサイアラキューズの商人をエフィサスの町で見附けるやうな事があれば、それに千マークの賠償金を支拂はせるか、又は死刑に處するといふ殘酷な法律を制定してゐた。

イージョンと呼ぶサイアラキューズの老商人が、エフィサスの町にゐるところを見附けられて公爵の前に伴れて行かれ、莫大な罰金を支拂ふか、又は死刑の宣告を受けるといふ事になつた。

イージョンには罰金を支拂ふだけの金もなかつた。しかし公爵は死刑の宣告を下す前に、彼に身の上話をするやう、またサイアラキューズの商人がエフィサスの町に來れば必らず死刑にきまつてゐるのに、何故に危險を冒して來たかといふ理由を話すやうに希望した。

イージョンは、悲しい事ばかりで此の世に生きてゐるのは厭になつてゐたので、死ぬことは少しも厭はないが、自分の不幸な身の上話をせよと言はれるほど、辛らい目に逢つたことがないと言つた。それから次のやうに物語を始めた——

『私はサイアラキューズに生れまして、成長の後商業に從事しました。一人の婦人と結婚して幸福に暮らしてましたが、私は余儀ない事情でエピダムナムに行き、其處に商賣の都合から六ヶ月許り滯在

し未だ暫く留まらねばならぬ事が分つたので、妻を呼び寄せました。妻は到着すると直に産褥に就いて双生兒の男の兒を産みました。此の双生兒が不思議なほどよく肖てゐて、どちらがどちらと見分けも付かない位でした。恰度妻が産褥に就いたと同時に、妻と同じ旅屋にゐた貧しい一婦人が矢張り男の双生兒を産みました。そして此の兒達も、私共のと同じやうにお互に非常に似てゐるのです。それに兩親は非常に貧乏だつたので、私は此の二人の子供を買ひとつて、息子達の召使にする積りで育てました。

私共の子供は非常に綺麗でしたので、妻は尠からず自慢にして居りました。妻は毎日毎日家へ歸りたいと言ふものですから、私も氣が進まぬ乍らも承知して、悪い時船出してしまひました。それはエピダムナムを出てから未だ一海里も行くまいと思はれる時分に、恐ろしい大嵐が起つたのでした。それは〳〵怖しい勢で嵐が吹き續けるので、船員達も船は助からぬものと見込みを付け、自分達ばかり助かる爲めにボウトに鈴鳴りに乘つて、船を見棄ててしまいました。私達だけ其の船に殘つて、今にも怖ろしい嵐の爲め船が沈むかと刻々に恐れおののきました。

妻は絶えず泣き續ける、何も知らぬ赤坊までが母の泣くのを見て眞似をして泣き、憐れな呟き聲を立てるので、自分では少しも死を恐ろしいと思ひませんでしたが、兒等の爲めに強い恐怖を感じました。私は何うかして彼等を助けたいものであると一生懸命に工夫をしました。私は船員達が嵐の用意

に備へて置く、代りの小さな檣の一端に、年下の方の息子を縛り付け、他の一端に召使ひの双生兒の年下の方を縛り付けました。それと同時に妻にも差圖して、長男の子供達を他の檣に縛り付けさせ、かうして妻は大きい方の子供達を、私は少さな方の子供達の世話を終へますと、今度はめい〳〵の體を離れ〳〵に、子供達の傍に結へ付けました。かうした工夫を爲なかつたならば私達はてつきり海の藻屑となつてゐた譯です。船は大きな岩に打ち上げられて紛微塵になりました。私達は此の小さな檣によぢ登つて、水の上に出てゐる事が出來ましたが、私は二人の子供の世話も爲ねばならず、妻を助けてやる事が出來ないでゐるうちに、妻は他の二人の子供と一緒に直に私と離れ〳〵になつてしまいました。しかし未だ其の姿を見失はぬうちに、妻達は幸に、多分コリンスから來たのでせう、ある漁船に救け上げられました。妻達が助かつたので、私はもう外に心配はなく、愛する子供と奴隷の子供を助ける爲めに一生懸命荒波と戰ひました。遂に私達もある船によつて救はれる事となりましたが、其の水夫達に私の知己があつて、深切に歡迎し、助力して呉れ、無事にサイアラキューズに上陸することが出來ました。しかし此の悲しい出來事以來、妻や長男の消息は杳としてないのです。

私の唯一人の愛兒である季の息子が十八歳になりました時、母親や兄のことを種々と訊ねて、矢張り兄を失くしてゐる若い奴隷の召使をつれて是非二人を探しに行かせてくれと賴んで仕方がないので、私もとう〳〵不承々々にこれを許してやりました。勿論私も妻や子供の消息を聞くことを熱望しては

居ましたけれども、二人を探させに息子を遣はして、又息子を失ふことがあつたらと危んだからでありました。息子が私の許を去つてから最早七年になります。五年間といふもの私は世界中を旅して歩いて、息子を探しました。遠くギリシヤまでも行き、アジアの境界を通つて、海岸傳ひに家に歸る途中人を隱まふやうな場所は如何なる所と雖も探さずに歸るのが殘念なので、此のエフィサスに上陸した譯でした。しかしもう今日で私の身の上話もお終ひです。唯、妻と子供達が生きてゐるといふ事さへ確かであれば、私は死んでもどんなに幸福でせう。』

これで不仕合せなイージョンの不運の物語は終つた。公爵は、失き子供を愛する一念から非常な危難に陷つた父親の不運を憐み、若しこれが、公爵の誓言や威勢を以てしても變更することの出來ぬ法律に觸れてゐないのであつたなら、早速赦してやつたであらうにと言つた。そして嚴しい法律の文言通りに速刻死刑に處する代りに、一日だけ猶豫してやり、何とかして金を借りるなり、貰ふなりして罰金を支拂ふやうにと言つた。

此の恩赦の一日も、イージョンにとつてはさほど有難くなかつた。エフィサスでは別に知己もなかつたので、見も知らぬ人が彼の罰金を支拂ふ爲めに千マークを立てかへて呉れたり、借して呉れたりしさうには、思はれないからであつた。彼は救はれる希望もなく、すご〳〵と公爵の前を退つて、看守に監視される事となつた。

イージオンは、エフィサスでは一人の知己もないと思つてゐたが、今、季の息子の行衛を隈なく尋ねてとう〳〵命を失ふといふ其の際に、尋ねる息子も、其の兄も共にエフイサスの町にゐるといふ事が分つた。

イージオンの息子達は顏や身體がよく似てゐる許りでなく、其の名まで同じアンテイフォリスと云ひ、二人の双生兒の奴隷も同じやうにドロウミオウと呼ばれてゐた。老人がエフイサスまで探し求めに來た季息子、サイアラキューズのアンテイフォリスは、恰度父イージオンが到着したと同じ日に、奴隷のドロウミオウを伴れて矢張りエフイサスに遣つて來たのであつた。彼も亦サイアラキューズの商人であつたので、父と同じ危險に陷るところであつたが、幸一人の友人に出逢つて、サイアラキューズから來た老商人が捕はれたといふ話を話を聞かされ、エビダムナムの商人の積りで押し通した方が宜からうと忠告された。アンティフォリスもこれに讃成し、且つ同國人が捕はれたといふ話を聞いて非常に氣の毒に思つたが、その老商人が自分の父であらうとは夢にも思はなかつた。

イージオンの長男は（彼は弟のサイアラキューズのアンティフォリスと區別するために、エフィサスのアンティフォリスと呼ばなければならぬ）エフィサスに最早二十年も住んで金持になつてゐたので、父の生命の賠償金を支拂ふことは容易に出來たのであるが、彼は父親のことに就いては何も知らないのであつた。海で難船に出逢つて、母と共に漁夫に救けられた折は未だ非常に幼かつたので、唯さうして助けられたといふ事を知つてゐるだけで、父の事も母の事も少しも覺えてゐなかつた。また此のアンティフォリスと母親と奴隷のドロウミオウを助け上げて呉れ、そして二人の子供は賣る目的で、（不幸な母親はそれを知つて非常に歎いた。）伴れて行つてしまつた漁夫のことも、少しも記憶になかつた。

アンティフォリスとドロウミオウは、エフイサスの公爵の伯父君に當る、有名な武士、メナフォン公爵へ賣られた。此の公爵は、甥の公爵を訪問する時に、二人の子供を伴れて行つたのであつた。

エフィサスの公爵は幼いアンティフォリスが非常に氣に入り、成長の後彼を士官に取り立てた。アンティフォリスは其の後戰爭で武勳を立て、保護者である公爵の命を救つたので、公爵は其の褒美としてエドリアナといふエフィサスの金持の一婦人と結婚させた。恰度父親がエフイサスに來た折には、此の婦人と共に住んでゐたのであつた。（奴隷のドロウミオウも未だ彼に仕へてゐた）

サイアラキューズのアンティフォリスは、先きにエビダムナムの者であると云へと忠告して呉れた友人と別れると、召使のドロウミオウに金を持たせて自分が其所で食事をするつもりの旅宿へ遣した。そして彼は暫く町をぶらついて、人々の風俗なども見たいからと言つた。

ドロウミオウは愉快な男で、アンティフォリスが沈んだり、鬱いだりする時には、いつも面白い皮肉や、愈快な冗談を言つて主人を慰めた。それ故普通の主從間では見られぬほどの言葉の自由をドロウ

ミオウは許されてゐた。

アンティフォリスはドロウミオウを旅宿へ遣つたあとで、暫く凝乎と彳み、空しく母と兄とを探しまはつて來た淋しい漂泊の旅を思ひめぐらした。二人の消息は何處に行つても聞かれなかつたのである。彼は悲しさうに獨り言した。

『私は大海の中の水の一滴のやうなものだ。仲間の滴を探してゐるうちに自分も廣い海の中に沈んでしまふ。それと同じで不仕合な私は母と兄を探して、迷子になつてしまふ。』

彼がこんな風にして、これ迄の無益だつたわびしい旅のことを思ひ耽つてゐるうちに、ドロウミオウが（彼はさうだと思つた）歸つて來た。アンティフォリスは召使が余り早く戻つて來たのを不審に思つて、金は何處に置いて來たかと訊ねた。ところがかう話しかけられた此の男は、彼の召使のドラウミオウではなくて、エフィサスのアンティフォリスに仕へてゐる双生兒の兄ドロウミオウなのであつた。此の二人のドロウミオと、二人のアンティフォリスとは、イージョンが子供の時分に非常によく似てゐると言つてゐたやうに、成長した後も似てゐたのであつた。それ故アンティフォリスが自分の召使が歸つて來たものと思ひ、何故そんなに早く歸つて來たのかと尋ねたのに無理もなかつた。ドロウミオウは答へた。

『奥様があなた様に食事の御案内をして來いと仰有いました。早く御歸りになりませんと、鶏は焦げ

豚は金串から落ち、肉はみんな冷めたくなつてしまいます。』

『そんな洒落は今は流行ないよ。金は一體何處に置いて來たのだ。』とアンティフィリスは言つた。しかしドロウミオウは、奥様に吩咐かつてアンティフォリスを食事の迎へに來たとばかり言つてゐるので、

『奥様つて誰だ』と訊いてみた。

『貴方様の奥様ぢやございませんか、旦那様』とドロウミオウが答へる。アンティフォリスには未だ妻がなかつたので、腹を立てて言つた。

『お前は、私が時々お前に親しい口をきくものだからつけ上つて失禮な冗談を言ふのだね。私は今は冗談を言つてゐるどころではないよ。金を何處に置いて來たのだ。われ〳〵は此の土地では他所人なのに、何うしてあの大金を自分で守らないで、人に預けて來たのだ。』

ドロウミオウは、自分の主人だと思ひこんでゐる人の口から、他所人だといふ事を聞いて、主人は冗談を言つてゐるものと思ひ、氣輕に言つた。

『どうか旦那様、御食卓に御就きになつてから御冗談は仰有つて下さいまし。私の責任は唯、旦那様を、奥様や御妹様と御一緒に御食事に御伴れすれば宜しいのですから。』

アンティフォリスはもう堪え切れなくなり、ドロウミオウを毆りつけたので、彼は飛んで歸つて、女主人に、主人が食事に歸ることを拒絶し、また妻などはないと言つたといふ事を告げた。

エフィサスのアンティフォリスの妻であるエドリアナは、自分の夫が妻はないと云つたといふ事を聞き非常に怒つた。彼女は嫉妬深い性質の女で、これは屹度自分にます婦人が出來た譯であらうと云ひ、苛々して、暴言を吐いたり、夫を罵つたりした。同居してゐる妹のルウシアナは、此の根もない疑念を晴らすやうに說いたが無駄であつた。

サイアラキューズのアンティフォリスは旅宿へ行つて見ると、其處にちやんとドロウミオウが居て金を持つてゐた。彼は自分の本當の召使のドロウミオウを見ると、先き程の失禮な冗談を叱りつけてやらうと思つた。恰度其處にエドリアナが遣つて來て、彼を見るとてつきり自分の夫だと思ひ込み、夫が素知らぬ顏してゐると云つて責め始めた（彼はこの腹立てた婦人を知らなかつたので、そんな顏したのも尤もであつた）そして結婚前にはあんなに愛して呉れたのに、今は自分を措いて他の婦人を愛してゐるのだと言つた。

『あなた、何うしてさうなつたんです。何うして私が厭になつたんです』

『美しい御婦人、あなたは私にそんな事を御訊ねになるのですか』とアンティフォリスは驚いて言つた そして自分は決して彼女の夫ではないこと、エフィサスに來てから未だ二時間も經たない事を話したが、無駄であつた。彼女はどうしても彼を家に伴れて行くと言ひ、アンティフォリスも逃れる事が出來ず、仕方なしに彼女に連れられて兄の家へ行つた。そしてエドリアナと彼女の妹と一緒に食事をした

が、一人は彼を夫と呼び、一人は彼を兄と言つた。彼は全く仰天して、自分は眠つてゐる間に此の女と結婚したのかも知れぬ、或は今居眠つてゐるところかも知れぬと考へた。彼の供をして來たドロウミオウも、主人に劣らず驚いた。それはドロウミオウの兄の妻である料理人が、彼のことを夫であると要求したからであつた。

サイアラキューズのアンティフォリスが兄の妻君と食事をしてゐる時に、本當の夫である兄が奴隷のドロウミオウをつれて家に歸つて來た。しかし召使達は、誰も家に入れては不可ないと女主人に吩咐かつてゐたので、仲々戸を開けてくれなかつた。そこで二人は自分達はアンティフォリスとドロウミオウだと言つて、どん〳〵戸を叩くので、女中達は、アンティフォリスは奥樣と食事中、ドロウミオウは臺所に居ますよと言つて嘲笑した。二人は戸も破れよと叩いたが何うしても這入ることが出來なかつたので、アンティフォリスはとう〳〵非常に怒つて行つてしまつた。そして自分の妻が紳士と食事をしてゐると聞かされて、不思議でならなかつた。

サイアラキューズのアンティフォリスは、食事が濟むと早々に口實を設けて、家を出てしまつた。彼は主婦に夫だとしつこく言はれ、またドロウミオウはドロウミオウで、料理番の女から夫だと請求されてゐるのを聞いて、當惑してしまつた。彼は妻君の妹のルウシアナは非常に氣に入つたけれども、嫉妬深いエドリアナは大嫌ひであつた、ドロウミオウも臺所にゐる御立派な妻君は少しも氣に入らなかつ

たのである。で主人も召使も出來る丈け早く、此の新らしい妻君の居る家を逃げ出すことを喜んだ。

サイアラキューズのアンティフォリスは家を出ると直ぐに、金細工人に出逢つた。この細工人もエドリアナが間違へたと同じやうに、彼をエフイサスのアンティフォリスと間違へ、彼の名を呼んで金の頸飾を渡した。アンティフォリスはそんなものは自分のものでないと言つて拒絶したが、金細工人は貴方の御注文に依つて造つたものであると言つて、それを彼に渡したまま行つてしまつた。アンティフォリスは、こんな奇妙な出來許りに出逢ふ土地には、もはや一刻も留りたくなかつたので、ドラウミオウに荷物を皆船に運ぶやうに命じた。彼は確かに魔法に憑かれてゐるのだと考へた。

間違つたアンティフォリスに頸飾を渡した金細工人は、この後で直ぐ借金の爲めに捕縛された。恰度彼が捕縛されてゐるところに、頸飾りを渡したと許り思つてゐる、結婚した方のアンティフォリスが通りかかつた。彼はアンティフォリスを見ると、自分が借金の爲めに捕縛された金額は、彼に渡した金の頸飾とほゞ同じだつたので、何うか其の代價を支拂つて頂きたいと言つた。アンティフォリスはそんなものを請け取つた覺えはないと言ひ。金細工人の方では今し方渡した許りだと主張して、二人は各自分を正當だと信じ、長い間この事を論じあつた。アンティフォリスは金細工人から頸飾を受け取つた覺はなく、また金細工人の方では、アンティフォリス兄弟があまりによく似てゐたので、彼に頸飾を渡したことは確かだと思つてゐたのであつた。とう〳〵警官がやつて來て、借金の罪の爲め金細工人を牢

獄へと引き立て、また同時にアンティフォリスも金の頸飾の代價を支拂はぬかどで、金細工人の申出により捕縛された。つまり二人は口論の揚句、共に牢屋へ引かれる事となつた。

アンティフォリスは牢へ行く途中で、弟の奴隷であるサイアラキューズのドロウミオウと出逢つたので、自分の奴隷だと思ひ違ひをし、妻のエドリアナの許へ行つて、捕縛されるに至つた理由の金を持つて來させるやうに命じた。ドロウミオウは船の出帆の用意が出來た事を主人に知らせに來たので、先き程食事をして、大急ぎで逃れて來たあの妙な家へまた自分を遣らうとするのを不思議に思ひ、返事することも出來なかつた。それにアンティフォリスは、冗談を言はれるやうな氣分でゐない事は直ぐ分つた。そこでドロウミオウは又エドリアナの家に行かなければならぬ事を、ぶつ〳〵言ひながら、『ダウザベルの奴が俺を亭主などと言ひやがつた家へか、だが行かなければならぬ。召使は主人の命令に從ふのが當然だから。』と不平をこぼした。

ドロウミオウはエドリアナに金を渡されて歸る途中で、サイアラキューズのアンティフォリスに出逢つた。アンティフォリスはこれ迄に出逢つた驚くべき出來事に今だに呆然としてゐた。と云ふのは兄のアンティフォリスはエフイサスでも有名であつたので、道で出逢つた者で親しく挨拶をしない者は殆んどなかつた。或る者は借りた金だと言つて彼に金を返さうとし、或る者は遊びに來いと案内し、或る者は彼が盡してやつたいふ深切に對して禮を言ひ、皆彼を兄と間違へてしまつた。或る仕立屋は彼の

爲めに求めたと云ふ絹地を見せて、着物を作るから是非寸法を取りたいと言つた。

アンティフォリスは、自分は魔法使の國に來たのではないか知らんと思つた。それにドロウミオウは彼に、牢屋に伴れて行かれるところだつたが何うして自由になつたかと聞き、エドリアナが借金を拂ふために寄越して呉れた金入りの財布を渡したので、彼は困惑した考へを救はれるどころではなかつた。ドロウミオウが、捕縛だとか、牢屋だとか、エドリアナから貰つて來た金だとかと話した事は、アンティフォリスの考へを全く困亂させた、彼は言つた。

『ドロウミオウの奴確かに氣が狂つたな。われ〳〵は夢心地で此處を彷徨つてゐる心地がする。』そして自分の亂れた考へに思ひ及んで慄然として言つた。

『惠深い神樣！　どうかこの奇妙な所からわれ〳〵を御救ひ下さい。』

此の時また一人の見知らぬ婦人が、彼の許につか〳〵と遣つて來て、アンティフォリスと呼びかけ、今日御一緒に食事をしたが、其の時遣ると御約束になつた金の頸飾を呉れと願つた。アンティフォリスは最早たまりかね、其の女を魔法使だと呼んで、金の頸飾をやると云ふ約束をした覺えはない、一緒に食事をした事もない、まして其の顏を見るのは今が初めてだと返事した。しかし女は倦くまでも、彼と確かに一緒に食事をしたし、頸飾を貰ふ約束もしたと主張する。アンティフォリスの方ではどこまでも其を否認する。女は、それほど金の頸飾を與へるのが厭ならば、自分が彼に與へた高價な指環を戻

して呉れと言ひ張る。かうなるとアンティフォリスは全く狂氣の樣になり、再び女のことを魔法使ひだと罵り、指環のことも女の事も知るものかと一目散に逃げ出してしまつた。女の身にとつては一緒に食事をしたこと、指環を與へたこと、其の代りに金の頸飾を貰ふ約束をしたことほど確かな事實はなかつたので、彼の凄まじい顏付きと言葉に唯呆れ返つた。此の婦人も他の者と同じやうな間違ひをしたので、彼を兄のアンティフォリスだと許り思つたのであつた。實際結婚してゐる方のアンティフォリスは、此の婦人に弟のアンティフォリスが責め立てられたやうな事柄を皆爲てゐたのである。

結婚してゐる方のアンティフォリスが、自分の家に入ることを拒まれたとき（家の中の者は、既に彼を入れてゐると思つてゐたのだ）彼は非常に怒つて行つてしまつた。そしてこれは妻がいつもよくやる嫉妬の發作だと思つて、また訪ねも爲ない女を訪問したと云つては、よく責められた事を思ひ出して、いつそ自分の家から閉め出した復讐として、あの女の所へ行つて一緒に食事をしてやらうと決心した。女は非常に叮重に迎へて呉れた。アンティフォリスは妻が癪に障つてならなかつたので、妻に與へる積りであつた金の頸飾を、其の女に遣ることに約束をきめた。それが例の金細工人が間違へて弟の方に渡した頸飾であつた。女は立派な金の頸飾を貰ふことが非常に嬉しかつたので、結婚してゐるアンティフォリスに指環を與へた。ところが（弟を兄と間違へて）女が兄の方だと思つてゐた彼はそんなものは知らないと否認し、其の上女さへ見たことがないと言つて逃げ出したので、女はアンティフォ

リスが氣が狂つたのだらうと考へた。そこで早速アンティフォリスの妻のところへ行つて、彼が狂氣になつた事を話すことにした。女がエドリアナにさう話してゐる時に、アンティフォリスが看守に護られてやつて來た（借りた代金を支拂ふ金を取りに歸宅を許されたのであつた）エドリアナがドロウミオウに持たしてやつた金は、ドロウミオウが違つたアンティフォリスに渡してしまつたからであつた。

アンティフォリスは妻を見ると、自分を何故家から閉め出したのだと非難したので、エドリアナは、これはあの女の云ふ通りに、夫はたしかに狂氣になつたのに違ひないと信じた。それに食事の時にも自分は夫でないと抗言したり、エフィサスには今日來た許りだとか言つてゐた事も思ひ出して、エドリアナは夫が狂人になつたのに間違はないと思つた。そこで彼女は、看守に金を支拂つて夫を放免して貰ひ、召使に命じて夫を綱で縛らせ、暗い室に運び入れ、彼の狂氣を癒す爲めに醫者を呼ばせにやつた。アンティフォリスはかうされる間躍起となつてそれは間違つた罪であると叫び立てた。これも全く兄弟があまりに良く似てゐることから生じた事であつた。しかし彼が暴るれば一同は猶更彼の狂氣を信じ、遂には同じことを言つてゐるドロウミオウ迄縛られて、主人と同じ所に入れられた。

エドリアナが夫を監禁して間もなく、一人の召使がやつて來て、アンティフォリスとドロウミオウは次の通りを自由に歩いてゐるのを見たから、二人は屹度番人の眼を掠めて逃走したものに違ひないと話した。これを聞くとエドリアナは、夫をまた監禁するために數名の召使をつれて、夫を家に伴れ戻

すために飛んで出た。妹も一緒に隨いて行つた。近所の僧院の門前まで來ると、其處にアンティフォリスとドロウミオウが居ると一同は思つた、と云ふのは双生兒があまり可く似てゐたので又々欺かれたのであつた。

サイアラキューズのアンティフォリスは、兄とよく似てゐる爲めに生づる種々な困難に未だ惱まされてゐた。彼は金細工人が呉れた金の頸飾を首にかけてゐた。金細工人は、彼が頸飾を受けとらないと云ふ事や、また代價を支拂はぬと云ふ事で頻りに彼を責めてゐた。アンティフォリスは細工人が今朝ほど勝手にそれを自分に呉れたのだ、其の時以來逢つた事もないと辯解してゐた。

そこへエドリアナが遣つて來て、夫のことを、番人の目を掠めて逃れた狂人だと言ひ、供をして來た雇人達は、アンティフォリスとドロウミオウに暴力を加へようとしたので、二人は僧院に駈けこんで、尼僧院長にかくまつて呉れと願つた。

そこで尼僧院長は自ら出て來て、此の騒ぎの原因を調べた。尼僧院長は嚴格な人格の高い婦人で、自ら見たことには立派な判斷を下すことが出來、男子でも尼僧院に救けを求める者があれば容易にはこれを見捨てないのであつた。そこでエドリアナが夫の狂氣に就いて物語つた話に就いても、いろ〳〵と嚴しい質問を下して言つた。

『御主人が突然狂氣になられた原因は何ですか。海で財産でも失くしたのですか。または心を搔き亂

すやうな親友の死にでも逢はれたのですか。』

エドリアナはさう云ふ事は少しもないと言つた。

『それでは多分。』と尼僧はつづけて、

『奥さんである貴女より他の婦人に愛を注いでゐられたのかも知れませぬ。其の爲めにこんな狀態になられたのでせう。』

エドリアナは長い間、自分の夫がよく家をあけるのは、他に愛する婦人があるせいであらうと思つてゐたといふ事を話した。然し實は、アンティフォリスがやむを得ず屢々家をあけるのは、他に愛する婦人があるからではなく、妻の嫉妬深い性質にたまり兼ねてであつた（尼僧長はエドリアナの激しい態度から既に此の事を察して）なほ事實を確かめる爲めにわざと訊ねた。

『あなたはそれを御責めになるべきでしたね。』

『責めましたとも。』とエドリアナは答へる。

『さうですか。多分責め方が足りなかつたんですね。』と尼僧長は言つた。エドリアナは、もう此の事に就いては十分アンティフォリスを責め立てたと言ふ事を、尼僧長に悟らせたかつたので、

『私共は話をすれば、もう其の事許り申して居りましたんですよ。寢床に這入つても其の話ばかりで夫を臥かせませんし、御飯の時も其の話ばかりで碌に食べさせませんでした。二人切りの時には、他

の話は何もせず、皆と一緒にゐる時でも時々諷刺を申しました。私は夫が他の婦人を私以上に愛するのは非常な惡德であるといつも話しました。』

尼僧長は嫉妬深いエドリアナにすつかり告白させてしまつてから、言つた。

『それだから貴女の御主人は狂氣になられたのですね。嫉妬深い婦人の毒舌は、狂犬の齒よりももつと激い毒を持つてゐます。御主人は貴女に罵られて碌々眠ることも出來なかつたやうですね。頭が變になるのも無理はありません。それに食事は貴女の叱責で味がつけてあります。靜かな食事でないと消化がよくないのです。その爲めに熱病にかかられたのです。貴女は小言を言つて何の樂しみも與へなかつたと言ひましたね。社交や保養の樂しみを奪はれては、厭な憂鬱と不愉快な絶望との外に何がありません。つまり貴女の嫉妬が御主人を狂人にしてしまつたのです。』

ルウシアナは姉を許して貰ひたいと思つて、姉はいつも穩やかに夫を責めてゐたのだと言ひ、

『御姉様はどうしてこんな非難を默つて御聞きになるのですか。』

しかし彼女は尼僧長にはつきりと其の缺點を示して貰つたので、唯かう言つただけであつた。

『あの方は私にうつかりしやべらせて、私自身を非難させるやうになすつた。』

エドリアナは自分の行爲を恥ぢてゐたけれども、猶ほ夫を引き渡して呉れと主張した。しかし尼僧長は僧院の中に人を入れるのを好まなかつたし、また此の嫉妬深い妻に不幸な男を引き渡したくなか

つたので、男は穏やかな手段で回癒させる事とし、自分は僧院の中に退いて、他の者に命じて二人を閉め出させた。

双生兒の兄弟が互に非常によく似てゐると云ふ事から種々な間違が起つて、事の多かつた此の日、老イージョンの恩赦の日も、もはや日沒に近かつたので、刻々に過ぎて行つた。老人は日沒まで金を支拂ふことが出來なければ死刑に處せられる事になつてゐた。

死刑執行の場所は此の僧院の近所にあつた。恰度尼僧長が僧院内に退いたとき、老人はここに遣つて來た。公爵は若し老人の爲めに金を提供するものがあれば、出て彼を救はてやる爲めに自身で隨いて來たのであつた。

エドリアナは此の憂ひに沈んだ一行を遮つて、公爵に、尼僧長が自分の夫の狂氣になつてゐるものを引き渡して世話さして呉れぬと訴へ、審きを求めた。彼女がかう訴へてゐるところへ、本當の夫と召使のドロウミオウが逃走して來て、公爵に向ひ、妻が狂人といふ言ひがかりで自分を監禁した不平をこぼし、辛つとの思ひで縛めを破り、番人の眼を逃れて來た、何卒御審きを願ふと申し立てた。エドリアナは夫を見ると非常に驚いた。夫は僧院の中にゐると許り思つてゐたからであつた。

イージョンは息子を見ると、これこそ兄と母親を探しに出かけたわが息子に違ひないと定めこんで、此の愛する息子は、要求された賠償金を喜んで支拂つてくれるだらうと思ひ、吻と安心した。そこで

because

アンティフォリスに向ひ、今にも放免されるだらうといふ喜ばしい希望に滿ちて、父親らしい愛情のこもつた言葉をかけた。ところが父親が全く仰天した事には、アンティフォリスは彼を少しも知らぬと言ふのであつた。アンティフォリスはまだ赤ん坊の頃、嵐の中で父親に分れた切り父親を見たことがなかつたので、それも無理からぬことであつた。憐れな老イージョンは、息子はいろ〳〵な心配や苦勞をした爲め父親まで忘れるやうになつたのか、それともみじめな有樣をしてゐる彼を父親だといふのが恥かしい爲めかと思ひ、いろ〳〵自分を解らせるやうに努めてみたが無駄であつた。當惑してゐる最中に、僧院から尼僧長とアンティフォリス、及びドロウミオウが出て來た。眼の前に二人の夫と二人のドロミオウが立つてゐるのを見て、エドリアナは非常に驚いた。

これまで一同を惱ました謎のやうな間違が、玆で初めて明かになつた。公爵は、非常によく似てゐる二人のアンティフォリスと二人のドロウミオウを見て忽ち、一見非常に神祕に思はれる出來事を正しく推察することが出來た。公爵は其の朝イージョンから聞いた身の上話を覺えてゐたからであつた。そして此の二人はイージョンの息子達と、双生兒の奴隷であると言つた。

實に思ひも設けぬ喜びでイージョンの物語は終ることとなつた。朝には死刑の宣告を受けて、嘆きのうちに物語つた身の上話が、夕太陽が沈みきらぬうちに、幸福な結末を得ることになつた。尊い尼僧長は、自分こそイージョンの失き妻であり、二人のアンティフォリスの愛する母親であると名乘り出

た。

これより先きに例の漁夫に、長男のアンティフォリスとドロウミオウを伴れ去られたとき、彼女は僧院に入り、次第に其の賢さと徳とを認められ、遂に此の僧院の尼僧長となつたのであつた。そして不幸な旅人に寄せた好遇によつて、思ひもかけず自分の息子を保護したのであつた。

長い間分れてゐた親と子の間に、喜ばしい祝ひや、愛情のこもつた挨拶がとり交はされた。一同は暫くの間、イージョンが死刑の宣告を受けてゐる事さへ忘れた。稍々落付いた後で、エフィサスのアンティフォリスが父の生命の賠償金を公爵に差し出した。しかし公爵は其の金を取らず、快よく赦してやつた。公爵は尼僧長や、新たに見出された其の夫や子供達と共に僧院に這入り、不運な物語が幸福な結果を得るに至つた家族の樂しい談話をゆつくりと聞いた。また二人のドロウミオウの謙遜な喜びも忘れてはならなかつた。二人は祝ひや挨拶を述べてから、お互に自分自身の姿を（鏡でも見るやうに）互の美しい姿に見て喜び、愉快さうにお世辭を言ひ合つた。

エドリアナは姑に懇々と諭されたのが非常に効果があつて、それ以後は決して夫に對して不當な疑念や、嫉妬心を起さなかつた。

サイアラキューズのアンティフォリスは、兄の妻の妹である美しいルウシアナと結婚した。老イージオンは妻や子供達と共に長くエフィサスに住んだ。どうしても解けなかつたこの困つた出來事も、これ

から先きの間違ひの原因をすつかり除き去る事は出來なかつたので、矢張り時々は、昔の冒險を思ひ出させるやうな滑稽な間違ひがよく起つた。そして一方のアンティフォリスと一方のドロウミオウとが他のアンティフォリスやドロウミオウと間違へられて、愉快な、面白い間違ひの喜劇をつくつた。

以尺報尺

嘗て維也納の町を、非常に優しい溫厚な性質の公爵が治めて居た時があつた。人民は法律を無視しても少しも罰を受けなかつた。とり分け玆に其の存在を殆んど閑却されてゐる法律が一つあつた。公爵は統治中、まだ一度も其の法律を適用した事がなかつたからである。其の法律といふのは、誰でも自分の妻でない女と同棲する男は死刑に處せられるといふのであつた。しかし公爵が寛大なので、此の法律は全く無視され、從つて結婚の神聖なる制度も蔑ろになつたので、維也納で若い娘を持つ親達は、娘が誘惑されて親の手許を離れ、獨身の男と一緒に暮らしてゐると云つて、毎日のやうに公爵の許へ苦情を持ち込んだ。

人の善い公爵は、惡事が人民の中にはびこるのを見て悲しんだ。併しこれまで示して來た寛大さから急に一變して、此の惡評を一掃する爲めに嚴重な手段をとるとすれば、人民達は（公爵をこれまで愛してゐた）彼を暴君と思ふやうになるだらうと考へた。それ故公爵は暫く公國を遁れて、彼の權力の實行を悉く代理の者にまかせ、不名譽な戀人達に此の法律を適用する事に決心した。さうすれば嚴重な手段を取つた爲めに買ふ恨みが、自分の身にかからないで濟む譯であつた。

公爵は此の重大な任務を果す適任者として、嚴格な生活をしてゐて維也納で聖人の評判の高いアンゼロを選んだ。公爵は此の計畫を彼の侍從長であるエスコウラス卿に諮つたとき、エスコウラスは答へた。

『若し此の維也納で、それ程廣大な恩惠と名譽とを享けるに足る人があると致しましたら、それはアンゼロ卿でございます。』

そこで公爵は、留守中の公爵代理をアンゼロに任せて、ボウランドへ旅行するといふ口實のもとに維也納を去つた。併し公爵の留守は實は佯りで、公爵は聖人のやうなアンゼロが如何なる行爲をするかを、人に悟られず見極める爲め、托鉢僧に姿を變へ、私かに維也納に戻つて來たのであつた。

恰度アンゼロが新たに權力を賦與された時分、偶々、クロウディオと呼ぶ一紳士が、ある若い婦人を兩親の許から誘拐した。クロウディオは此の罪の爲めに、新らしい公爵代理の命令により捕へられて獄に投ぜられた。そして長い間閑却されてゐた古い法律に照らして、アンゼロはクロウディオを斬首にする宣告を下した。此の若いクロウディオを赦して貰ふ爲めには、種々な心配がなされた。エスコウラス老卿さへも彼の爲め執成しをした。

『あゝ、私が助けてやりたいと思ひます。此の紳士には立派な父親があります。其の父親の爲めに此の青年の罪を赦して頂きたいのです。』

しかしアンゼロはこれに答へて、

『われ〳〵は法律を案山子にしてはなりません。猛禽を嚇かす爲めに立てた案山子が遂には其の無能を知られ、怖れとなるどころか止り木にされてしまふ案山子にしてはなりません。青年は殺さなければなりませぬ。』と言つた。

クロウディオの友人であるルウシオは、クロウディオを牢獄に訪ねた。するとクロウディオは彼に頼んで言つた。

『ルウシオ、お願ひだ。どうか此の使ひを果して下さい。今日聖クレアの尼寺に這入ることになつてゐる妹のイザベルの所へ行つて、私の身の危險を知らせ、嚴格な公爵代理とよしみを結ぶ爲めアンゼロの所へ單身で行くやうに言つて下さい。それは非常に有望なのです。妹は會話に妙を得て居るので、屹度說き付ける事が出來ます。それに若い女の悲しみには無言の言葉が含まれてゐて、それは男の心を動かします。』

クロウディオの妹のイザベルは、彼が言つたやうに、其の日尼の見習ひとして僧院に這入つたのであつた。彼女は見習ひとしての試みが終つたら、尼になる積りであつた。恰度イザベルが僧院の規則に就いて尼僧に種々と訊き正してゐるところへ、ルウシオの聲が聞えた。彼は僧院に這入つて來て、

『此の御寺が安らかでありますやうに！』と言つた。

『呼んでゐるのは誰でせう。』とイザベルが言つた。

『男の聲ですね。イザベル、あなた出て行つて、御用を聞いて來て下さい。貴女はさうしてもいゝけど、私は不可ない。ヴェールをつけて尼になつて了へば、副尼院長樣の前でなければ男の方と話して不可ない。そして若し話をすれば顏を見せては不可ないし、若し顏を見せればお話する事は出來ません。』

『あなた方尼樣にはもうそれ以上の特權はございませんのですか』とイザベルが訊いた。

『それ丈けで十分ぢやありませんか。』

『えゝ全くですわ。私はもつと余計に欲しい譯で申したのでは御座いません。唯、聖クレアの信徒である尼にとつては、もつと嚴しい御制度があつて欲しいと思ひましたものですから。』

再びルウシオの聲が聞えたので、尼僧は言つた。

『又呼んで居ます。どうか返事をしてやつて下さい。』

イザベルはルウシオの方へ出て行つて、彼の挨拶に答へて言つた。

『御身の上に平和と繁榮とがありますやう！どなた樣でいらつしやいます。』

ルウシオは恭々しく彼女に近づいて言つた。

『やあ、これは御孃さんでいらつしやいますか。頰の色が御紅いので、さうとより見えませぬ。どうか私を尼樣見習ひのイザベルに、不幸なクロウディオの美しい妹、イザベルに逢はせて下さいま

せ。』

『どうして不幸な兄と仰有います。どうか其の譯を御話し下さい。私が妹のイザベルで御座います。』と彼女は言つた。

『美しい御孃さん。貴女の御兄さんが宜しくと仰有いました。御兄さんは今牢屋に御出でです。』

『まあ悲しい！何の爲めにで御座います。』とイザベルが訊ねた。そこでルウシオは、クロウディオが若い娘を誘拐した爲めであることを話した。

『あゝ、それは私の從妹のジュリエットかも知れませんわ。』

ジュリエットとイザベルとは親類ではなかつた。しかし學校時代の友情の思ひ出に、お互に從姉妹だと呼び合つて居た。イザベルは、ジュリエットがクロウディオを愛してゐる事を知つてゐたので、彼に對する愛情の爲めに、かう云ふ罪に陷るやうになつたのだらうと心配した。

『其の女の方ですよ。』とルウシオが答へた。

『それでは何故兄をジュリエットと結婚させて下さらないのでせう。』

そこでルウシオは、クロウディオは喜んで結婚したいのであるが、公爵代理が此の罪の爲めに死刑の宣告をしたのだと話した。

『貴女の美しい祈りで以て、アンゼロの心を和げる事が出來ない限りは駄目です。私があなたと貴

女の可哀さうな兄上との間に立つた用事はこの事です。』

『あゝ、役に立たうと思つても、私には何の力も無いんですもの。アンゼロの心を動かすやうな力は迚も有りますまいよ。』

『われ〳〵の疑念は、われ〳〵を裏切る者です。何か遣らうとして危めば、當然得るかも知れない利益まで失ひます。アンゼロ卿のところへ御出でなさい。乙女に歎願され、跪かれ、泣かれると、男は神樣のやうにものを與へます。』とルウシオは言つた。

『遣れるか何うか試してみませう。私は一寸あとに殘りまして、副院長樣にこの事を申し上げます。それから直ぐにアンゼロの所へまゐりませう。私の兄に宜しく仰有つて下さい。今晩にも成功の御報知を致しませう。』

イザベルは宮殿へと急いだ。彼女はアンゼロの前に跪いて言つた。

『私はお願ひの筋が御座いまして伺ひました悲しみに暮れてゐる女でございます。何卒御聞き遊ばされて下さいませ。』

『うむ、して其の願ひといふのは、』とアンゼロは言つた。そこで彼女は深く人の心を動かすやうな言葉で、兄の爲めに命乞ひをした。がアンゼロは言つた。

『乙女よ、何とも致し方はない。お前の兄は既に宣告を受けてゐるので、死なければならぬのち

や。』

『あゝ、正しくても何と云ふ嚴しい法律でございませう。それでは兄はもう亡きものでございます――御機嫌麗しく！』彼女はかう言つて退出しようとした。すると彼女に隨いて來たルウシオが言つた。

『さう早く匙を投げては不可ません。も一度彼の所へ戻つて、彼の前に跪き、彼の上衣にぶら下つて嘆願しなさい。貴女は余り冷やかです。ピンが一本欲しいからと言つて、今の言葉よりも少しお上手を言はねば、仲々貰ふ事は出來ませんよ。』

そこでイザベルは又彼の前に跪いて、惠みを乞ふた。

『彼は宣告を受けたのだ。もう間に合はぬ。』とアンゼロは言つた。

『間に合ひませんと！いえ、さうでは御座いませぬ。どうか御取り消し下さるやうにと、私はお願ひ致すので御座います。閣下、御偉い方へつきものの儀式も、王樣の冠も、御名代の劍も、元帥の杖も、或は、裁判官の上衣でも、御慈悲が似合ひます其の半分も似つかはしいものでは御座いませぬ。』

『どうかもう行つて呉れ。』とアンゼロは言つた。しかしイザベルは未だ歎願し續けて言つた。

『若し私の兄が貴方樣であり、貴方樣が兄であると致しましたら、貴方樣も兄のやうな間違ひを遊ばすかも知れませぬ。しかし兄は閣下のやうに殘酷では御座いますまい。若し貴方樣がイザベルであり、私に貴方樣のやうな權力がございましたら！其の時も矢張りかうで御座いませうか。いえ、私は裁判官とは如何なるものか、囚人とは如何なるものであるべきかを御知らせ致します。』

『美しい乙女よ、心靜かになさい。貴女の兄上を有罪とするのは、私ではなくて、法律なのです。假令彼が私の親戚であり、兄弟であり、子供であるとしても、矢張り同じことです。彼は明日は死なければなりません』

『明日ですつて！』とイザベルは叫んで、

『それは余り突然でございます。どうか彼を赦してやつて下さいませ。赦して遣つて下さいませ。彼は未だ死ぬ覺悟が出來て居りません。料理に使ふ鳥でさへも、適當な時機に殺します。神樣に差し上げるものを、卑しい私共に供するものより粗末に取り扱つていゝものでせうか。閣下、どうか御考へ下さいませ。兄と同じ罪を犯した人は大勢でございますけれど、其の罪で死んだ者は御座いませぬ。で貴方樣はこの宣告を御下しなされた初めの御方で、兄はそれを受ける最初の者でございませう。閣下御自身の御胸によく御尋ね遊ばせ。胸を御叩きになつて、兄の欠點と同じやうな欠點が心に潜んでは居ないかをよく御訊ねなさいまし。若し兄のそれと同じやうな生れつきの罪があると致しましたら、兄の生命を奪るなどと仰有らないで下さいまし。』

此の最後の言葉は、今までの彼女のどの言葉よりも、アンゼロの心を深く動かした。と云ふのはイ

ザベルの美しさを見て、其の心の中には罪の情熱が燃え、クロウディオが犯したと同じやうな不德な戀の思ひが育くまれ始めたからであつた。彼は心の苦惱の爲めイザベルの許を去らうとしたが、彼女は彼を呼び留めて言つた。

『閣下、御戻り下さいまし。そして一寸御聞き遊ばして下さいまし。私は貴方樣に賄賂を差し上げます。どうか閣下、御戻り遊ばして下さいませ。』

『何、賄賂をすると！』とアンゼロは、彼女が賄賂を爲るなどと言ひ出したのに驚いて言つた。

『左樣でございます。神樣御自身でさへも貴方樣と共に御取り遊ばすやうな賄賂の品なのでございます。それは價を定める人間の考へ次第で高價にもなれば、貧しくもなる黃金の寶でもなければ、きら〳〵光る寶石でも御座いません。朝日が登る前に天にも屆く誠の祈り――一心を神に捧げ盡した精進の乙女の、清い魂から湧き出づる祈りを差し上げやうと思ふので御座います。』

『うむ、明日御出でなさい。』とアンゼロは言つた。暫く兄の生命が猶豫せられたのと、又逢つてやるとの許しを得たイザベルは、最後にはあの嚴格な心をも說き伏せることが出來るかも知れぬといふ喜びの望みに滿ちて辭し去つた。彼女は去り際に、

『神樣、閣下の名譽を安全に御保ち下さいますやうに！閣下の名譽を御救ひ下さいませ！』と言つた。アンゼロはこれを聞いて、心の中で呟いた。

『アーメン。私はお前と、御前の美しさから逃れたい。』そしてアンゼロは自分自身の惡い考へに驚怖して言つた。

『これは何うしたのだ。何うしたと云ふのだ。あの女の話すのをも一度聞き、あの眼を貪り見たいと願ふのは。俺はあの女を戀してゐるのではあるまいか。俺が空想してゐる事は何だ。狡猾な人類の敵は聖者を捕へる爲めに聖者を餌にするのだな。私の心はこれまで愼しみの無い女に搔き亂された事は決して無かつた。ところがあの貞淑な婦人は私を全く征服してしまつた。今までは、男が溺愛するのを見て笑ひ、それを不思議に思つたものだ。』

アンゼロは其の晩、彼が峻嚴な宣告を下した罪人よりももつと罪深い心の惱みを味つた。と云ふのは、クロウディオの這入つてゐる牢屋には、其の晩、托鉢僧に姿を變へた公爵が訪れて來て、青年に悔いと平和の意味を說き、天國へ行く道を敎へて呉れたが、アンゼロの方では、決心しかねる罪の苦惱にいろ〳〵と喘いだのであつた。時にはイザベルを純潔と名譽の道から誘き出さうと考へたり、時には未だ心に思つた丈けの罪惡を、空怖ろしく悔いてみたりした。しかし結局惡心は勝ちを占めた。先きほど迄は、賄賂を送ると云はれて飛び立つやうに驚いた彼が、彼女にいやとは云はせぬ程の、大切な兄の生命を赦してやるといふ高價な贈りものの賄賂で以て、此の處女を誘惑してみようと決心したのであつた。

翌朝イザベルがアンゼロを訪れて來たとき、彼はイザベルに唯獨りで自分の前に出るやうに希望した。そこで彼は、若しイザベルが其の處女の誇を自分に任せて呉れるならば、またジュリエットがクロウディオに對して犯したやうな罪を犯して呉れるならば兄の生命はイザベルに遣らうと言ひ出した。

『それは、私はお前を愛してゐるからだ。』

『私の兄は。』とイザベルは言つた。

『ジュリエトを大變に愛して居ります。それでも閣下は、兄を死刑にすると仰有いました。』

『しかし、若しお前が、クロウディオの所へ行く爲めに夜毎父親の家を脱け出たジュリエットのやうに、夜、密つと私を訪ねてくれる事が承知なら、クロウディオの生命は救けてやる。』

イザベルは此の言葉を聞いて非常に驚いた。アンゼロは彼女の兄には其の爲めに、死刑の宣告を下して置き乍ら、それと同じ罪を彼女に犯させようと誘惑してゐるのである。

『私は自身に對すると同じやうに、可哀さうな兄の爲め出來る丈けの事は致したうございます。假令わが身は死刑の宣告を受けて、鋭い笞の痕はルビイのやうに身に帶びましても、待ち焦れてゐる寐床に行くやうに、喜んで死を受けませう。しかし此の恥辱に身を任せること丈けは厭でございます。』

それから彼女は、アンゼロは自分の德を試す爲めに態とそんな事を言つたのだらうと言つた。しかし彼は答へた。

『私の名譽にかけて信じて下さい。私の言葉は本當です。』

イザベルは、かう云ふ穢らはしい目的を述べるのに、名譽にかけてといふ言葉を使つたのを聞いて非常に怒つた。

『えッ、信用されるだけの名譽もない方ですね。何といふ穢らはしい目的でせう。私はあなたの事を云ひふらしますよ、アンゼロ。待つていらつしやい。さあ、兄を直に放免すると署名して下さい。さうでないと私は、あなたがどんな方で有るかを世間に吹聽します。』

『誰がそんな事を信ずるものか、イザベル。私の穢れのない名前、嚴格な私の生活、お前の言葉が間違つて居るといふ私の證言は、お前の非難を忽ち打ち消してしまふ。私の心に從つて、兄の生命を救けてやれ。でなければ明日は死刑にする。お前はお前で何とでも云へ。私の欺りの言葉は、お前の眞實の話に打ち勝つて見せる。明日迄に返事をしたがいゝぞ。』

『誰に訴へたらいゝのだらう。これを話しても誰も本當にしないだらう。』

イザベルは兄が監禁されてゐる牢獄の方へ行き乍らかう言つた。牢屋に着いてみると、兄は例の公爵と信心深い話をしてゐた。公爵は托鉢僧の姿をしてジュリエットの所も訪ね、此の二人の戀人達に自分達の惡かつた事を悟らせたのであつた。不幸なジュリエットは、涙と、心からの悔いとに暮れら乍らクロウディオの不德な誘惑に喜んで應じたのは自分であるから、自分の方こそ彼よりも非難さるべき

であると告白した。

イザベルはクロウディオが監禁されてゐる室の前に來て、

『ここに平安と御惠みと、よき友がありますやうに！』と言つた。

『どなたですか』と變裝した公爵は受けて、

『御這入りなさい。御好意に對して歡迎いたします。』

『クロウディオに一言二言話したい事が御座いますので、』とイザベルが言つた。そこで公爵は二人を殘して立ち去り、囚人を取締つて居る典獄に賴んで二人の話聲が聞えるやうな所に隱して貰つた。

『さて妹、何かい〻事があるか。』とクロウディオが訊ねた。イザベルは、明日死ぬ覺悟をしなければならぬ事を話した。

『助かる手段はないのか。』

『はい、有るには有りますが。若し兄樣がそれを御承諾なすつたら、名譽も地に墮ちて、まるで裸體にされてしまふやうな手段なので御座います』

『其の要點を話して呉れ。』

『あ〻私は心配です、兄樣！私はもしか兄樣が未だ〳〵生きて居たいと、そして永遠の名譽よりも僅か六七年のつまらぬ齡を延べることを大切に思ひはなさらないかと、心配して震へます。兄樣は思

ひ切つて死ねない？死といふ感じは最も強く響くものです。私共が踏み潰す可哀さうな甲蟲でさへも巨人が死ぬときと同じやうな深い苦痛を感じるものです。』

『どうしてそんな恥辱を與へるのだ。お喋言の若い女から忠告されて決心を得ることが出來ると思ふかね。どうでも死なねばならぬものなら、花嫁に逢ふやうな心持で死にも逢ふよ。そして兩腕で抱いてやるよ。』

『よく仰有いました兄樣。それはお父樣の御墓の中から出た聲です。さうです。あなたは死ななければなりません。ですがクロウディオ、外面だけ聖者顏してゐるあの御名代は、若し私が處女の誇を御名代に捧げたら、兄樣の生命を救けてやるといふのだといふことが御考へられになれまして！あ〻、それが若し私の命をと云ふので御座いましたら兄樣の命を救ける爲めには、ピンを捨てると同じやうに、さつぱりと捨てたでございませうのに！』

『有りがたう、イザベル！』とクロウディオは言つた。

『それでは明日死ぬ覺悟をなさいませ。』

『死は怖ろしい事だ。』

『そして恥辱にみちた生涯もいやなものでございます。』

しかし今、死ぬといふ觀念は、クロウディオの氣質の確乎とした所をなくしてしまつた。罪人が死

に面してのみ知るところの恐怖が彼を襲ふた。クロウディオは叫び出した。

『愛する妹、僕を生かして呉れ。兄の命を助ける爲めにした罪なら、自然もこれを赦してくれるよ、それは美德にさへなる。』

『あゝ誠實のない卑怯者！不正直な破廉恥漢！あなたは妹に恥辱を受けさせても、命が助かりたいのですか。ぺつ汚らはしい。汚らはしい！私は兄樣、兄樣は、二十の首切り臺に御のせになる二十の首がお有りになつても、妹が恥辱の前に屈しないうちに、二十の首をすつかり投げ出して御しまいになるほどの、立派な心を持つていらつしやると許り思つて居ましたわ。』

『いや〳〵、イザベル聞いて呉れ』とクロウディオは、貞淑な妹を憂き目に逢せて迄も生きたいと願つた自分の弱點を辯解しようとしてゐる時、公爵が這入つて來てそれを妨げた。公爵は、

『クロウディオ、私は貴方と妹さんの話をあちらで洩れ聞いたが、アンゼロに妹さんを墮落させるつもりはあるまい。彼の言つた事は、唯妹さんの德を試してみる丈けのことぢやつたらう。妹さんには見上げた貞節心があつたので、やさしく拒絶されたが、それを聞いてアンゼロも却つて喜んだらう。アンゼロが貴方を赦すこともあるまいから、貴方は祈りに時を過して、死ぬ場合の覺悟をしたがいゝ。』と說いた。これを聞いたクロウディオは自分の弱點を後悔して言つた。

『妹に對してあやまらせて頂きます。私は此の世に愛想が盡きましたから、早く此の世を遁れたい

と願ひます』

クロウディオは、己の罪に對する恥辱と悲しみの念に壓倒され、この場を退いてしまつた。

公爵はイザベルと二人限りになつたので、イザベルの立派な決心を賞めて言つた。

『貴女を美人に御造りなされた神の御手は、貴女をまた善人に御造りになつた。』

『あゝ、御人のいゝ公爵樣は、どんなにアンゼロに欺されて御出でになる事でせう。若し公爵樣が御歸りになつて、もの申し上げる折が御座いましたら、私は彼の政事向きをすつかり御洩らしする積りでございます。』とイザベルは答へた。彼女は今、現に公爵に向つて、其の通りを洩してゐるのだとは知らなかつた。公爵はそれに答へて、

『それも別に惡いことではあるまい。併し今の儘にして置けば、アンゼロは貴女の非難を反撥してしまふ。そこで私の忠告をよく聞きなさい。この事は確かに、ある虐待を受けてゐる婦人に利益を與へ、慘酷なる法律から貴女の兄を救ひ、又貴女の清い體に汚點もつけないで濟むことで、もし公爵が歸つてこの事を知らるれば、非常に喜ばれることと思ふ。』

そこでイザベルは、惡い事でさへなければ、彼の望むとほり何でも遣つて見る積りであると答へた。

『美德といふものは大膽で、恐るるところを知らぬものですね。』と公爵は言つてから、海で溺死し

た偉大なる武人フレデリックの妹であるマリアナの事を聞いた事があるかと訊ねた。

『其の御方でしたら聞いた事が御座います。仲々評判の宜しい方でした。』

『此の婦人がアンゼロの妻君なんだ。しかし夫人の嫁資は、溺死した兄が乘つてゐた船に載せてあつたので皆失くなつてしまつた。夫人に取つてこれが實に辛らい事となつたのだ。夫人は、夫人を愛して呉れて、最も深切でさつぱりしてゐた有名な立派な兄を失ふたのさへあるに、嫁資迄が失くなつたため其の夫、外見上は立派な男であるアンゼロに嫌はれるやうになつた。彼は貞淑な夫人の落度を發見したといふ口實で、(眞實の理由は持參金がなくなつた爲めであるが)とう〳〵涙に暮れてゐる夫人を捨てしまひ、涙の眼を乾かしてやらうともしなかつたのだ。不當な虐待を受けては、當然夫に對する愛も消えさうなものに、堰かれた流れが激するやうに、マリアナは最初に變らぬ愛情を以て未だに夫を愛して居るのだ。』

公爵はそれから此の計畫を更に委しく説明してきかせた。イザベルはアンゼロ卿のところへ行つて彼の希望通り眞夜中に彼を訪ねることを承諾した體にし、此の爲めに約束通り兄の生命を赦して貰ひ、指定の所へはイザベルの代りにマリアナに行つて貰ひ、闇に紛れてイザベルの積りで押し通し、アンゼロを欺かうといふ計畫であつた。

『優しい娘さん、これを行ふことを怖れることはありません。アンゼロはマリアナの夫であるから

二人を一緒にしても罪ではないのだから。』と托鉢僧になつてゐる公爵は言つた。イザベルは此の計畫が氣に適つたので、公爵に指圖された通りを行ふ爲めに出て行つた。彼も亦此の計畫をマリアナに告げる爲めに出かけた。公爵はこれより先きにも、托鉢僧の姿でこの不幸な婦人を一度訪れた事があり、宗教上の教訓や深切な慰安を與へて來たが、其の際夫人の口から親しく、其の不幸な身の上話を聞いたのであつた。さて夫人は公爵を僧侶と思ひ込んで、彼の指圖通り行ふことを直に承知した。

イザベルはアンゼロとの會見を終へてから、公爵と出逢ふことに定めてあつたマリアナの家へ歸つて來た。公爵は、

『恰度い〻時逢つた。御名代に何と云はれたかね』と訊ねた。イザベルは、すつかり事を取り定めて來た事を話した。

『アンゼロの邸には煉瓦塀で取り卷かれた庭園が御座います。其の庭園の西寄りに葡萄畑がありまして、門があつて這入れるやうになつて居ます。』イザベルはかう言つて、アンゼロから渡された二つの鍵を公爵とマリアナに示し、

『此の大きい方の鍵は葡萄畑の門を開けるので、小さい方は葡萄畑から庭へ出る小さな木戸の鍵でございます。私は最夜中に彼を訪ねる約束を致し、また兄の生命は確かに救けてやるとの證言を得てまゐりました。私は正しい、注意深い、場所の書きつけを貰ひました。アンゼロは嗜くやうな聲でさ

も罪深い顏をし乍らも根氣よく、二度まで道を敎へて呉れました。』

『マリアナが氣を附けなければならぬと云つたやうな、他に何かお約束はありませんか。』

『別に何も御座いません。唯暗くなつてから行けば宜いのです、私は彼に、ほんの一寸の間しか居られないと申して置きました。兄の事で訪ねるのだからと言ひ含めてある召使を伴れて行くやうに仄めかして置きましたから。』

公爵はイザベルの思慮ある處置を賞めた。彼女はマリアナに向つて言つた。

『アンゼロとの別れ際に、靜かな低い聲で、兄の事をお忘れになりませんやうにつて一寸仰有ればいゝのですよ』

マリアナは其の夜、イザベルに導かれて、指定の場所へ行つた。イザベルは己の想像通り、此の計畫に依つて兄の生命と自分の名譽を保ち得た事を喜んだ。しかし公爵は、彼女の兄の生命の安全に就いては、十分に會得が行かぬところがあつたので、最夜中にまた牢屋を訪づれた。公爵が來たのはクロウディオに取つて誠に好都合であつた。若し公爵が來なかつたならば、彼は其の夜斬首にされてしまふ所であつた。公爵が牢獄を訪れると間もなく、公爵代理から命令が來て、クロウディオを斬首にし、其の首は朝の五時迄に彼の手許に屆けるやうにとの事であつた。しかし公爵は典獄を說いて、クロウディオの死刑執行を延ばし、恰度其の朝死んだ囚人の首を送つて、アンゼロを欺く事にさせた。

公爵は、この申し出に典獄を贊成させる爲め、公爵自らの筆になつた、捺印のある手紙を見せたので、これまで唯の托鉢僧とばかり思つてゐた彼を、不在中の公爵から秘密の命令を受けてゐる者に違ひないと察し、クロウディオの生命を赦すことを承諾したのであつた。典獄は死人の首を斬り、それをアンゼロの所へ届けた。

公爵は本名で以てアンゼロに手紙を書き、ある出來事の爲め旅行を中止する事にした故、明朝は維也納に着く豫定であるから、市の入口迄自分を迎へに出て、其處で政權を引き渡すやうにと命令した。また市民のうちで誰でも不正義に對して救濟を望む者があれば、自分が初めて市に入る道路に、請願書を竝べて置くようにと云ふ布告を出させることを命じた。

翌る朝早く、イザベルは牢獄へやつて來た。彼女の來るのを待つてゐた公爵は、ある秘密の理由から、クロウディオは斬首に行はれたと告げた方がいゝと思つたので、イザベルに御名代から兄の赦免狀が來たらうかと問はれた時、公爵は言つた。

『アンゼロはクロウデイオを此の世から放免してやつたのぢや。もう首を斬つて御名代の所へ届けてある。』

妹は深い悲しみにくれて叫んだ。

『あゝ不仕合せなクロウデイオ、可哀さうなイザベル、つれない此の浮世、大惡人のアンゼロ奴！』

外見だけの托鉢僧はイザベルを慰めて、稍々氣も靜まつた頃、公爵が間もなく歸還される事を話し、どんな風にして公爵の前に進み出で、アンゼロを訴へるかを教へてやつた。又事件は暫くの間は不利に思はれるやうな事があつても、決して心配しないやうにと吩咐けた。公爵はイザベルに十分意を含めて置いて、次にマリアナの所へ行き、彼女が取るべき態度に就いて相談をした。

そこで公爵は托鉢僧の衣を脱ぎ、元の王衣を纒ひ、公爵の歸還を迎へる爲めに集つた忠義な臣下達の喜びの群の中を通つて、維也納の町に入つた。其處にアンゼロが待つてゐて、正式に政權を返還した。此の時イザベルは救濟を願ふ請願者として現はれた。

『御領主の公爵樣、どうか御裁判を願ひ上げまする！私はクロウディオと申す者の妹でございます。兄は若い娘を誘惑したといふ罪で斬罪に處せられる事になりました。私はアンゼロ卿にお願ひをして、兄の命を救けて頂かうと思ひました。私がどんなに卿の前に跪いて祈り、どんなに斥けられ、どんなに御答へを致したかといふ事は、申し上げる必要も御座いませぬ。それはあまり長いお話になるので御座います。そこで唯忌しい結末だけを、悲しみと恥とを以て申し上げます。アンゼロは彼の不德な戀に私の身を任せませぬ限りは、兄の命を赦してやらぬと申します。いろ〳〵と思ひ惱みました末、とう〳〵妹の同情は貞操の念に打ち勝ち私は彼に身を任せてしまつたので御座います。ところが翌朝早くアンゼロは、其の約束を破つて、可哀さうな兄の首を召し取つてしまつたので御座います。』

しかし公爵は、この娘の物語を信ずるやうには見えなかつた。そこでアンゼロは、法律の適用を受けて殺された兄を悲しむ余りに、娘は氣が觸れたのであらうと言つた。そこへ又他の訴人がやつて來た。それはマリアナであつた。

『氣高い公爵樣、光は天よりまゐり、眞實は生命より出でますやうに、智慧は眞實の中にあり、眞實は德の中にありますやうに、私はこの人の妻でございます。公爵樣、イザベルが申し上げた言葉は虛言でございます。彼女がアンゼロと共にゐたと云ふ其の夜は、私は夫と共に四阿に居たので御座います。これは本當の事でございますので、どうか私を立たせて下さいませ。若し詐りでございましたら、大理石像のやうに永遠にこのままで置かせて下さいませ。』

するとイザベルは、自分の言葉の眞實を托鉢僧のロウドウイックがよく知つてゐると云つた。此の名は公爵が變裝してゐる間に用ゐた名前であつた。イザベルもマリアナも共に、イザベルの無實を維也納の全市民の前で公然と證明したかつた公爵の意志通りに、教へられた儘を述べたのであつた。しかしアンゼロは、二人の申し立てが違つてゐるのは、さう云ふ理由からであるとは少しも知らず、二人の予盾した證言の爲め却つて、イザベルの訴へに對して身の證りが立つものと思つた。彼は無實の罪に立腹した態で言つた。

『私は今まで笑つて濟ませてまゐりましたが、殿下、玆に至つては私の忍耐の緒も切れます。私は

考へますに此の精神錯亂の女共は、もつと上手の何者かに敎唆されて、其の手先きになつてゐるものと思ひます。殿下、何卒私に此の計略を御探らせ下さいませ。』

『おゝ宜しいとも』と公爵は許して、

『滿足出來るまで其の者どもを罰するが宜い。エスコウラス卿、御前もアンゼロ卿と共にゐて、此の誹謗の出所を探す手傳ひをして遣りなさい。彼等を敎唆した托鉢僧には使ひが立ててある。彼が遣つて來たら、お前が受けた名譽毀損を出來る丈け、折檻に依つて償ふが宜い。予は暫く此の場を退くが、アンゼロ卿、誹謗を受けてよく〳〵決心が就くまでは、騷いではならぬ。』

かう言つて公爵は行つてしまつたので、後に殘つたアンゼロは、己が代理判事となつてわが事件をばわれと審くことが出來るのを喜んだ。しかし公爵は、王服を脫ぎすて、僧服を着ける暫くの間だけ留守にしたので、變裝を終ると再びアンゼロとエスコウラスの前に現はれた。善良な老人のエスコウラスは、アンゼロが無實の非難を受けてゐるものと思ひ込み、變裝の托鉢僧に向つて、

『やあ、そなたが此の女共を唆かして、アンゼロ卿を誹謗させたのですかい。』と言つた。僧はこれに答へて、

『公爵は何處へ御出でです。私は公爵に是非申し上げたいのです。』

『公爵はわれ〳〵に任せてお出でになる。それでそなたの申し分を聞きませう。本當の事を申し述

べなさい。』とエスコウラスが言つた。

『少くとも大膽に申します。』と僧は返事して、イザベルの事件をば、イザベルが訴へ出た當の相手に委せる公爵の不當を責め、また自分は維也納を通りがかりの一傍觀者であるがと云つて、其の間に目擊した幾多の腐敗墮落の事件を無遠慮に申し立てたので、エスコウラスは、當政府の惡口と公爵の行爲を非難した罰として痛い目に逢はせるぞと脅かし、彼を牢獄に下すやう命じた。此の時並び居る一同の驚いた事には、又アンゼロを狼狽の極に陷し入れた事には、托鉢僧だと許り思つてゐた男が其の變裝を脫ぎすてて、公爵自身となつた事であつた。

公爵は先づイザベルに話しかけた。そして言つた。

『イザベル、ここへ來い。御前の托鉢僧が今はお前の領主になつた。が着物と共に予の心は變りはしない。予は相變らずお前の爲めに盡すぞ。』

『おゝ何うか御赦し下さいませ。御家來である私が、知らぬとは申せ御領主樣を御使ひ立てしたり、御迷惑をお掛けしたり致しまして。』とイザベルは言つた。しかし公爵は、彼女の兄を救けることが出來なかつたので、自分こそ赦して貰はなければならぬと言つた——公爵は彼女の善良さをも少し試してみようと思つて、クロウディオが生きてゐる事は未だ話さずに置いた。アンゼロは、公爵が自分の惡事の祕かなる證人である事を悟つて、言つた。

『あゝ殿下、恐れ入りました。殿下が神聖なる神のやうに私の行爲を御覽あつた事が分りました今、猶ほ包み終せるなどと考へます事は、私の罪を更に深くするもので御座います。何うか公爵樣、此の上私の恥辱を御引き伸し下さいませんやう、私の此の告白を以て審問に御かへ下さいませ。直ぐ樣死刑の宣告を御下し下さいますれば、有難い御情けでございます。』

そこで公爵は、

『アンゼロ、御前の罪は明瞭になつた。それ故クロウディオが死刑を受けたと同じ斷頭臺へ上ることをばお前に宣告する。皆の者、速やかに彼を伴れ去れ、マリアナ、彼の財產に就いてはこれを沒收し、同時にお前に與へて、良き夫を得させる事にする。』

『おゝ殿下。私は他に善き夫は要りませぬ。』とマリアナは言つて、恰度イザベルがクロウディオの生命乞ひをした時と同じやうに、恩知らずの夫の深切な妻であるマリアナが跪いて、アンゼロの生命乞ひをした。

『やさしいわが君、おゝ善良なる公爵樣よ！愛らしいイザベル、どうか私の味方をして下さい。そして私に膝をかして下さい。さうすればこれから先きの私の一生涯を貴女にお貸して、私は貴女の御役に立つことを一生涯致します。』

『イザベルにさう願ふのは實に無理だ。若しイザベルが跪いて赦しを願ふやうな事があれば、兄の

幽靈は墓を破つて現はれ、嫌忌のうちに彼女を此處から伴れ去るだらう。』と公爵は言つた。しかしマリアナは未だ言ひ續けた。

『イザベル、美しいイザベル、何うか私の傍に跪いて、何も云はずに唯手を擧げて下さい。私がお願ひはします。どんな立派な人でも過失の中から造られると云ふ事です。そして大低の人は少々惡い爲めに、却つてよくなると申します。私の夫も屹度さうで御座いませう。おゝイザベル、膝を借して下さいませんか。』

『彼はクロウディオの爲めに死ななければならぬ』と公爵はまた言つた。しかし善良な公爵は、優しくて立派な行ひをすると期待してゐたイザベルが、それに違はず彼の前に跪いて、かう願つたとき非常に喜んだ。

『御惠み深き殿下、何卒、兄は未だ生きてゐる積りで、罪の宣告を受けた此の方を御覽下さいまし。私は又半は、此の方は、私を御覽になります迄は、眞面目な行ひをなすつたものと考へます。そんな譯でございますから、死刑丈けは赦して御上げ下さいませ。私の兄は死ななければならぬやうな事を致しましたので、あゝなるのが正當で御座います。』

公爵は、自分の敵の爲めにさへ命乞ひをする此の氣高い請願者に、出來る丈け善い答へを與へたいと思つたので、自分の運命はどうなる事かと牢獄で心配してゐたクロウディオに使者をやつてこれを

呼び、嘆きに沈む生きた兄をば、イザベルに贈つた。そして公爵は彼女に向つて言つた。

『婚約をして下さい、イザベル。お前が立派な爲めに、クロウディオは赦して上げる。どうか私のものになると御言ひなさい。そうすれば彼も私の兄弟だ。』

此の時アンゼロ卿も、自分の生命は安全であると知つた。公爵は、アンゼロの眼が少し輝いて來たのを見て、言つた。

『さてアンゼロ、お前は妻を愛するやうに氣を注けなさい。彼女の德の御蔭で、御前は赦されたのだ。マリアナ、御目出たう。アンゼロ、妻を愛してやりなさい。私は彼女の懺悔を聞いて、マリアナの貞淑を知つたのだ。』

アンゼロはほんの暫くの間政權を帶びてゐた時、自分の心がどんなに頑くなであつたかを思ひ出し、慈悲が如何に有り難いものであるかといふ事を悟つた。

公爵はクロウディオに命じて、ジュリエットと結婚させた。そして自らは再びイザベルの承諾を求めた。イザベルの立派な氣高い行爲は、公爵の心を深く動かしたのであつた。イザベルは未だ尼になつて居なかつたので、結婚することは自由であつた。それに、尊い身分の公爵が卑しい一托鉢僧に身を寳してゐた時分、彼女の爲めに盡して呉れた深切な行ひは、この有難い名譽ある申し込みを彼女に喜んで承諾させた。彼女が維也納の公爵夫人になつてからは、貞淑なイザベルの立派な摸範は、此の町

の若い娘共を全く一變させる程の影響を與へたので、それ以來、過ちを改めたクロウディオの後悔した妻、ジュリエットの犯したやうな罪を犯すものは一人もゐないやうになつた。慈悲深い公爵は愛する妻のイザベルと共に、最も幸福なる夫として、又公爵として、長く市を治めた。

十二夜

メツサリンに住んでゐた若紳士のシバスチヤンと若い令嬢のヴァイオウラは雙生兒であつて、（非常に不思議な事とされてゐたが）生れた時から大層よく似て居り、着物が違つてゐなければ全くどちらとも見分けが付かなかつた。二人は同じ時に生れ、また同じ時に死ぬやうな危險な目にあつた。二人が一緒に航海してゐる時、イリリアの沖で船が難破したからであつた。彼等が乘つてゐた船は、大嵐の爲め岩に乘り上げ、船客、船員のうちで助かつたものは極めて僅かであつた。船長は助かつた少數の船員達と共に小さなボウトで陸に上つた。ヴァイオウラも伴はれて無事に上陸する事が出來たが、可哀さうにも此の令嬢は自分の助かつた事を喜ばずに、兄の死んだ事を嘆いた。そこで船長は彼女を慰めて、船が難破したとき、兄のシバスチヅンは丈夫なマストに其の體を結び付けてゐるのを確かに見たし、また遠くに來て殆んどものが見えなくなる迄、彼の姿を未だ波の上に見ることが出來たと言つた。ヴァイオウラは此の話を聞いて一縷の光明を認め、非常に慰められた。そして故郷を遠く離れた異國で、わが身の振り方を何うしたものかと思ひわづらひ、船長に何かイリリアの事に就いて知つてゐる事はないかと訊ねてみた。

『えゝ、よく知つて居ますよ。私は此處から三時間許りで行ける所で生れたのですから。』と船長は答へた。

『どなたが御領主でいらつしやいます。』とヴァイオウラはまた訊ねた。船長は、高貴の方にふさはしい氣高い氣質のオウシノといふ公爵が此のイリリアの領主であると言つてきかせた。ヴァイオウラもオウシノの事なら父から話を聞いて知つてゐるが、其の當時は未だ獨身でゐられたと思ふと言つた。

『今もさうです。極く最近まではさうでした。一ケ月前私は此處を立つたのですが、其の時種々と噂がありまして、（御存じのやうに、高貴の方のなさる事はよく人の口の端に上るものですが）オウシノ公はオリヴィア姫と云ふ美しい立派な方の愛を求めていらつしやるといふ事でした。姫は、一年ほど前に亡くなられた伯爵の令嬢で、父君の死後兄君に托されてゐたのですが、兄君も亦間もなく死なれたので、嘆きの餘り殿方との交際は愚か、顏を見ることさへ堅く止めてゐられるとの事でした。』

兄を失うて悲嘆にくれてゐるヴァイオウラはこれを聞いて、それほど迄に兄の死を悼んでゐるやさしい心の持主と一緒に住んでみたいと思つた。そこで船長に、自分はその令嬢の召使になつて見たいが紹介しては呉れまいかと賴んだ。船長は、それはとても難しい事であらう。令嬢は兄君の死後、如何なるものも邸に入れないし、公爵さへも拒絶してゐるといふ事だからと答へた。そこでヴァイオウラは又一策を案じ、男裝をしてオウシノ公爵の小姓にならうと考へた。若い令嬢が男裝をして少年のつもりで押し通すことは、奇妙な考であるが、ヴァイオウラのやうに見知らぬ他國で唯一人、若い美しい

身空の頼りなく、心細い狀態にあつては、それも宥されなければならぬ。

ヴァイオウラは船長の深切なことも見、又自分のことに就いても種々心配して呉れたので、この計畫を船長に打ちあけた。船長は早速力を借すことを約束した。そこで彼に金を與へて適當な着物を整へてくれるやうに頼み、着物は兄のシバスチャンがいつも着てゐたやうな色合ひで、同じ型のものを注文した。ヴァイオウラが此の男の着物を着けたところは、其の兄そつくりだつたので、お互に間違へられて奇妙な失策が起つたのも無理のない事であつた。と云ふのは後になつて分ることであるが、シバスチャンも亦助かつて居た。

ヴァイオウラの深切な友人の船長は、美しい令嬢を紳士に仕立てると、宮中に傳手があるのを幸、セサリオといふ假名を使つて、オウシノ公の許へ伴れて行つた。公爵は此の美少年の利口なことや、優雅な擧動が非常に氣に入り、ヴァイオラウが望み通りの小姓として取り立てる事になつた。ヴァイオウラは新らしい小姓といふ役目をば忠實に果し、主人の公爵に對してもまめ〳〵しく、よく世話を見たので、間もなく公爵の最も寵愛する侍臣となつた。オウシノ公はオリヴィア姫に對する自分の戀の一伍一什まで、セサリオに打ち開けた。公爵は、長い間の好意も拒絶し、人柄まで輕蔑し、面會さへも許して呉れぬ令嬢に長い間求婚して不成功に終つたことを話した。そして此のつれ無くした令嬢の事を思ふては、あの氣高いオウシノ公が、今まで好んでゐたあらゆる男らしい遊戯や、遊獵を廢し、靜か

な音樂や歌曲、或は熱烈な戀唄の女々しい音樂に聞きとれて、卑しい無爲のうちに時を過したり、またこれまで交際して來た賢い學問のある貴族との交りを捨て、終日セサリオを相手にして話し暮らしたりするやうになつた。眞面目な朝臣達は誰しも此のセサリオを、かつては氣高い主君、オウシノ大公爵の相手として適當と考へるものはなかつた。

若い娘が、若くて美しい公爵の心の友となることは危險なことであつた。悲しいことにはヴァイオウラも亦直にその事を悟つた、といふのは、公爵がオリヴィア姫を憶ふての惱みは、そつくりその儘彼女が公爵を憶ふての苦痛であることを知つたからであつた。彼女はオリヴィア姫が、類ひ稀なわが主君に對してこれ程までに無頓着でゐられるのが不思議に思へてならなかつた。公爵を見ては誰しも深い賞讃を感ぜずには居られないと考へてゐたヴァイオラウは、オウシノ公に向つて穩やかに、公爵の立派な性質に盲目である婦人を愛されるとは實に氣の毒であると仄めかした。そしてまた言つた。

『御前樣がオリヴィア姫を御思ひ遊ばすやうに、或る女が御前樣を御慕ひするとしたら(屹度そんな女があると思ひます)そして御前樣が其の愛に酬ひることが出來ぬと致しましたならば、愛することは出來ぬと仰有つて、女は其の御答で滿足しなければならぬものでせうか。』

しかしオウシノは、如何なる婦人も自分が愛するほど愛し得るものはないからと云つて、此の理窟を承認しなかつた。女の心はそれほど深い愛を抱擁することは出來ないもの故、自分に對する如何な

る女の愛も、オリヴィアを憶ふわが思ひに較べては物の數でないとも言つた。ヴァイオウラは公爵の意見には絶對に服從してゐたけれども、これ許りは本當とは思はれなかつた。オウシノ公の心の中にあるのと同じ愛が、彼女の心の中にもあると思つたからであつた。

『あゝ、しかし私は存じて居ります、御前様』とヴァイオウラは言つた。

『何を知つてゐるのだ、セサリオ』

『あまり知り過ぎてゐる位でございます。どんな愛を女は男から受けるかといふ事を。しかし女もわれ〳〵男子と同じやうに眞實なもので御座います。私の父に一人娘が御座いまして、恰度私が女でございましたら御前様を御慕ひ申し上げましたかも知れないやうに、ある男を戀しました。』

『それで其の話はどうなつたのかね。』とオウシノは訊いた。

『全く白紙のやうなもので御座います、御前様。』とヴァイオウラは答へて、

『娘は決して其の戀を打ち開けませんでした。ひとり胸に藏めてゐましたので、その事が恰度蕾を破る虫のやうに、娘の赤い頰を食べて行きました。娘は唯物思ひに惱み、色蒼ざめて、痛々しいほど憂鬱になり、それでも悲しみに堪えて微笑し乍ら、記念碑の上に立つてゐる忍耐の像のやうに座つてゐました。』

公爵は、其の娘が焦れ死にはしなかつたかと訊ねたが、ヴァイオウラはこれに對して、曖昧な返事を

した。多分彼女はオウシノを密かに愛し、沈默の悲しみに堪えられず、それを話す爲め作り話をしたからであつたらう。

二人が話してゐるうちに、オリヴィアの許へ遣はした公爵がの使者歸つて來た、其の紳士は公爵に向ひ、

『御前様に申し上げます。私は御姫様に御目にかかる事は許されませんでしたが、御腰元より御返事を頂きました。それに依りますと御姫様は以後七年間は、天にも自分の顏を見せまい、歩く時には尼僧のやうにヴェールを被り、愛する亡き兄君の憶ひ出の爲めに涙をもて部屋を清めるとの御話でございました。』

これを聞いて公爵は、

『死んだ兄に對して愛の負目を拂ふとは何といふ優しい心の女だらう。若し姫の心にキュピドの黄金の箭が立つたら、どんなに愛して呉れる事だらう。』と言つた。そしてヴァイオウラに向つて、

『ね、セサリオ、私はお前に私の胸の秘密をすつかり打ち開けた。だからオリヴィア姫の家へ行つて呉れ、賴む。いや應言はせず這入り込んで、部屋の戸口の前に立ち、御目にかかる迄は足に根が生えて動けませぬと言へ。』

『若し御話しすることが出來ましたら、何と申しませう。』

『私のこの戀の深い思ひを傳へて呉れ。姫に對する私の愛が決して變らぬことを細々と話して呉れ。私の惱みの代理をして呉れるにお前は持つて來いだ。難しい顏したものよりお前の方がずつと姫の氣に入りさうだから。』

そこでヴァイオウラは出かけた。しかし自分が結婚したいと思ふ人の妻になつて呉れと、令孃を說きに行く此の求婚をあまり嬉しいものとは思はなかつた。しかし一旦引き受けた以上、ヴッイオウラは忠實に此の役目を果した。間もなくオリヴィアは戸口に立つて面會を强要してゐる若者のあることを聞いた。召使はかう言つた。

『御姫樣は御病氣だと申しますと、其の事は存じて居る。それ故御話しにまゐつたのだと申しました。それで御姫樣はお休みなすつていらつしやるからと申しますと、それも前以て存じてゐるやうで、それ故御話し申し上げねばならぬと申します。何と申しましたら宜しいでせう。若者はどんな拒絕に遂つても怯ます、御姫樣が御承知でも否でも御話し申し上げようと決心してゐるやうで御座います。』

オリヴィアは、此の斷乎とした使者は一體誰だらうと好奇心に駈られ、通してもいゝと言つた。そして顏にヴェールをかけ乍ら、此の使者は公爵に賴まれて來たに違ひないことを知つても、一度だけオウシノ公の使ひの言葉を聞かうと言つた。ヴァイオウラは出來るだけ男らしい風を裝ひ、部屋の中に這入ると、高貴の小姓らしい美事な言葉をまねてヴェールの令孃に話しかけた。

『いとも麗しく輝きたまふ類ひなき美しき姫君、あなた樣は御當家の姫君でお出で遊ばしますか、何卒御告げ下さいませ。私は他の御方に無駄に申し上げたく御座いませぬ。且つ私の臺詞は非常に美事に書かれたもので御座いまして、それを覺えまするには大層骨を折りました。』

『あなたは何處から御出でになりました?』とオリヴィアが訊ねた。

『私は覺えこんだ事以外には御話しが出來ませぬ。其の御質問は私の役目以外のことで御座います。』

『あなたは喜劇役者ですか。』

『左樣では御座いませぬ、しかし只今演じてゐる役目はあてはまつたものではものでも御座いませぬ。』と暗に、自分は女であつて男を裝ふてゐる事を仄めかした。そして再びオリヴィアに當家の令孃であるかどうかと尋ねた。オリヴィアがさうである旨を答へると、ヴアイオラは急いで主人の傳言を傳へることよりも、戀敵の顏を見たくてたまらず、かう言つた。

『御孃樣、あなたの御顏を御見せ下さいませ。』

オリヴィアは此の大膽な賴みに應じることを、さほど厭がらなかつた。長い間の公爵の戀を無下に斥けて來た高慢なオリヴィアが、假裝の小姓の卑しいセサリオを一目見て、戀に陷つたのであつた。

ヴァイオウラに顏を見せて呉れと言はれて、オリヴィアは言つた。

『私の顏と談判せよつて御主人から吩咐かつてゐらしたの。』

そして以後七年間はヴェールを脱らないといふ決心も忘れて、ヴェールをとりのけ乍ら、

『それでは幕をあげて繪を御目にかけませう。旨く出來て居ますでせう。』

『實に旨く調和のとれた美しさです。あなた様の頰の上の紅さと白さとは、自然の神様御自身の巧妙な手によつてなされたものです。若し御姫様が此の世に御美しい姿の寫しを一つも御殘しにならないで、空しく墓へ御埋めになるのでしたら、御姫様は實に殘酷な御方でございます。』

『いえ、あなた、私はさう殘酷では御座いません。私の美の目録を世の中に殘して置きませう、例へは一、かなり赤い唇二つ、一、眼蓋附きの鼠色の眼二つ。頸一つ、顏一つといふ風にね。あなたは私を讃めるために入らしたのですか。』

でヴァイオウラは答へた。

『私はあなた様の御人柄がわかりました。御姫様は實に誇が強くていらつしやいますが、また御美しい方です。私の主人はあなた様を戀してゐます。このやうな戀は、假令御姫様が美の女王の冠を被つてゐられるにしても償ひ切れぬ程のもので御座います。オウシノ公はあなた様を涙と崇拜とを以て、雷のやうな唸きを以て、火のやうな溜息を以て愛してゐられます。』

『公爵は私の心をよく御存知の筈です。私は何うしてもあの方を愛することは出來ません。それはあの方の御德の高いことも、御立派で高貴の御身分である事も、御元氣な缺點のない青年でいらつしゃ

る事も知つてゐます。誰も皆あの方を、學問があつて、丁寧で、勇氣のある方だと申してゐます。しかし私は愛することは出來ません。もうとくに此の返事は御存知の筈で御座いましたでせうに。』

『私がもし主人のやうに貴女様を戀してゐましたら、私は柳の小屋を御門前に結びまして貴女さまの御名を呼びます。私はオリヴィア姫に寄する嘆きの小唄を書いて、眞夜中に其の唄を歌ひます。あなた様の御名前は山と山の間に鳴り響くでせう。そして私は空氣の喋言者、山彦にオリヴィアの名前を喚めかせます。おゝ貴女様は私を憐れと御思召さぬ限り天地の間で御休みになる折も御座いますまい。』

『澤山なさつても宜しいわ。一體あなたはどんな素性の方なの。』とオリヴィアは尋ねた。

『今の身分よりも上です。しかし今の位置も結構です。紳士ですから。』

オリヴィアは名殘惜し氣にヴァイオウラを送り出して言つた。

『歸つて御主人に、私はお愛しする事は出來ませぬと仰有つて下さいな。それからもうお使を御寄こしにならぬやうに、但し此の返事をどんなに御受け取りになつたかを報告に、あなたがいらつしやる分は別よ。』

ヴァイオウラは此の令嬢のことを殘酷な美しき人と呼んで別れを告げた。オリヴィアはヴァアイオウラが行つてしまふと、今の身分以上のものです、しかし今の位置も結構です。紳士ですからと云ふ言葉

を繰り返した。それから彼女は聲に出して言つた。

『全くさうだわ。言葉と云ひ、顏立といひ、手足、動作、氣立といひ明らかに紳士だわ。』

彼女はセサリオが公爵であつて呉れればいゝと思つた。そして彼が自分の愛を堅く捕へてしまつた事に氣が付いて、わが身の氣紛れな戀を責めた。しかし人々が自分の過失に下す輕い非難はさう根深いものでない。身分の高いオリヴィア姫も、直にわが身の位置と小姓の位置との相違を打ち忘れ、また令嬢の性格の最も大切な飾りとも云ふべき處女らしい遠慮さへも打ち忘れて、若いセサリオの愛を求めようと決心した。オリヴィアは早速召使に、オウシノからの贈物を小姓が忘れて行つたからといふ口實で、ダイアモンドの指環をセサリオの許へ持たせてやつた。彼女はかうしてセサリオに態と指環を送ることによつて、自分の思ひを傳へたいと思つた。實際、このことはヴァイオウラに疑念を起させた。別にオウシノ公の指環を持つて行つた覺えもなし、いろ〳〵と考へて見て、オリヴィアが自分を讃めるやうな樣子や顏付きをした事を思ひ出し、これは主人の戀人が自分を見て戀に陷つたのだと悟つた。

『あゝ』と彼女は嘆息して、

『可哀さうに、御嬢樣は夢を戀した方がまだましだわ。私が假裝してゐるのが惡いのだわ。私がオウシノ樣にするのと同じやうに、オリヴィア姫は私に對して、空しい溜息をなさらなければならぬの

だわ。』

ヴァイオウラはオウシノ宮殿へ歸つて、談判が不成功に終つた事を告げ、またオリヴィア姫が再び自分を煩はして呉れるなとの傳言を繰返した。しかし公爵は、優しいセサリオに說かせたら何時かは姫も同情を示すやうにならうと堅く信じてゐたので、翌日も亦姫のところへ行くやうにと命じた。それまでの間退屈な時を潰すために、公爵は氣に入りの歌を歌ふやうに命じて、言つた。

『ね、セサリオ、昨晩あの歌を聞いた時には、私の思ひも大分紛れるやうに思つた。セサリオ、よく氣を注けて御覽、あれは古い平凡な歌なんだ。糸紡ぎの女達が日向ぼつこしたり、若い娘が骨の針で糸を編んだりする時歌ふ唄だ。愚劣な唄だけど私は好きだ。古い時代の無邪氣な戀がよく出てゐるからね。』

歌

死よ、來よ、われに來よ
悲しき死衣をもてわれを包め
命よ、消えよ、消え果てよ
美しい乙女に殺さるこの身

いちゐ挿したる白帷子ぞ身の願ひ
誰か逢ふべきこの憂き死に目

花を撒くなよ、美し花を
くろき柩の覆ひの上
わが憐れなる屍に、骨を埋むる其のきわも
もの言ふ人をあらしめな。
盡きせぬ吐息省くため、わが身の墓は
まことなる悲し戀人の知らぬところにこそ

ヴァイオウラは、報はれない戀の苦惱を率直にのべた此の昔の歌の言葉を見遁しはしなかつた。彼女の顏には此の歌の表はす感じがあり〳〵と浮んだ。オウシノ公は彼女の顏色に氣がついて言つた。

『屹度なんだね、セサリオ、お前は未だ若いけれど、戀が何であるかといふ事を多少知つてゐるね。さうだらう。』

『恐れ入ります。少しばかり。』とヴァイオウラは答へた。

『どんな風の女で、齡は幾つだ。』

『御前樣位の齡頃で、御前樣のやうな顏色をして居ります。』

公爵は、美しい若い小姓が、自分より年上の女を、しかも男のやうに淺黑い顏の女を愛してゐると聞いて微笑せずには居られなかつた。しかしヴァイオウラは暗にオウシノの事を指して言つたので、公爵に似てゐる女の事ではなかつた。

ヴァイオウラが二度目にオリヴィア姫を訪ねた時には、面會を求めるのに何の面倒も要らなかつた。召使達は、美しい若い使者と話すことを令孃達が喜ぶ時を直ぐ悟るものである。ヴァイオウラが到着すると門は直に開かれ、恭々しくオリヴィア姫の部屋へ通された。ヴァイオウラがも一度主人の爲めに辯じに來たことを告げると、オリヴィア姫は、

『あの方のことは仰有らないやうにお願ひして置きましたわ。ですがそれとは違つた求婚の事でしたら、天の音樂を聞くよりも喜んで貴方の御願ひを御聞きしますよ。』

これは可なりあから樣な言葉であつた。それにオリヴィアは更に露骨な說明を加へて、とう〳〵自分の戀を打ち開けた。そしてヴァイオウラの顏に不快と困惑の色が浮ぶのを見ると言つた。

『まあ御怒りになつて？あなたの輕蔑と怒りにみちた唇がどんなに美しく見える事でせう　セサリオ、春の薔薇の花と、處女の操と、眞實とをかけて私はあなたを愛します。あなたの誇は知つてゐて

も、私には此の情熱を隠す丈けの智慧も理性もないのです。』

しかし姫はいくら掻き口説いても駄目であつた。ヴァイオウラは急いで姫の許を辭し、もう決してオウシノ公の愛を說きには來ないからと言つた。オリヴィア姫にいろ〳〵と優しく說かれても其の返事は只決してどんな女も愛しないからといふ決心を宣告しただけであつた。

ヴァイオウラは姫の家を出ると間もなく、其の勇氣を試されるやうな事件に出逢つた。オリヴィアに求婚してはねつけられた一紳士が、姫は公爵の使者を寵愛してゐるといふ事を知り、ヴァイオウラに決鬪を申し込んだのであつた。表面こそは男らしい樣子をしてゐたけれど、其の實心持は全く女で、自分の劍を見てさへ恐れるやうな可哀さうなヴァイオウラに何が出來よう。

ヴァイオウラは怖ろしい相手が劍を拔いて迫つて來るのを見ると、いつそ女であることを白狀しようかと思つた。が此の瞬間、恐しさも白狀の恥辱も免かれることが出來た。といふのは通りかかりの見知らぬ男が二人の仲裁に這入つて、恰もヴァイオウラの長い間の知己で、親友でもあるかのやうに、其の敵手に言つた。

『若しこの若い紳士が何か不都合なことを致したのでしたら、其の罪は私が引き受けます。しかし若し貴方に不都合な事があれば、此の紳士のため私が貴方と立ち會ひます。』

ヴァイオウラは保護を受けてまだ感謝もせぬうちに、又深切な仲裁の理由も聞かぬうちに、また新た

な敵が、此の新らしい友に對して現はれた。今度は彼の勇氣も何の役にも立たなかつた、と云ふのは數名の警官がやつて來て、數年前の彼の犯罪のため、公爵の名に依つて彼を捕縛した。彼はヴァイオウラに向つて、

『これもあなたを探しに出たからの事だ。』と言つて、財布を返して呉れと賴み、

『必要に迫つて已を得ず、財布を返して下さいとお願ひするのです、私は自分の身に振りかかつた災難よりも、あなたの爲めに盡力する事の出來ぬのがもつと殘念です。吃驚なさつた樣ですが、心配しないで下さい。』と言つた。此の言葉はヴァイオウラを仰天させた。そこでヴァイオウラは、自分は見知らぬ人であること、又財布を預つた覺えはないと抗議した。しかし只今、深切にして貰つたお禮として、自分の持つてゐる殆んど全部の僅か許りの金を出した。すると見知らぬ男は酷いことを言つて、ヴァイオウラの事を忘恩だとか不深切だとか罵つた。

『ここに居る若者は、私が辛つとのことで死の顎から救つてやつた者で、この者の爲め許りにイリリアに遣つて來て、こんな災難に出逢つたのです』

しかし警官達は囚人の愚痴は餘り氣にも留めず、

『そんな事はこつちの知つた事ぢやない。』と急き立てて伴れて行つた。其の男は引かれて行く時、ヴァイオウラの事をシバスチャンと呼んで、聲が聞える間は、友達を裏切つたシバスチャンを非難した。

ヴァイオウラはわが身をシバスチャンと呼ばれて、悉しい説明を訊く餘裕もなかつたけれど、此の一見不思議に思はれる出來事は自分を兄と間違へた事から起つたのかも知れないと推察した。そしてあの男が命を救けてやつたと言つたのは、兄の事ではあるまいかと一縷の希望を抱き始めた。それは實際其の通りであつた。見知らぬ男の名前はアントウニオと云つて船長であつた。彼はシバスチャンが嵐にあつて體をマストに縛りつけたまま、疲勞の爲め息も絶え〳〵になつて波間に漂つてゐたのを見て、船に助け上げたのであつた。アントウニオはシバスチャンに對して深い友情を持つてゐたので、彼が行く所へは何處へでも隨いて行く覺悟であつた。シバスチャンが物好きにもオウシノ公の宮殿を訪ねたいと言ひ出した時にも、アントウニオはかつて或る海戰で、オウシノ公の甥に酷い負傷をさせた事があつたので、若し自分が居るといふ事が分れば命が危いといふ事は知つてゐたが、シバスチャンと別れて居るよりもと思つてイリリアに來たのであつた。この事の爲めに彼は今捕縛されたのである。

アントウニオとシバスチャンが打ちつれて上陸したのは、ヴァイオウラに逢ふ少し前のことであつた。アントウニオはシバスチャンに、何か買ひたいものがあつたら自由に使ふが宜いと言つて自分の財布を渡し、アントウニオが町を見物する間宿屋に待つてゐるからと告げた。しかしシバスチャンは約束の時間が來ても仲々歸つて來ないので、アントウニオは大膽にも自分で探しに出かけたが、恰度出逢つたヴァイオウラが兄と同じ服裝で、非常によく似た顏をしてゐたので、自分の助けた若者を保護するつ

もりで（と彼は思つた）劍さへ拔いたのであつた。そこでシバスチャンが（と彼は思ひこんだ）自分を裏切つて、財布を戻すのを拒んだのを見ると、彼を恩知らずと罵つたのに無理もなかつた。

ヴァイオウラはアントウニオが行つてしまふと、又決鬪に誘はれるのを恐れ大急ぎで家へ逃げ歸つた。彼女がまださう遠くも行くまいと思はれる時分、例の戀敵は、またヴァイオウラが戻つて來たものと思つた。それは恰度この場を通りかかつた兄のシバスチャンなのであつた。その男は、

『やあ先生また逢ひましたね。これを呉れて遣る』と言つてシバスチャンをぴしやりと毆つた。シバスチャンも元より憶病者でないので、利子をつけて撲り返し、劍を拔いた。

この時家から出て來たオリヴィアがこれを見て、二人の決鬪を止めた。姫も亦シバスチャンをセサリオと思ひ違へ、無禮な攻擊を受けた事を慰めて、家に來ないかと誘つた。シバスチャンは此の令孃の叮重なことに、見も知らぬ敵に出逢つたのと同じやうに驚いたが、喜んで其の案内を受けた。オリヴィアはセサリオが（と許り思つてゐた）前と違つて自分の心盡しに敏感になつた事を喜んだ。顏には全く變りはなかつたが、彼女が戀を打ち明けた時をこつた怒の色も輕蔑も少しも其の顏に現はれてゐなかつた。

シバスチャンは令孃が惜し氣もなく浴せかける愛情を少しも拒まず、また氣も惡くしないやうであつた、が一體何うしてこんな事になつたのか、オリヴィアは正氣であるのかと怪しんだ。しかし立派

な邸宅の女主人であり、自分の用事を吩咐けたり、家を立派に支配したりしてゐるのを見れば、自分に對する急激な戀を除いた外は、十分に理性も具つてゐるやうなので、シバスチャンも此の求婚を喜んで承諾した。オリヴィアはセサリオの上機嫌なのを見て氣が變つてはと懸念し、邸に牧師が居るのを幸、直ぐに結婚して呉れないかと申し出た。シバスチャンも此の申出に贊成した。結婚の式が濟むと、シバスチャンは自分が出逢つた幸運をアントウニオに知らせる爲め令孃のもとを去つた。暫くするとオウシノがオリヴィアを訪問に來た。恰度オリヴィアの家の前まで來ると、警官達が囚人アントウニオを公爵の面前へ引き立てて來た。ヴァィオウラは主人のオウシノ公の供をしてゐたので、それを見たアントウニオは、未だシバスチャンだと許り思ひ込んで、公爵に、此の若者が海で死にかかつてゐたのを救つた有樣や、其の後シバスチャンに種々深切を盡してやつた事など詳しく話し、最後に、此の三ケ月間は夜晝となく此の恩知らずの若者と一緒にくらして來たのだと云つて愚痴をこぼした。しかし此の時オリヴィア姫が家から出て來たので公爵はもはやアントウニオの話などには耳も藉さずに、言つた。

『やあ伯爵の姫君が御出でになつた。天女が天降つたのだ！おい、お前の言ふことはまるで氣狂だ。この若者は三ケ月間私に仕へてゐたのぢや。』

そしてアントウニオを伴れて行くやうに命じた。しかしオウシノの所謂天上の姫は、アントウニオが其の恩知らずを責めたと同じやうに、公爵にセサリオを責めさせるやうにしてしまつた。オリヴィアの言ふ言葉は皆セサリオに對する深切の言葉ばかりであつた。公爵は己の小姓がオリヴィアの深い寵愛を受けてゐる事を知ると、怖ろしい復讐をしてやると脅かした。公爵は其處を辭する時ヴァイオウラに隨いて來いと云ひ、

『少年一緒に來い。お前にいゝ惡戯をしてやる。』と言つた。

公爵は嫉妬のあまり怒に駈られて、ヴァイオラを即座に死刑に處する積りらしかつたが、ヴァィオウラは愛の前にはもはや卑怯者でなく、主人に安心を與へる爲めならば、喜んで死に就かうと言つた。とは云へオリヴィアはそんな事で夫を失ひたくなかつた、そして呼んだ。

『私のセサリオ、何處へいらつしやるのです。』

『生命より愛してゐる人の許へ。』とヴァィオウラは答へた。そこでオリヴィアは大聲を擧げてセサリオは自分の夫であると言つて、二人の出かけるのを引き留め、牧師を呼びにやつた。牧師は、オリヴィア姫と此の若者を婚禮させてから未だ二時間も經たないと宣言した。姫と牧師の證言で公爵は初めて己の小姓が、生命よりも貴いと思ふ寶を奪ひ取つた事を知つた。しかし過ぎ去つた事は取り返しが付かないので、公爵は不實な戀人に永久の別れを告げ、女の夫であるヴァィオウラの事をば『若い僞善者』と呼んで、二度と自分の眼の前に現はれてはならぬと警告した。此の瞬間に（一同にとつてさう

思はれた）一つの奇蹟が起つた。も一人セサリオがやつて來て、オリヴィアを妻と呼んで話しかけた。同じ顏をし、同じ聲をし、同じ服裝をしてゐる二人を見て、一同の驚きが稍々沈まつた時、兄と妹とは互に質問を始めた。ヴァイオウラにとつては兄が生きてゐるとは容易に信ぜられなかつたし、シバスチャンにとつては、溺死したと許り思つてゐた妹が男裝をして生きてゐるとは、思ひ設けなかつたからである。ヴァイオウラは直に自分が本當の妹のヴァイオウラであつて、變裝してゐることを白狀した。

此の双子の兄妹が非常によく似てゐる事から起つた間違ひがすつかり分つたとき、一同はオリヴィア姫が女を戀したといふ面白い間違を笑つた。オリヴィア姫は妹とではなく其の兄と結婚したといふ事が分つても、少しも厭だとは思はなかつた。

オリヴィアの此の結婚の爲め、オウシノ公の希望は永久に破れた、それと共に彼の甲斐なき戀も一時に消え失せたやうに思はれた。彼の考は寵愛してゐる若いセサリオが、美しい令孃に變つたといふ出來事に專ら注がれた。公は今更ヴァイオウラをしみ〴〵と眺めて、セサリオがいつもどんなに美しかつたかといふ事を思ひ出し、これに婦人の服裝をさせたらどんなに美しいことであらうと考へた。それに彼女はまたよく、自分を愛してゐると言ひ言ひしたものであつたが、其の時は唯忠實な小姓の義務の言葉だとのみ思ひ過してゐた。今は單にそれ丈けの意味ではなかつた事が分つた。彼にとつては謎のやうに思はれた多くの美しい言葉も思ひ起された。公爵はかう云ふ事を思ひ浮べると、ヴァイオウラ

を直にも自分の妻にしたいと思つた。そして彼女に向つて言つた（公爵は彼女のことをついセサリオとか少年とか呼ぶのであつた）

『少年、お前はいつも私を愛するほど他の女を愛することは決してないと言つてゐたね。愛撫されて育つた身分であり乍らよく私に仕へて呉れ、また今まで主人と呼んで呉れたので、これからはお前を主人の戀人にし、本當のオウシノ公爵夫人にしてやるよ』

オリヴィアは自分がこれまですげなく拒絶してゐた公爵の心が、ヴァイオウラに讓られたのを見て、二人を家の中に誘ひ今朝ほど彼女とシバスチャンを結婚させて呉れた牧師の助力をかりて、午後にはオウシノとヴァイオウラの同じ式を擧げるやうに勸めた。かくして双子の兄妹は同じ日に結婚をすることとなつた。嵐と難船は二人を離れ離れに分つたが、それは二人に立派な幸運をもたらすよすがとなつた。ヴァイオウラはイリリアの公爵オウシノ夫人となり、シバスチャンは高貴で富裕な伯爵の令孃オリヴィア姫の夫となつた。

アシンズのタイモン

王侯にふさはしい富を享有して居るアシンズの大公タイモンは、とどまるところを知らぬまでに施しをする氣分を愛して居た。公の殆んど無限だと云つてもいゝ富はそんなに速く流れ入りはしなかつたが、彼はそれをあらゆる種類の人、あらゆる階級の人の上にどん〳〵注ぎ出した。貧しい人々が公の恩惠に浴した計りでなく、身分の高い貴族達も、公の食客となり從者となる事を不名譽としなかつた。公の食卓には贅澤な御馳走を食べる人達が皆集まつて來、公の家はアシンズに於けるあらゆる往來の人に開放されて居た。公の大きな富は、その物惜みをしない贅澤な性質と相まつて、あらゆる人々に彼を愛させるやうにした。樣々の性質をもつた人々卽ち滑らかな顏をして、その顏に鏡に映ずるやうに、この愛護者のその時々の氣分を映じ出す阿諛者から、人間の外貌を輕蔑し、世間的な物事に無頓着なふりをするが、それでもタイモン公の仁慈な態度と、恩惠に富める心とに抵抗する事が出來ないで、公の堂々たる饗宴に列するために（その性質にそむいて）やつて來、そして、もしタイモンから禮又は挨拶を受けるやうな事があれば、非常な名譽だと考へて歸つて來る粗野で頑固な皮肉屋に至るまで、タイモン公のために盡したいと申し出た。

若し詩人が、世間に推薦の序文を要する作品を得たならば、彼はそれをタイモン公に捧げさへすれ

ばよかつた。さうすれば愛護者からすぐに使へる金を送られ、又日々その家に出入して饗應に預る事が出來る上に、詩はきつと賣れるのであつた。もし畫家が賣りたい繪をもつて居たら、彼はたゞそれをタイモン公のところへもつて行き、その價値に關して、公の鑑定を仰ぐふりさへすればよかつた。この寛大な心をもつた大公にそれを買はせるやうにするには、それ以上の事をする必要はなかつた。若し寶石商が高價な寶石をもち、又は呉服商が立派な呉服物をもつて居り、それが高價であるが故に賣れないで持て餘して居るならば、タイモン公の家は、ちやんと準備の出來た市場で、常に開かれて居て、そこで彼等はその反物や寶石をどんなに高くでも賣る事が出來、その上に善良な大公は、かやうな高價な品物を先に買はせて、彼等が公に對して尊敬を表したかのやうに、彼等に向つて禮さへ云ふのであつた。それでかやうな事のために、彼の家は不快な外觀計りの華奢をます以外に何の用にもたゝぬ餘計な買品をもつて滿され、公自らは用もない訪問者や、虛言を吐く詩人や、畫家や、ぺてんをやる商人や貴族や貴婦人や、貧しい廷臣や、何かを豫期して居る人やに取り圍まれて、不自由を感じた。かうした訪問者は絶えずその控室に滿ち、小聲のいやな追從を公の耳に注ぎ、神に供物をするかのやうに彼に諂諛をさゝげ、公がそれを踏んで馬に乘る鐙さへも神聖なものとし、自由に吸へる空氣も、公の許しと惠とによつて吸ふ事が出來るかのやうに見えた。

かうした日々の寄食者の中には、身分のある青年もあつたが、彼等は（その資力が彼等の贅澤に伴

はないために）債權者のために牢獄に投ぜられたのをタイモン公のために救ひ出されたのであつた。それ以來これらの若い放蕩者は大公にかぢりついて離れなかつたが、それは恰も、互に同情しあふ當然の結果として、かうした道樂者や懶惰者が公を慕つて居るかのやうであつた。彼等は富と云ふ點で公を眞似る事は出來ないので、放蕩と、自分のものでないものを、どん〳〵使ふと云ふ點で公の眞似をする方が容易であると知つたのであつた。かうしたやくざ者の一人にヴィンティディアスといふのが居たが、その不正な契約による負債に對して、タイモンは、少し前に、五タレントの金を拂つた許りであつた。

然しこの會衆、この大洪水のやうな訪問者の中にあつて、進物をしたり、贈物をしたりする人々程人の眼につくものはなかつた。かうした人々の持つて居る犬とか、馬とか、何か安つぽい道具とかゞ、タイモンの氣に入れば、それは彼等にとつての幸であつた。かく氣に入られたものは、それが何であつても、タイモン公の受納を乞ふ贈呈者の御世辭と、品物が詰らないものであるとの申譯とともに、翌朝きつと送り届けらるゝのであつた。そしてこの犬とか馬とか、又は何品であつても、それを贈りさへすれば、贈物と云ふ點では決して人にまけないタイモン公の贈り物の中から、多分二十頭の犬とか馬とかといふ遙かに價値ある賜物を得ない事はなかつたが、この事はこれら虛僞の寄贈者がよく承知して居て、また彼等の虛僞の進物は、手取り早く莫大な利子を得る爲めに金錢を投資するやうなもの

であつた。此のような方法で、ルーシアス卿は近頃銀の馬具をつけた四頭の純白の馬をタイモン卿に贈つたが、この狡猾な貴族は或時タイモンがその馬を褒めるのを聞いて居たのであつた。又他の貴族ルーキュラスは同じ虛僞の方法で一對の灰色の獵犬を惜しげもなく彼に贈呈したが、其はタイモンがその恰好と速く走る事とを褒めたと聞いたからであつた。呑氣な大公は贈與者に不正直な計略のある事なぞは少しも疑はないで、かうした贈物を受けた。勿論贈與者は彼等の不實な欲得づくの贈與品の價格の二十倍もする金剛石又は何か他の寶石といふ樣な高價な返禮をうけた。

或時は、かうした人間共はもつと直接な方法をとり、野卑な見えすいた策略、それすら氣のよいタイモンには見えなかつたが、さうした策略を用ゐて仕事を始め、何かタイモンがもつて居るものとか、彼が買つて居る品物とか、又は最近の買物とかを賞讃するふりをした。すると、人を信じ易い惚れつぽい性質の大公は、きつとその賞められた品物を、一寸した卑劣な見えすいたおへつらひと云ふ安い代價以外に、それを貰ふ丈けの働もない者に、贈物として遣つた。こんな風にしてタイモンはごく近頃、例の卑劣な貴族の一人に彼が常に乘つて居た紅鹿毛の駿馬を與へたが、それは貴族がその馬を美しくて、よく走ると言つたからであつた。そしてタイモンは、人は自分の欲しくない物を、決して複めるものではないと云ふ事を知つて居た。タイモン公は己の愛情をもつて友人の愛情をはかり、又物を施す事が非常に好きであつたから、かうした名のみの友人達に國でも與へたであらうし、又決して

さうする事に倦る事もなかつたからで有つた。

タイモンの富がみな、かうした俗悪な人間にのみ與へられたのではない。公は立派な賞讃に價する行爲をする事も出來た。公に仕へて居る男がかつて金持のアシンズ人の娘を戀したが、富と身分と云ふ點で娘がはるかに彼の上にあつたといふ理由で、彼女を得る見込がなかつた時、タイモン公は、彼の財産を娘の父が、彼女の夫となるべき人に要求して居る持參金に相當するものとするために、アシンズの貨幣で三タレントを、氣前よく與へたのであつた。然し大部分は、悪黨や寄食者が公の富を自由にした。かうした不實な友達を、公はさうとは知らず、彼の周圍に群れ集るのを見て、彼等がきつと自分を愛して居る爲めだと思つた。彼等が嬉しさうな樣子をし、又彼に向つて御世辭をならべるために、公は屹度自分の行は賢い人々や善良な人々によつても賞讃されるものと考へて居た。またかうしたおべつか使ひや外面丈の友人達に取り圍まれて食事をして居る時に、彼等が公のものを食ひ盡しまた公の健康と光榮とを祝するために、最も高價な酒をどん〳〵呑んで、彼の富を乾かしつゝある際も、公は友と阿諛者との差異を認める事が出來ず、公の（眼前の光景に得々として）迷つて居る眼には、お互の富を自由に使ひあつて（費用のすべてを支拂ふのは公自らの富からであるのに）兄弟のやうにかく多くの人々が集まるといふ事は大なる慰安であり、又彼等はかやうな眞實の饗宴、かやうな兄弟の如き會合に出席して、彼等も喜びにあふれて居るやうに見えたのであつた。

然し公がかやうにして心からの深切を盡し、恰も黄金の神ブルータスも彼の執事にすぎぬかのやうに、彼の惠を注ぎ出して、別に心配もせず考へもせず、費用の事には全く無頓着であつたので、如何にしてそれの費用を支持して行くかといふ事を調べても見ず、又その道樂三昧を止めようともしないで、かやうな行を續けて行く間に、公の富は無限ものではないので、止まるところを知らぬ放蕩の前には溶け去らざるを得なかつた。しかし誰がその事を彼に告げよう？追從者どもか？彼等は眼を閉ぢて居る方が利益であるのだ。正直な公の執事のフレイヴィアスが、公にその財政狀態を調べて貰ふために、勘定書を公の前に置き、他の場合であつたら從者としては不作法と思はれるほどに、うるさく懇願し、嘆願し、又涙を流して哀願もして公の狀態を知らせようと試みたけれども無駄であつた。タイモンはなほ彼に猶豫させて、何か他の事に話を轉ずるのであつた。金持が貧乏となつた時ほど、忠告に耳をかさないものはなく、又その境遇を信ずる事を嫌がるものはなく、その眞の狀態を信ぜぬものはなく、又逆運と云ふ事に信を置かないものはない。この善良で正直な人間である執事は、大きなタイモンの家のあらゆる室が、主人の費用で盛に飲み食ひする人間で滿され、床は飲みこぼれの酒でしめり、どの部屋も燈火で輝き、音樂や饗宴の聲で鳴り響いて居るのをきく時に、彼は屢々唯一人で靜かな場所に退き、主人の狂人じみた博愛を思ひ、あらゆる種類の人々に主人を賞讃させるところの財産が盡きて了つたならば、どんなに速かに、賞讃の聲がその賞讃して居る人の口から消え去るだらうと

考へて、彼の流した涙は家の内で浪費の樽より注がれる酒よりも繁く落ちた。御馳走で得た賞讃は、それを控へれば失はれて了ふであらう。冬の時雨模様の雲が一つ現はれたら、これらの蠅共は姿をかくして了ふであらう。

然しタイモンが、此の忠實な執事の申立に、もはや耳をふさいで居る事の出來ぬ時が遂にやつて來た。金が必要であつた。公はフレイヴィアスに、その目的のため領地を幾らか賣るやうに命じた時に、フレイヴィアスは、公に耳を傾けさせやうと、以前幾度も努力したが徒らにをはつた事、即ち彼の領地は殆んど賣られ、又は抵當となつて居ることや、現在彼の所有となつて居る全部の領地も、彼の負債の半分を支拂ふのにも十分でないといふことを告げた。此の申立をきいて、公は驚きにうたれ急いで答へた。

『私の領地はアシンズからラシディマンに廣がつて居る。』

『あゝわが君、』とフレイヴィアスが言つた。『此の世界と云つても一つの世界で、限りがあるもので御座います。それがみな閣下の物で御座いましても、息つく間もなく人に與へれば、どんなに速くなくなる事でせう！』

タイモンは、自分は決して惡い施しをした覺えはなく、もし不聰明にその富を費して了つたとしても、それは自分の惡德を滿すために使つたのではなくして、友人を愛するがためであつたと考へて

自ら慰め、又深切な執事（彼は泣いて居た）に、あんなに立派な友人が澤山あるのだから、主人は資力に缺乏する事はないと信じて安心せよと云つた。そして此の氣拔のした大公は、かう窮迫した際には、皆の（これ迄彼の恩惠に浴した事のある人々の）富を、自分のもの同樣に自由に使ふため、使者をやつて金を借りるより外に仕方がないと決心した。それから公は、恰もこれからやらうとする事に自信があるかのやうに、ルーシアス卿、ルーキュラス卿、セムプロウニアス卿等、これ迄彼が無暗と贈物を與へた人達のところへ各々使者を遣した。そして彼が近頃その借金を拂つて、獄舍から救ひ出してやり、今は父が死んだために十分の富を所有するやうになり、かつタイモンの恩顧に十分酬ゆる事の出來るヴェンティディアスのところへも使をやつた。そしてヴェンティディアスには彼のために拂つてやつた五タレントを返して呉れるやうにとたのみ、又貴族達の各々には五十タレントを貸して貰ひたいと賴んだ。彼等の感謝の念は、公の缺乏を滿すために、（若し必要であれば）五十タレントの五百倍の金額でも出して呉れると信じて少しも疑はなかつた。

ルーキュラスが一番初めに賴まれた。この卑劣な貴族はその前夜、銀の鉢と銀のコップを夢に見た。そしてタイモンの使が來たと聽いた時、彼の下劣な心から、きつと夢が本當になつたので、タイモンが大層な贈物をしたのであらうと思つた。しかし事の眞相を知り、タイモンが金を欲して居るといふ事が分ると。その薄情冷淡な友情の本質があらはれた。彼はその使者に向つて、自分はタイモンの富

の滅亡をずつと以前から見越して居たので、その事を告げるために幾度も幾度も正餐に列し、又消費を少くするやうに說きつけるために、晩餐にも出席したが、タイモンは自分がわざ〳〵行つてした忠告や警戒を取りあげなかつたと云ふ事を幾度も斷言して誓つた。公の恩惠を深く蒙つてゐたので、タイモンの饗宴へも（彼が言つたやうに）不斷の參列者であつた事は本當であるが、彼が云つたやうな目的で來たといふ事や、タイモンに向つて、忠告をし又は警戒をしたといふ事は卑劣な赤嘘で、その證據には、さう云つた言葉が終ると彼は使者に賄賂を使つて、家に歸つて主人の前に出たら、ルーキュラスは不在であつたと云つて呉れと賴んだ。

ルーシアス卿に遣はされた使者も同じ樣に首尾よく行かなかつた。タイモンの饗應を飽く程食ひ、タイモンの高價な贈與物をもつてあふる〻許りに富んで居り乍ら、此の嘘言吐きの貴族は、風向が變り、あんなに豐かな恩惠の泉が急に止まつたときいた時、最初は殆んど信ずる事が出來なかつた。然し、それが確實だと分つて來ると、タイモン公のために盡す事が出來ないのを非常に悲しむやうなふりをした。と云ふのは、不幸にして（それは下劣な嘘言であるが）彼は前日莫大な買物をした、そのために目下のところ全く資力が缺乏して居るが、このやうな事をして、あんな深切な友人に盡す事が出來ないとは、自分は人間といふよりも、畜生に近いものだと自ら云つた。それから彼は、あのやうに立派な紳士を滿足させてあげる能力がないと云ふ事を自分の最大苦痛の一つとして居ると云つた。

同じ皿のものを共に食つた者は誰でも友人であるとどうして云へよう。追從者は皆この類である。誰も記憶して居る事であつたが、タイモンはこのルーシアスに對しては父親であつた。タイモンは自分の金で彼の借金を拂つてやつた。彼の召使の給金を拂ふためにも、ルーシアスの誇が必要とした堂々たる邸宅の建築に働いた勞働者の賃金を拂ふのにもタイモンの金が出て行つたのであつた。しかもあゝ一人間が忘恩者となる時に人は我と我身を怪物とする。このルーシアスが今タイモンに金を貸す事を拒絕した。その金額とても、タイモンが彼に惠んだ金額に比ぶれば、情のある人間が乞食に出してやるのにも足りない程のものであつたのだ。

セムプロウニアスや、その他タイモンが援助を求めたところの慾に目のない貴族達は一人殘らず、曖昧な答をするか、或は直接にそれを拒絕した。ヴェンティディアスさへも、タイモンに助けて貰ひ、今は富裕な身となつて居るヴェンティディアスさへも、以前彼が困つて居る時、タイモンが貸したのではなく氣前よく呉れてやつた五タレントの金さへ貸す事を拒絕して、タイモンを助けないのであつた。今やタイモンは彼が富裕であつた時に追從をされ、寄り集られたと同じ程度に、貧窮しては人から避けられた。今迄、彼を寛大であるとか、仁慈であるとか宏量であるとか云つて賞めそやし、賞讃の際に聲を最も大きくした其人が、外ならぬその寛大を愚であると批難し、その仁慈を亂費だと批難して恥ぢなかつた。してその愚と云ふ言葉が最もよくあてはまるのは、その寛大の對照物として、かう云ふ事を

云ふようなやくざ者共を選んだといふ事であつた。今はタイモンの堂々たる邸宅を訪れる人はなく、人の避け厭み嫌ふ場處となつた。以前の樣にあらゆる通行人が立ち寄つて、彼の酒を味ひ乾杯する場處ではなくして、其前を人々が通りすぎて行く場處となつた。今は御馳走を食べたり、騒々しくしたりする客が群がつて來る代りに、短氣な喧しい債權者や、高利貸や、强請者なぞが押寄せて證文の事や利子の事や抵當の事なぞ論じて、猛烈な、耐えられぬやうな要求をするところとなつた。彼等は謝絶も延期も許さぬ鐵のやうな心をもつた人間共であつたので、タイモンの家は今や獄屋とかはり、彼等が居るので、公はそこを通ることも出來なければ、又出入する事も出來なかつた。或者はその受取るべき五十タレントを要求し、又或者は五千クラウンの證文を差出したが、もし公がその金額を公の血の一滴々々で勘定して支拂ふとしても、彼の體にはそれに間に合ふだけの血がなかつたであらう。

公の財政の、この絶望的な回復の見込のない狀態（さう見えたのであるが）にある際、あらゆる人々の眼は、この沈み行く太陽が放つた新しい信じ難い光輝を見て驚いた。タイモン公はもう一度饗宴を公表し、その宴に以前からの客人や、貴族や、貴婦人や、アシンズに於ける身分の高い人、著名な人を全部招待した。ルーシアス卿やルーキュラス卿も來た。ヴェンティディアスやセムプロウニヤス、その他の者も來た。此等の媚び諂ふ輩が、タイモン公の貧乏はすべて作り事であつて、彼等の愛を試すためにした事であると（彼等はさう考へたのである）知つて、あの時その計畫を見透す事が出來ないで、

公の願をきいて信任を得て置かなかつた事を考へて、彼等程殘念に思つたものが何處にあらう。しかも、彼等はかれ盡したと思つて居た恩惠の泉が、なほ勢よく流れて居るのを見出していかなる人にもまして喜んだ。彼等は、大公が使を遣はされた當時、不幸にして持ち合せて居た金がなかつたので、尊敬すべき友の願をきく事が出來なかつたといふ事を、伴つたり、辯明したり、深く恥ぢ悲しんで居ると云つたりしてやつて來た。タイモン公は彼等に、そんな些細な事を念頭に置かないやうにと乞ひ、自分もその事は全然忘れて了つて居るのだからと云つた。そしてこれらの下劣な追從者の貴族達は、タイモンが逆境に居る時は金を貸す事を拒絶して置き乍らもなほ、彼の復活した繁榮の新しい光輝のもとへ、現はれる事を拒絶する事は出來なかつた。と云ふのは、燕がいくら夏に從ふと云ても、かうした性質の人間が、偉大な人の大なる富に從ふほど喜んでは從はず、又いくら冬を去るといつても、かうした人間が、その反對が表はれるや否や、しりごみをする程に、嫌つては去らないものである。この人々はさうした夏の鳥である。だが今は音樂と儀式をもつて、湯氣の立つ皿が皆の前に並べられた。そして客が破産したタイモンが、何處からこんな高價な饗應を出す資を得たのか知らと驚き、又或者は自分の眼を疑ふやうに、彼等の見て居る光景は夢ではないかとあやしんで居る程もなく、合圖がされて、皿の覆ひが取り去られ、そうしてタイモンの趣向があらはれた。彼等が期待して居た、以前のタイモンの贅澤な食卓に並べられた澤山の御馳走や、又遠くから求めた珍味の代りに、

これらの皿の覆ひの下からあらはれたのは、むしろタイモンの貧乏にふさはしい御馳走で、少し計りの湯氣と微溫湯以外には何もなく、その言葉は湯氣の如く、その心はタイモンが驚いて居る客を歡迎するために出した水のやうになまぬるくて變り易い彼等には丁度似合の御馳走であつた。公は彼等に向つて云つた。

『覆をとれ犬共、そしてなめろ！』そして彼等がまだその驚きを恢復し得ない前に、十分食はせるために、それを彼等の顏に撒きかけた。そして今貴族も貴婦人も、慌てゝ帽子をつかんで、大混雜を演じ、押し合ひへし合ひ走つて行く後から、公は皿や其の他のものをも投げつけ乍ら彼等を追うて出て、その本性通りの名で呼びたてた——

『なめらかな、にこ〳〵した寄食者、禮儀の假面を被つた破壞者、愛想のよい狼、やさしい熊、金に目のない馬鹿者、飲み食ひのみの友、靑蠅、』

彼等は公を避けるために群り出て、いそ〳〵と入つて來た時より更に喜んで此家を去つた。手袋や上衣を失つたものもあれば、急いだために寶石を失つたものもあつたが、皆はかやうな狂人のやうな貴族の面前を逃れ、人を馬鹿にする饗宴の嘲笑から逃れた事を喜んだ。

これがタイモンのした最後の饗宴であつた。この饗宴で彼はアシンズ及び人間社會に別れを告げた。と云ふのはその後彼は森に行つて、嫌な市や人類を見棄て、あの憎むべき市の城壁が沈み、そし

て家が倒れて持主が死ねばよいと願ひ、人類を惱ますあらゆる災難、卽ち戰爭や暴行や貧窮や疫病やが市民に起るやうにと望み、正義の神が老若貴賤の分ちなくあらゆるアシンズ人を滅し給はん事を祈つた。さう祈つて彼は森に行つた。そこではどんな不深切な獸でも人間よりはよほど深切であらうと公は云つた。人間のならはしを殘したくないために彼は着物をぬいで裸となり、住家をつくるために穴を堀り、そして獸のやうな淋しい生活をして、木の根草の根を食とし、水を飲み、人類をさけて、人間よりはもつと無害でもつと親しみやすいものであるとして、むしろ野獸の群に入る事を選んだ。

大なる富をもつたタイモン公、人類と交るを喜んだタイモン公から、裸のタイモン、厭人家のタイモンへの變化は、何と云ふ不可思議な變化であらう！彼の追從者はどこに居るか！彼の奉仕者や召使は何處に居るか。あの騷がしい召使である物凄い風が、彼の從者となつて溫く彼にシャツを着せて呉れるであらうか。鷲よりもながく生き延びて居る頑强な木が、彼が命ずる時に走り使ひをする若い身輕な小姓と變つて呉れるであらうか。冬が來て氷が張つて居る時、冷たい小川が、昨夜の食傷に病んで居る時の彼に溫い汁や飲湯を供給して呉れるであらうか。かうした人里離れた森に住んで居る野獸共がやつて來て、彼の手を舐め彼の機嫌をとるであらうか。

或日の事、公は、彼の貧しい食料である木の根を堀り探して居ると、彼の鋤が何か重いものに當つた。よく見るとそれは黃金で、大きな堆積となつて居たが、多分それは何か事變のあつた時に、誰か

吝嗇家が埋めて置き、再び來て堀り出す考であつたのだが、その機會の來ぬ先に、此處に埋めた事を誰にも知らせずに、死んだものであらう。そこで黄金はそのまゝ利益も與へず、害も與へず、その母である地の中に、タイモンの鋤の偶然の一撃がそれをあかるみに出す迄は、そこからまだ一度も出た事はないかのやうに埋つて居たのである。

もしタイモンが昔日の心を殘して居たならば、再び友人や追從者を買ふに足るだけの財寶の山がこゝにあるのであつた。然しタイモンは虚僞の世界には胸を惡くして居り、黄金を見るのも眼の毒であつた。で彼はそれを再び地に埋めようかと思つたが、しかし、金のために人類の上に起る無限の災難の事、それを得ようとする事がもとゝなつて、人間の間に窃盗、迫害、不正、賄賂、暴行、殺人の起る次第を考へ、彼が偶然に堀りあてゝ發見したこの黄金の堆積から、人類を毒するやうな惨事が何か起るかも知れぬと想像して大變よろこんで居た。(彼が人間に對して抱いて居る憎惡はかく根深いものであつた)すると恰度その時、數人の兵隊が森の彼の穴居に近いあたりを通つたが、それはアシンズの大將アルシバアイディズの軍勢の一部分であることが解つた。大將はアシンズの元老院議員等に對して抱いた嫌惡のために、(アシンズ人は感謝の念のない、忘恩の人民として有名で、その將軍や最も役に立つ友人達にも嫌惡の念を起させるやうな事をしたものであつた。)かつてはアシンズを守備するために率いたのと同じ優勢な軍を率いて、今はアシンズを攻撃するために進軍して居るのであつた。

タイモンは、彼等の仕事には大賛成であつたので、兵士達に拂つてやるやうにと云つて、大將に黄金を與へ、別に何をして貰ひたいと思ふ事もないが、只一つ彼の征服軍をもつて、アシンズを破壞し盡し、住民を殘らず燒き殺し、切り殺して貰ひたいと云つた。白い髭をして居るからと云つて老人を見のがしにしてはいけない。と云ふ譯は(公が云つた)彼等は高利貸であるから。無邪氣に笑つて居るの見たからとて、幼い子供を赦してはいけない。と云ふ譯はこれらの子供が(公が云つた)若し生長すれば、裏切者となるのであるから。あはれみを起しさうなどんな事を見ても聞いても頓着せずに、其の眼や耳に刄を貫き、また處女や、幼兒や、母親等が叫ぶのをきいても、それにさまたげられないで市全部に大殺戮を行ひ、彼の征服によつて彼等を全部滅亡させて了ふ樣にと云つた。そして彼が征服し終つた時、征服者である彼もまた滅亡して了ふやうにと祈つた。かくまで徹底的にタイモンはアシンズを憎み、アシンズ人を憎み、又全人類を憎んだのであつた。

人間と云ふよりはむしろ獸に近い生活をして、此の淋しい森に住んで居たが、或日、彼はその穴居の入口に仰天したやうな樣子をして立つて居る人間の姿を見て驚いた。それは正直な執事のフレイヴィアスであつた。主人に對する愛情と、主人を大切に思ふ心とが、彼をして主人の哀れな住家を尋ね出さしめ、その奉仕を申し出でさせたのであつた。かつては立派な貴族であつた彼の主人のタイモンが、生れたまゝの裸體で、獸のやうな樣子をして、獸に交つて生活し、彼自らの悲しい廢趾であ

り、衰亡の紀念碑であるかの樣に見える、この落ぶれ果てた狀態に居るのを見て、この正直な執事は大層感動したので、口をきく事も出來ずに戰慄し、茫然として立つて居た。それから云やつと口をきいたが、其の聲も涙で曇つたので、タイモンは彼を思ひ出すのに骨が折れた。卽ちかうした逆境にある彼に仕へやうと云つて來た者が（彼が人間社會で經驗した事とはは全く反對に）誰であるかを知るのに當惑した。タイモンは、彼が人間の姿かたちをしてゐるので、裏切者であらうと疑ひ、その涙も虛僞のものであらうと疑つた。しかし此の正直な召使は、多くの證據によつて、己の忠義が眞實である事を確證し、又昔の主人に對する愛と熱誠とから此處へたづねて來たといふ事を明かにしたので、タイモンは世の中に正直な人間が一人は居ると云ふ事をいやでも認めなければならなかつた。しかし人間の姿かたちをして居るために、嫌忌なしに彼の顏を見る事が出來ず、また不快の感なしに彼の口から出る言葉をきく事も出來なかつた。それで此の稀に見る正直な人間は、彼が人間であるがために、又人並すぐれて優しく同情のある心をもちながらも、蛇蝎視さあるゝ人間の姿と外貌とをもつて居るがために、餘儀なくそこを立去らねばならなかつた。

しかしこの哀れな執事よりももつと大變な訪問者が、タイモンの獨居の野蠻的平和を亂さうとして居つた。といふのはアシンズの恩知らずの貴族達が、優れたタイモンにしむけた不正義を心から後悔する日が來たのであつた。それはアルシバイアディズが、向ふ見ずの野猪のやうに、彼等の市の城壁

を攻めたて、激烈な包圍でもつて美しいアシンズを塵に埋めようとして居るのであつた。さてかうなると、忘れつぽい彼等の心にも、タイモン卿の昔日の武勇と軍事的手腕との記憶があり〳〵と浮んで來た。といふのは、タイモンは過去に於て、彼等の將軍であり熟練な軍人であつたので、全アシンズ人中で彼のみが、今彼等を威嚇して居るやうな包圍軍に對抗し得ると思つたからである。卽ちアルシバイアディズのすさまじい攻擊を擊退し得ると思つたのである。

この危急な場合に際して、タイモンを迎へるため元老院議員の代表者が選ばれた。彼等が困つた際には公に助けを求め、公が困つた際には彼等は公を殆んど見むきもしなかつたのである。彼等は恰も、自分達はその願に應じなかつたくせに人の感謝をあてにし、又彼等自らの最も無禮な不人情な待遇から、人の禮儀を要求する權利を持つてでも居るやうな調子であつた。

さて彼等は熱心に公に懇願し、涙を流して嘆願し、彼等の忘恩のためにあんなに近頃彼が出て行つた市を歸つて來て救つて呉れる樣に願つた。今は彼に、富も、力も地位も、過去の不正に對する償も、社會的の名譽も、一般的の愛も提供しよう、ただ彼が歸つて來て彼等を救づて呉れさへすれば彼等の體も命も、又富も提供しようと言つた。然し裸形のタイモン、厭人家タイモンは、もはやタイモン公でもなく、恩惠深い貴族でもなく、武勇の花でもなく、彼等の戰の防禦者でもなく、彼等の平和の飾りでもなかつた。アルシバイアディズが彼の國人を殺しても、それはタイモンの知るところではなかつた。

美しいアシンズを略取してその老人や小兒を殺しても、それはタイモンの喜ぶところであつた。公は彼等に向つてさう云つた。又騒がしい陣營の中で兵士等が持つて居るどのナイフでも、アシンズに於ける最も尊い人の命よりも價値あるものだと云つた。

泣いて失望して居る議員に向つてタイモンの與へた言葉はこれだけであつた。ただ別れの際に彼等に向つて、國人によろしく言つて呉れ、そして彼等に、その悲しみや心配を輕くし、猛烈なアルシバイアデイズの攻撃をふせぐ方法が只一つ殘つて居る。それを敎へてやらう。と云ふのは彼の同國人に對して、死ぬる前に一つの深切は喜んで盡すだけの愛情はもつて居るからと傳へて呉れと云つた。この言葉が議員達に少し元氣をつけた。彼等は市に對する彼の愛がよみがへつて來るのだと思つた。それからタイモンは、自分は一本の木を穴の近くに持つて居るが、近々それを切る事になるから、アシンズの人は、貴賤を問はずどんな人でも、苦しみから遁れたいと思ふ人は、自分がそれを切らないうちに、その木を味ひに來るように招待すると彼等に云つたが、それは彼等はやつて來て、その木に首を吊つて苦難をのがれてよいと云ふ意味であつた。

そしてこれはタイモンが人間に與へた多くの立派な恩惠中での最後のものであり、またこれは彼の同國人が公を見た最後の時であつた。それからあまり後の事ではなかつたが、一人の兵卒が、タイモンの住んで居た森から遠くない海岸を通つた時、浪打際に一つの墓を見た。その墓の上にはそれが厭

人家タイモンの墓であるといふ意味を表す碑銘が記されてあつた。

『世にありし間は生きとし生ける人を憎み、疫病の、卑劣漢すべてを滅し盡さん事を祈りて死せり』

彼は自殺したのであるか、或は只人生を厭ひ、人類に對して抱いて居た彼の憎惡が彼にかうした事をさせたのであるかそれは明瞭ではないが、しかし人々は皆その碑銘のふさはしさと、彼の死の主義一貫とに感心した。即ち生きて居たときと同樣に、人類を嫌つて死んだのである。そして人によつては、彼がその墓地として、大海の彼が、僞善多く表裏の多い人類の變り易い淺薄な涙を輕蔑して居るかのやうに、彼の墓を訪れては泣く海岸を選んだといふ事には意味があるといふ者もある。

ロミオウとジューリエット

ヴェロウナの町の二つの豪族と云へば、裕福なるキャピュレット家と、モンタギュー家であつた。この二つの家族の間には、昔からの不和があつて今はそれが益々激しくなり、彼等の間の怨恨は益々深く、双方の遠い緣者や從者や家來の者に迄及び、その結果折惡しくモンタギュー家の從僕が、キャピュレット家の從僕に出會つたり、またはキャピュレット家の者がモンタギュー家の者に出會ふやうな事があれば、必ず激しい口論となり、時には血を見る樣なことがあつた。かうして双方の者が偶然出會つて喧嘩を始めると云ふことは珍らしからぬ事で、ヴェロウナの幸福な平和狀態を搔き亂してゐた。

一夜、キャピュレット老公は盛大な晩餐會を催し、多くの美しい貴婦人や、高貴な紳士を招待した。ヴェロウナの町の花と謳はれる美人は殘らず出席し、客はすべてモンタギュー家の者でない限りは歡迎された。このキャピュレット家の饗宴にモンタギュー老公の子ロミオウの愛人ロザリンが出席した。モンタギュー家の者が、この集ひの中で見かけられると云ふことは危險なことではあつたけれど、(この青年貴公子ロミオウはその戀人に會ひ、それからヴェロウナの町の選りすぐつた美人と彼の戀人とを較べて見るために、假面をつけてこの集ひに行くことを友人のベンヴォリオに切りと勸められた。)そのヴェロウナの美人達に較ぶれば、今まで白鳥の如く思つてゐた戀人も、鴉のやうに思はれるであらうと

ベンヴォリオは云ふのであつた。ロミオウはベンヴォリオの言葉を全く信じ兼ねたけれど、ロザリン戀しさに、ついに行くことにした。ロミオウは實意もあり、情にも厚い男で、ロザリンを偲び夜もおち〳〵と眠らず、人をさけて一人戀人の身を思ふのであつたが、ロザリンの方では彼を輕蔑し、その愛に酬ゆるに、たゞ露程どの深切も愛情も示さなかつた。そこでベンヴォリオは、彼に數々の女を見せてやれば、この戀の苦しみから逃れる事が出來るかも知れぬと思つた。で、キャピュレットのこの饗宴へ、青年ロミオウは、ベンヴォリと二人の友人のマアクショウと連れ立つて、假面をつけて出掛けた。キャプュレット老公はよろこんで彼等を迎へ、未だ足指に豆を出さない婦人は彼等と舞踏するであらうと云つて、快活にうち興じ、わしも若い時には假面をつけて美しい婦人の耳に囁いたものだと云つた。そこで彼等は踊り始めた。するとロミオウは突然其處に踊つてゐる一人の婦人の勝れた美に心を打たれた。その婦人の美しさは、彼には、炬明に輝くことを敎へ、夜は、黑人が身につけて居る貴重な寶石のやうに見える樣に思はれた。用ゐるにはあまりに立派すぎ、地上にをくにはあまり貴重すぎる美しさ！（彼の言葉をかりて云へば）烏と群をなして居る純白の鳩のやうに、彼女の美しさ豐かさは彼女の友達にすぐれて輝いて居たのであつた。彼がこのやうな賞讃の言葉をのべて居る時、老キャピュレットの甥、ディボルトがそれをきいた。彼はその聲でロミオウであるといふ事を知つた。このディボルトといふのは烈しい激し易い氣質の男だつたので、モンタギュー家の者が假面にかくれて、彼の家族

の祭典を（彼の言葉で云へば）愚弄し、侮蔑するために來たのを我慢する事が出來なかつた。そこで彼は極度に怒り罵つて、若いロミオウをなぐり殺したいと思つたが、彼の伯父であるキャピュレット老公は、一つには來客に對する禮儀から、又一つには、これまでロミオウが紳士らぎ振舞をし、ヴェロウナの人々がみな、立派な節度のある若者だと褒めて居るために、その夜彼に如何なる毀害をも加へる事は許さなかつた。ティボルトは心ならずも忍耐するやうよぎなくされて、やつと我慢はして居たが、しかし、侵入をした返報にこのモンタギューの惡黨をいつかはきつと酷い目にあはせてやると云つた。

舞踏が終ると、ロミオウはその婦人の立つて居る場所を見つめた。そして假裝して居るのを幸、また假裝して居れば幾分かはさうした無遠慮も許される事と思つて、此の上もなく謙讓な態度で、彼女の手をとり、それを神の祠と呼び、若し彼が手を觸れてそれを汚したなら、恥じなければならぬ巡禮である彼は、其の罪を贖ふためにはそれにキスしようと云つた。

『立派な巡禮さん。』と彼女は云つた。『あなたの信仰は、あまりに鄭重で、あまりに上品すぎます。聖者は手をもつて居ますから、巡禮はそれに觸れてもよろしいけれど、キスをしてはいけません。』

『聖者には唇はないのでせうか。又巡禮にも唇はないのでせうか?』とロミオウが云つた。

『御座います。』と婦人は云つた。『祈禱に用ゐなければならぬ唇が御座います。』

『おゝ、ではわがなつかしい聖者よ、』とロミオウが云つた。『私の祈りを御聽き下さつて、それを御許し下さい。でないと私は絶望して了ひます。』かうしたなぞをかけあふやうな言葉や、戀の思やに氣を取られて居ると、その時婦人は母の方へ呼ばれて行つた。それでロミオウは彼女の母は誰であるかを尋ねて、比類のない美にあのやうに感心させられた婦人は、モンタギュー家の仇敵、キャピュレット老公の娘で、相續者である若いジューリエットである事が分つた、しかも彼はそれを知らずに敵に思をよせたのであつた。この事は彼を苦めたが、しかしそのために戀しい思をとり去る事は出來なかつた。ジューリエットもまた、その言葉を交した紳士がロミオウであり、モンタギュー家の者である事を知つた時に、少しも安らかな思はなかつた。と云ふのは、彼が彼女を戀したのと丁度同じやうに、あはたゞしく又無分別にロミオウを戀したのであつたから。そして、我が敵を戀し、一族の事情からすれば彼女が最も憎まねばならぬ處に、彼女の愛情を住はせねばならぬやうにするとは、何と云ふ不可思議な戀の誕生であらうと彼女は思つた。

夜が更けたので、ロミオウは連の者と共に立ち去つた。しかし彼等は間もなく彼を見失つてしまつた。といふのは、ロミオウはその心を殘して來た家を離れかね、ジューリエットの家の後にある果樹園の壁を跳び越えて内に入つたからである。

新しい戀人の事を考へ乍ら暫くそこに立つて居ると、ジューリエットが上の窓のところへ現れたが、

彼女の優れた美しさは、東にのぼる太陽の光の如く、窓から輝き出るやうに見えた。そして、かよはい光をもつて、果樹園をてらして居た月は、この新しい太陽の勝れた光輝を見て、悲しみのために青ざめて居るやうにロミオウには思へた。彼女はその頬を手でさゝへて居たので、ロミオウは情熱的に彼女の頬にふれるために、あの手にかける手袋になりたいと望んだ。その間彼女は自分一人であると思ひ、深い嘆息をもらして、

『あゝ！』と云つた。ロミオウは彼女が言葉を出したのをきいて恍惚となり、靜かに、彼女にきかれないやうに言つた。

『も一度ものを御言ひなさい、美しい天使。私の頭の上にゐらつしやるのですから、あなたは人の子が見れば倒れるといふ翼をもつた天の使のやうに見えるのです。』

彼女は自分の言葉をもれきくものがあるとは知らず、その夜の出來事が誕生を與へた新しい情が胸に滿ちて、(そこにその人が居るとは知らずに) 戀人の名を呼んだ。

『おゝロミオウ、ロミオウ！』と彼女は云つた。『何故あなたはロミオウなのです。私のためにあなたの父を否定なさい。あなたの名前をお拒みなさい。もしそれがおいやでしたら、たゞ愛を誓つてわたしの戀人とおなりなさい。そしたらわたしはキャピュレットを捨てませう。』ロミオウはそれをきいて、言葉をかけたいと思つたが、しかし彼女のいふことをもつと聽きたいと切望した。すると婦人はその

獨言 (彼女はさうと思つてゐた) を續け、ロミオウがモンタギュー家の者で、ロミオウである事を恨みそれから、彼が何か別の名前をつけるか、又はあの憎い名前を捨てゝ了へばよい、そしたら彼自らとは何の關係もないその名の代りに、彼女をすべて得る事が出來るのにと云つた。このやさしい言葉をきいては、ロミオウはもう默して居る事が出來ず、その言葉は直接に彼に向つて話されたのであつて、想像に描いて云はれたのではないかのやうに、その獨白の後をうけて彼女に向ひ、彼を戀人と呼ぶか、又は何とでも彼女の氣に入つた名前で呼んで欲しい。と云ふのは、ロミオウといふ名が彼女の氣に入らないなら、自分はもはやロミオウではないからと云つた。ジューリエットは庭園に男の聲をきいて驚き、夜陰に乘じて彼女の秘密をきいた者は誰であるか最初は分らなかつたが、彼が再び言葉をかけた時、彼女の耳は、そのロが發する言葉を百度とはきいては居なかつたけれども、戀する人の聽覺と云ふものは實に微妙なもので、彼女はすぐにそれがロミオウである事と知り、彼が果樹園の壁を越えたために面接して居る危險を告げ、もし誰か彼女の身内の者がそこで彼を見つけたらモンタギュー家の者であるために、彼の命はなきものとなると云つた。

『あゝ』とロミオウは云つた。『あなたの身内の人の二十振の劍にある危險よりも、あなたの眼にやどる危險がもつと怖ろしいのです。只一眼私を見て下さい。そしたら彼等の恨は物の數でもありませんあなたの愛なしに生きて厭な命をながらへる位なら、むしろ彼等の憎しみによつて命を終つた方が

よいのです。』

『でもどうして此處へ居らつしやいましたの。』とジューリエットが云つた。『誰があなたを案内致しました。』

『戀が案内して呉れました。』とロミオウが答へた。『私は水先案内ではありませんけれど、もしあなたが、はるかなる海の浪に洗はれる遠い國ほどの遠くに、私と離れてゐらつしやつても、あなたのためなら私は危險を冒して參ります。』

ジューリエットは、ロミオウに對する戀を、思はず口に出して云つた事を考へた時、夜のためにロミオウには見えなかつたけれども、彼女の顏には恥しさの紅がさしたのであつた。彼女は出來れば喜んでそれを取消したであらうが、それは出來ない事であつた。思慮ある婦人のならひとして、むづかしい顏をしたり、遠慮したり、愛を求める人を最初は手ひどく拒絶したり、又その愛が高潮して來て居る時には、その戀人に輕々しく又容易になびくものではないと思はせるために、よそ〳〵しくしたり內氣に見せり、無頓着を裝ふたりするものである。それは手に入れる事が困難であれば、そのものの價をます事になるからであるが、そのやうにジューリエットも、出來るならば喜こんで、儀式ばつて戀人をなれ〳〵しくは近づけなかつたでたらう。然し彼女の場合にあつては、拒絕をする餘地もなければ延引させる餘地もなく、また延期したり躊躇したりする求愛の慣習手段のいづれをも容れる餘地はな

かつた。自分の傍にロミオウが居るとは夢にも知らず、彼女自らの口で愛の告白をして居るのをロミオウはきいたのである。それで彼女は、その不可思議な立場のためにせんかたなく、正直に淡白に彼のきいた自分の言葉は眞實であると云ひ、彼に美しいモンタギューと云ふ名で呼びかけて、(戀は嫌な名前をもなつかしいものとするのである。)彼女が容易に心を打明けたのを、たしなみのない、はしたない心をもつて居るせいだと思はないで、その罪は(もし罪であるならば)あの樣に不可思議に彼女の想を口に出させた其の夜の事情のせいだと思つて呉れるやうにと願つた。彼女はそれにつけ加へて、彼女の彼に對しての行爲は、女性の習慣から考へれば嗜みの足らぬものであるかも知れないけれど、その嗜みがたゞ見かけだけのものであり、またその慎みが心にもない手段に過ぎない人達よりは更に眞實を盡すつもりであると言つた。

ロミオウは、かやうな立派な婦人に露ほどの不名譽でも負はせようとする事ほど、我心を遠く離れた事はないといふ事を天も照覽したまへと云はうとしたが、その時彼女は彼をとめて誓をしないやうにと乞ふた。といふのは、彼女の心は嬉しいけれど、此の夜約束するのは心苦しい事である。それはあまり輕卒で、あまり無分別で、またあまりに急激な事であると彼女は云つた。然し彼が熱心に其夜愛の誓を交換したいと願ふので、彼女は、自分はもう彼に要求されぬ前に誓はしてしまつて居ると云つた。それは彼女の獨白を彼がもれきいた時の事を指したのであつた。しかし彼女は再び誓をする樂し

みのためには、その時にした誓の言葉は取消してもよい、といふのは彼女の情は大海の如く無限に、彼女の愛は大海の如く深いからと云つた。

此の戀の語らひの最中に、彼女はその乳母に呼ばれて行つた。乳母は彼女と共に眠るので、もう夜あけに近いから、彼女は床に就いて居るべき時だと思つたのであつた。けれども彼女は急いで立ち戻り、ロミオウに向つて二言三言云つた。その要領は、もし彼の愛が立派なものであり、又その目的が結婚であるなれば、明日使を差しあげて二人の結婚の日どりを定めよう。さうした時に彼女の運命を彼に任せて、わが夫として何處までも彼に隨順して行かうと云つた。二人が此事をとりきめて居る間に、ジューリエットは度々彼女の乳母に呼ばれ、入つては又歸り、行つては又戻りした。といふのは彼女は、若い娘がその飼つて居る小鳥を心配して、手から離して一寸の間飛ばせてやつては、また絹糸をもつて引戻すやうに、ロミオウを彼女から離して行かせるのが嫉ましいやうに思へた。そしてロミオウも彼女と同じやうに別れて行くのが嫌であつた。と云ふ譯は、戀する人にとつての最も樂しい音樂は、夜お互の言葉をきく事であるから。然し彼等はお互に其夜を樂しく眠り休息するやうにと言ひ交して別れた。

二人が別れた時はもう夜があけようとして居た。そしてロミオウは戀人のことや、嬉しかつた逢瀬の事のみ考へて眠る氣になれなかつたので、家へは歸らず、僧ローレンスに逢ふために、近傍にある

僧院へと歩みを向けた。この善良な僧侶は已に起きて勤行をして居たが、若いロミオウがこんなに早く訪れて來たのを見て、彼が昨夜眠らないで、何か若氣の戀のなやみのために起きて居たのだと推察した。彼がロミオウの睡眠しない原因を戀に歸したのは正しい推測であつたが、彼の戀の相手の事に就ては推量を誤つた。といふのは、彼はロミオウがロザリンの事を考へて、眠る事が出來なかつたのだと思つたからである。しかしロミオウがジューリエットに對する新しい戀をうちあけて、その日二人を結婚させて呉れるやうにこの僧侶の助力を乞ふた時、この僧侶はロミオウの心が急に變つたのを見て一寸驚いてその眼と手を擧げたのであつた。といふのは彼は、ロミオウのロザリンに對する戀や、彼女の拒否に對しての彼の怨言の數々をよく知つて居たからである。で僧侶は、若い人達の戀は本當にその心の中にあるのではなくて、その眼にあるのだと云つた。然しロミオウがそれに答へて、僧侶自身さへ、彼が已を愛しないロザリンに溺愛して居るといつてしば〳〵彼を叱つたといふこと、然るにジューリエットとは愛し又愛されて居るといことを云つたので、僧侶も或程度迄彼の云ふ事を承認し、又若いジューリエットとロミオウとの結婚が、幸にしてキャピュレット家とモンタギュー家の長い間の確執を和解させるよすがとなるかも知れないと考へて——この兩家と親しくして來て、空しく屢々仲直りをさせようと調停を試みた事もあるが、此の僧侶ほど兩家の確執を、悲しんで居る者はなかつたので——半は策略のために、半はその云ふ事ならば何事も嫌だといへない程にロミオウを愛して居たため

に、此の老僧は二人を結婚させて手をとらせる事を承諾した。

今やロミオウは本當に幸福であつた。そしてジューリエットも、約束通りに彼女が使はした使者から彼の意向を知り得たので、早朝に僧ローレンスの庵を訪れ、そこで二人の手は神聖な結婚によつて結び合はされ、この善良な僧侶は、此の結婚に天が幸せんことを、またこの若いモンタギューと若いキャピュレットの結婚によつて、兩家の古き不和と、長い間の軋轢とが消え去らんことを祈つた。

式が終るとジューリエットは急いで家にかへり、夜になればロミオウが、前夜二人で會つた果樹園に逢ひに來やうと約束したその夜の來るのを待ちもどかしがつて居た。そしてその間の時間は彼女にとつて、丁度なにか大祭日の前夜、翌朝になる迄は着る事の出來ぬ晴衣を新調して貰つた子供が待遠しく思ふのと同じように、待遠しかつた。

同じ日の晝頃、ヴェロウナの街を歩いて居たロミオウの友人ベンヴォリオウと、マアキュシャウとは、性急なティボルトが率いて居るキャピュレット家の一行にあつた。このティボルトと云ふのは、キャピュレット老公の饗宴に於て、ロミオウと爭鬪しようとした、あの激し易いティボルトである。彼はマアキュシャウを見て、モンタギュー家の一人であるロミオウと交つて居る事をむきつけに詰つた。マアキュシャウもティボルトと同じやうに、熱も青春の血氣も持つて居たので、いくらか鋭く彼の詰問に對してやりかへした。そこでベンヴォリオウが言葉を盡して二人の怒を和げようとしたのにかゝはらず、喧嘩を始め

たが、丁度その時當のロミオウがそこに通りかゝつたので、烈火のやうに怒つて居るティボルトは、マアキュシャウの方はさし置いて、ロミオウの方に轉じ彼を侮蔑して惡黨と呼んだ。ロミオウは他の人とならともかくもティボルトとの喧嘩だけは避けたいと望んで居た。その譯はティボルトはジューリエットの緣者であり、彼女に大層好かれて居るからでもあつたが、またこのモンタギュウの若君は天資聰明で、優しく、決してこの家族間の爭に加はつた事はなく、またキャピュレットと云ふ姓は、自分のなつかしい妻の姓であつたので、今は憤怒を起さしめる合言葉といふよりはむしろ、怨恨を和げる呪文になつてゐた。そこで彼はティボルトを說かうと試み、モンタギュー家の者ではあるけれども、その名を呼ぶのに人知れず喜びを感ずるかのようにやさしくキャピュレット殿と呼びかけた。しかしモンタギュー一族を憎む事地獄を憎むが如きティボルトは、道理に耳をかさないで劍を拔いた。するとマアキュシャウは、ロミオウがティボルトと和解しようと欲して居る心のうちを知らないで、彼のこの忍耐を一種の墮弱な不名譽な屈從であると見做し、樣々な侮蔑の言葉を與へてティボルトを激昂させ、彼との最初の喧嘩を遂行させるやうにした。で二人は戰ひ、遂にマアキュシャウは致命傷を受けて倒れたが、その間中ロミオウとベンヴォリオウは爭鬪者等を引分けようと努力したけれど無駄であつた。マアキュシャウが殺されたので、ロミオウはも早我慢が出來なくなり、ティボルトが彼に向つて云つた惡黨といふ名で呼び返し、二人は爭鬪を始め、遂にティボルトがロミオウのために殺された。此の殺伐たる騷動が白晝ヴェ

ロウナの眞中で起つたので、それをきいて、大勢の市民が直ちにその場處へと集まつたが、その中にはキャピュレット、モンタギュー兩老公も共の夫人と共にまぢつて居た。暫らくするとヴェロウナの君公も親しく臨場されたが、彼はティボルトが殺したマアキュシャウの親戚であり、かつその政治の平安を、しば〳〵モンタギュー、キャピュレット兩家のかうした喧嘩によつて亂されるので、犯罪者に對して嚴重に法を實施しやうと決心して來た。ベンヴォリオウは、此の爭鬪の目擊者であつたから、君公より事の起りを語るやうに命ぜられて、ロミオウが關係した部分は云ひやはらげ且つ辯護して、友人に害を與へないようにし、出來るだけ事實を離れないやうに話した。キャピュレット夫人は、甥のティボルトを失つた悲しみのあまり、どこ迄も復讐したいと思つて、君公に向つて彼を殺した者を嚴罰に處せらるゝよう、又ロミオウの友人であり、モンタギュー家の一人であるために不公平な事を云ふベンヴォリオウの陳述に重きを置かれないやうにと勸めた。かくして彼女は自らの婿に不利益な辯論をしたのであるが、しかし夫人はまだ彼が自分の婿であり、ジューリエットの夫であるといふ事を知らなかつたのである。又一方、モンタギュー夫人は子供の生命のために辯護し、且つマアキュシャウを殺して、すでに法の保護を受ける權利のないティボルトの命をロミオウがとつたからとて、何も罰に相當するやうな事をしたのではないと幾分筋目のたつた論をした。君公はかうした女達の感情的な叫びに動かさるゝ事なく、注意深く事實をしらべて宣告を下した。此の宣告によつてロミオウはヴェロウナから追放されたのである。

若いジューリエットにとつては何といふ辛らい報知であつたらう！彼女は花嫁となつてまだ數時間しか經つて居なかつた。そして今はこの法令によつて永遠に離婚されたように思へた！彼女は此の報知を聽いた時に、最初はロミオウに對する怒の念を抑へる事が出來なかつた。彼は彼女の大切な從兄弟を殺したのである。彼女は彼を美しい暴君、天使のような惡魔、强慾な鳩、狼の性質をもつた小羊、花のやうな顏をもつて隱した蛇の心、其の他一種予盾した意味の名前で呼んだが、それは愛と憤りの間に板ばさみになつて居る彼女の心の悶へを表したものであつた。しかし遂には愛が勝利を得て、從兄弟をロミオウに殺された悲しみのために泣いた涙は、ティボルトに殺されるかも知れなかつた夫が生きて居ることを喜ぶ涙とかはつた。それから更に新しい涙が湧いたが、それは全部ロミオウの追放を悲しむ涙であつた。その追放といふ言葉は多くのティボルトの死よりも、彼女にとつては更にぎよつとするやうな言葉であつた。

ロミオウは、爭鬪の後、僧ローレンスの庵に隱れて居て、そこで始めて君公の宣告を知つたのであるが、その宣告は彼にとつては死よりももつと恐ろしいものであつた。彼にはヴェロウナの城壁以外に世界はなく、ジューリエットの見えない處で生きて居る事は迚も出來ないやうに思はれた。ジューリエットの住んで居る處に天國はあり、それ以外のところはすべて煉獄であり、苛責の場處であり、地獄であつた。この深切な僧侶は、彼の悲しみに對して慰安の哲學を說かうとした。然しこの狂氣のやうにな

つて居る若者は、さうした事は少しもきゝ入れず、狂人のやうにその髪をむしり、地上に身を投げて横たはり、自分の墓の寸法をはかるのだ等と云つた。然し彼はなつかしい妻の手紙を見ると此の見苦しい狀態から目醒めた。このため彼は幾分落付いたので、僧侶はそれを利用して、彼がこれ迄に示した男らしくない弱さを諫めた。彼はティボルトを殺した、それさへあるに彼自らを亦殺して彼を命に生きて居る戀しい妻を殺さうとするのか。人間の尊い姿も、それを確固と維持して行く勇氣を缺けば蟻細工に過ぎないと僧侶は云つた。彼は死を招くような事をしたけれど、法律は彼に對して如何にも寛大で、君公によつて只追放を宣告されたのみである。彼はティボルトを殺した。然しティボルトが彼を殺したかも知れぬのである。そこにも一種の幸福がある。ジューリエットは生きて居る。そして（望外にも）彼のなつかしい妻となつて居る。此點まで彼はこの上もなく幸福である。僧侶が證明しようとしたかうした惠みのすべてを、ロミオウは不機嫌で不行儀な賣女のやうに、氣にとめようともしなかつた。それから僧侶は、絶望するやうな人間は淺猿しい死にかたをするものであるから、彼に氣をつけるやうにと云つた。そしてロミオウの心が少ししづまるのを待つて、僧侶は彼に、其の晩行つて密かにジューリエットに別れを告げ、そこから直にマンチュアに行き、そこに滯在して、僧侶が適當な時期を見て二人の結婚を公表する迄まつよう、その公表は兩家を和解させる喜ばしい手段となるかも知れぬからと說いた。また君公も其のうちには彼を赦すだらうし、彼は行く時の悲しみに二十倍もす

る喜びをもつて歸るようになる事を疑はないと云つた。ロミオウは僧侶のこの聰明な勸告をうけいれて、妻を訪ね、其夜は彼女の許に過し、夜あけにマンチュアにむけて旅立つ事にして、僧侶に別れを告げた。そのマンチュアへ、深切な僧侶は折々手紙を送つて、ヴェロウナの出來事を知らせる約束をした。

其夜ロミオウは、前夜ジューリエットの戀の告白をきいた果樹園から密かに其の室へと通されて、なつかしい妻と共に過した。それは歡喜以外の何物をも交へぬ夜であつた。しかしこの夜の愉快も、戀人達が相逢うて得た喜びも、近づく別れと、前日の悲しい出來事とのために薄くされたのであつた。待たぬ夜あけはあまりにも早く來るように思はれ、ジューリエットは雲雀の朝の歌をきいた時に、それは夜歌ふ夜鶯であると强いても思はうとした。だが歌つたのは疑ふ餘地もなく雲雀であつて、その歌は不調和な不愉快なものに彼女には思へた。そして東にあらはれた日の光は、戀人達が別れねばならぬ時である事を明かに示した。ロミオウは重い心を抱いて愛する妻に別を告げ、マンチュアへ行つたら、一時間ごとに手紙を書いて彼女に送らうと約束した。そして彼が彼女の室の窓から降りて、彼女の眼の下にある地面に立つた時、彼女は悲しい前兆をよむやうな心の狀態にあつたので、彼女には彼が墓の底に居る死人のやうに見えた。ロミオウの心にもまた何だか不安なものがあつた。しかし彼は今大急ぎで出發しなければならなかつた。と云ふのは、夜があけてからヴェロウナの城壁内に居るのを發見

さるれば、彼の命はないのであつたから。

これは不幸な戀人達の悲劇の始まりにすぎなかつた。ロミオウが行つてまだ日數もさう經たない内にキャピュレット老公はジューリエットの緣談をもち出した。彼女が已に結婚して居るとは夢にも知らないで彼女の夫にと撰んだ人は、パリス伯であつた。彼は勇敢な若い貴公子で、若し彼女がロミオウを見て居なかつたならば、若いジューリエットにふさはしくない相手ではなかつた。

ジューリエットは父の申出をきいて驚き悲しみ、どうしてよいかと當惑した。彼女は結婚するにはまだ年齢が若すぎると云ふ事、最近ティボルトが死んだため非常に落膽したので喜ばしい顏をして夫を迎へる事が出來ないといふ事、またティボルトの葬儀がすむかすまぬかに結婚の式を擧げると云ふ事は、キャピュレット一家が如何にも禮儀をわきまへないやうに見えるからなぞといふ理由をのべて、其をとりやめたいと云つた。彼女は結婚を否とするあらゆる理由を擧げたが、眞の理由、卽ち彼女は已に結婚して居るといふ事だけは云はなかつた。キャピュレット老公は彼女の嘆願には耳をかさず、斷乎として、來る木曜日にパリスと結婚させるから用意をせよと云つた。そして老公は、ヴェロウナの最も氣位の高い乙女でも早速に承諾するような、富裕で若くて、身分のある夫を娘のためにみつけてやつたのだから、彼の解釋に從へば、內氣を裝ふため、彼女が自らの幸運に故障をさしはさむのを見て我慢がならなかつたのである。進退谷まつた、ジューリエットは、困つた時にはいつも顧問役になつて呉れる

あの深切な僧侶を賴つて行つた。すると僧侶は彼女に向ひ、絕對絕命の方法を取る決心があるかとたづねると、彼女は自分のなつかしい夫が生きて居るのに、パリスと結婚するよりはむしろ生きた儘墓に葬られた方がよいと答へたので、それでは家へ歸つて嬉しさうな樣子をし、父の希望に從つてパリスと結婚する事を承諾し、翌日の夜、卽ち結婚の前夜になつたら、彼が彼女に與へる藥壜の中にあるものを飲め、さうするとその効能があらはれて、それを飲んでから二十四時間の間は冷たくなつて死んだやうになる、朝になつて花婿が彼女を連れに來て見ると、彼女は見たところ死んで居る、そこで彼女は、國の習慣に從つて、何も覆はずに棺に乘せられて、祖先代々の墓地に埋葬されるために運んで行かれるといふ事を敎へ、若し彼女が女々しい恐怖を去つて、この恐ろしい試みをする事を承知するならば、此の藥を呑んでから四十二時間（それがこの藥の確實な有効期間である）經てば、恰も夢から醒めるやうに、よみがへつて來るものである。そして彼女がまだ醒めない先に、彼は彼女の夫に事の次第を知らせ、其夜來て、そこから彼女をマンチュアに連れて行かせるやうにしようと云つた。戀の爲め、又パリスと結婚する恐怖のために、ジューリエットは、此の怖ろしい試みをする力を得へられ、彼の指圖に從ふ事を約し、僧侶から藥壜を受取つた。

僧庵を出て、彼女はパリス伯の若君に會ひ、程よく伴つて、彼の花嫁となる事を約束した。これはキャピュレット公夫妻にとつて嬉しい報知であつた。それはこの老人を若返らせたやうに見えた。そし

て伯爵との結婚を拒絶して、ひどく彼の機嫌を損じて居たジューリエットは、今父の命に從ふ事を約束して、再び元の御氣に入りの子となつた。そこで、近づいた婚禮の準備で家中は万事万端混雜を極めたヴェロウナでは、これ迄になかつたやうな祝宴の準備をするために費用の問題なぞは考慮にも入れられなかつた。

水曜日の夜ジューリエットはその液を飲んだ。彼女は、僧侶がロミオウと彼女を結婚させたゝめに蒙るかも知れぬ譴責を避けるために毒藥を與へたのではあるまいかとか、否彼は聖人として知られて居る人であるとか、ロミオウが自分を迎へに來るより前に醒めるだらうかとか、またキャピュレット家の死んだ人々の骨に滿ちて居る地下室、血にまみれたティボルトが屍衣を被り腐敗して横たはつて居る場處、その場所の怖ろしい光景は彼女を發狂せしむるに足るものではあるまいかとか、また死體の埋められて居る場處にあらはれる亡靈について是迄きいた種々の話を思ひ出したりして、種々の疑懼の念を抱いたのであつた。しかしそれでもロミオウに對する愛と、パリスに對する嫌惡とから彼女は必死になつてその藥を飲み、人事不省に陷つた。

若いパリスが花嫁の眼を醒すために音樂を奏して朝早くやつて來た時、彼女の部屋には、生きて居るジューリエットは居ず、もはや事切れた死體となつた主がゐるといふ悲慘な光景を示した。せつかくの希望に對して何と云ふ死であらう！何と云ふ混雜が家中に起つた事であらう！可哀相にパリスは、

まだ婚禮もしない先に最も憎むべき死が、彼の手より花嫁を奪ひ、彼と離別させたのを慟哭したのであつた。しかしなほ哀れなのは、キャピュレット老公夫妻の慟哭をきく事であつた。二人はたゞこの一人、その喜びともなり慰めともなつたこの不憫な愛兒一人をもつたのみであつたか、丁度この注意深い兩親が有望で好都合なる結婚によつて、娘が出世する（さう二人は思つた）のを見ようと思つて居たやさき、殘酷な死が彼女を彼等の見えぬところへ奪ひ去つたのであつた。さて今は祝典のために準備されたあらゆるものは、悲しい葬儀に用ゐる樣にその用途をかへられねばならなかつた。婚禮の御馳走は、悲しい葬ひの饗應とかはり、花嫁の進行曲は陰氣な哀悼歌とかはり、陽氣な樂器は憂鬱な鐘とかはり、又花嫁の通る路に撒かれる筈であつた花は、今はその屍の上に撒かれる花となつた。今は彼女を結婚させる僧侶ではなく、彼女を葬むる僧侶が必要となつた。彼女は教會に連れて行かれは行かれたが、それは生けるものの樂しい希望を增大するためにではなくて、悲しい死者の數を增すためにであつた。

不吉な知らせはよき知らせよりも常にはやく傳はるものであるが、今や、妻のジューリエットが死んだと云ふ悲しい話が、マンチュアのロミオウのところへ傳はつたが、それは、僧ローレンスより、その葬儀はたゞ伴りの葬儀、卽ち死の眞似狂言であつて、彼のなつかしい妻は、その物凄い場處からロミオウが救ひ出しに來て呉れるのを待ち乍ら、暫らくの間墓の中に横たはつて居るのであると云ふ事を彼に

知らせるために遣はした使の者がまだ到着しない前だつたのである。その話をきくほんの少し前迄、彼は常になく樂しく陽氣であつた。彼はその前夜夢を見た。夢の中で彼が死んで居ると（死んだ人が考へるとは不思議な夢であるが）彼の妻がやつて來て、彼の死んで居るのを見、彼の唇にキスをして生命をふき入れ、彼が蘇生して見ると、皇帝になつて居た！、恰度そこへヴェロウナから一人の使者がやつて來たので、それはきつと夢が豫告したよき知らせを確證するものであらうと彼は思つた。然しそれはこの樂しい夢の反對で、本當に死んだのは彼の妻であつて、それは如何なるキスをもつてしても蘇生させる事の出來ないものであつた。その事を知ると、彼は馬を用意するように命じた。といふのは彼はその晩ヴェロウナに行き、墓の中に居る妻に逢はうと決心したからである。死者狂ひになつて居る人間の心へは魔がさす事が速いものであるが、彼はふと一人の藥劑師の事を思ひ浮べた。マンチュアの其の店の前を彼は近頃通つたのであるが、餓死に瀕して居るやうに見えるその男の窮乏した樣子や、汚い棚の上に空箱の並べてあるその店のみぢめな有樣や、其の他極端に難澁して居る證跡やを見て、その當時、（或は彼自らの不幸な生涯も、かやうな絶望的の結末に際會するかも知れぬと云ふ多分幾らかの憂慮も抱いて）彼は云つた事があつた。

『若し誰でも毒藥が欲しいなら、マンチュアの法律では、それを賣れば死刑に處せらるゝが毒藥を賣つて呉れるみぢめな人間はこゝに住んで居る』と。彼のかうした言葉が、今彼の心に浮んだのであ

る。彼はこの藥劑師をたづね出した。藥劑師は、ロミオウが彼の貧乏が抵抗し得ない程の黃金を差出した時、いくらか躊躇するふりをした後、ロミオウに一種の毒藥を賣つた。その毒藥は、もしそれを呑めばたとへ二十人力をもつて居ても、忽ちに死んでしまふと藥劑師は云つた。

その毒藥を携へて彼はヴェロウナに向けて出發した。それは、墓に居るなつかしい妻の姿を一目見て彼の眼を滿足させた後、毒を呑んで彼女の傍に眠らうと云ふ目的であつた。彼は眞夜中にヴェロウナに到着し、中央にキャピュレット家の古い墳墓がある墓地を訪ねた。彼は松明と、鍬と、螺旋廻とを用意して居た。そして墳墓を扭ぢあけようとして居る時、彼は或る聲によつて遮られた。その聲は、陋劣なモンタギューと呼びかけ、「不法な行爲をやめよと命じた。」それは若いパリス伯であつたが、彼は時ならぬ眞夜中に、彼の花嫁となるべき筈であつたジューリエットの墓に花を撒き、それを抱いて泣くために來たのであつた。彼はロミオウと死んだジューリエットとの間に如何なる關係があつたかは知らなかつたけれど、彼がモンタギュー家の一人であつて、あらゆるキャピュレット家の者に對しては（彼の考では）公然の敵である事は知つて居たので、伯は彼が屍に對し何か屈辱を與へるため夜に乘じて來たのであると判斷した。それ故に怒つた語調でやめよと云ひ、且つヴェロウナの法律によつて、市の城壁内に居たならば死刑に處せらるべき罪人として、捕縛しようとした。ロミオウはパリスに立ち去れと云ひ、そこに埋められて居るティボルトの運命を例に引いて、彼の怒を刺戟し又はよぎなく伯爵を殺

すように強いて、更に罪を重ねさせて呉れるなと注意した。然し伯爵は侮蔑してその忠告を拒絶し、重罪犯人として彼に手をかけたが、ロミオウはそれに抵抗し、二人は闘ひ、遂に伯爵は斃れた。ロミオウが、松明のたすけによつて、彼が殺したのは誰であるかを知つた時、即ちそれが（マンチュアから來る途中できいたのであるが）ジューリエットと結婚する事になつて居たパリスである事を知つた時に、彼は、不幸がつくつた友人の一人として死んだ若者の手をとり、光榮ある墓、即ちジューリエットの墓の中に埋めてやらうと云つた。そのジューリエットの墓を彼は今ひらいたのである。そこに彼の妻は眠つて居た。死さへも比類なく美しいその容色を變ずる力をもたない乙女であるかのように、又は死もその容色に迷ひ、あの痩せて無氣味な死の神が自分の樂しみのためにそこに置いて居る乙女であるかのやうに眠つてゐた。といふのは彼女はあの魔醉藥を飲んで眠りに落ちた時と同じやうに生々として居り、美しく榮えて居たからである。そして彼女の近くにはティボルトが血にまみれた屍衣に包きれて横たはつて居た。ロミオウはそれを見ると、生命のない彼の屍に向つて許しを乞ひ、又ジューリエットのために彼を從兄弟と呼んで、今彼の敵を殺して彼に厚意を示さうとして居ると云つた。そこでロミオウは妻の唇に接吻をして最後の別れを告げ、それから例の藥劑師から買つた毒を呑んで、彼のものうき體から、彼の不幸な運命の重荷を振ひ落したのであつた。その毒藥の効能は、ジューリエットが飲んだ魔醉藥とは異り、確實な致命的なものであつた。今その毒藥の役目は殆んど終らうと

欠